

影絵

箱女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

宮永照についてのお話です。決して明るい話ではありませんので、お読みになる際はご注意ください。

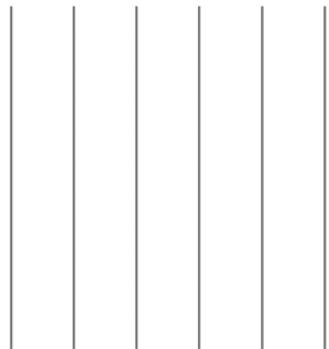
半年に一度更新されればラッキーぐらいの感覚でお願いします。

目次

十	九	二年生編	八	七	六	五	四	三	二	一	一年生編
129	117		104	89	73	60	46	30	15	1	

二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十三	十二	亦野誠子による手記	十一
287	278	267	255	243	230	216	202	189	177	165	153	141

二十八
二十七
二十六
二十五
二十四
二十三



342 335 326 316 309 300

一年生編

一

誤解を招くことを恐れずに言えば、結果として宮永照は弘世董を深く傷つけたのかも
しれない。あるいはそれは傷という生々しいものではなく、彼女の心の底の底に静かに
降り積もる澱のようなものと言ったほうが適切かもしれない。ただどちらにせよ、宮永
照が弘世董という一個人の人生に対して影響を及ぼしたことは間違いないところだ。
それが良きにつけ悪しきにつけ。

ちいさなちぎれ雲がぽつりぽつりと浮かぶきれいな青空と、見事に咲き誇る白にわず
かな桃色を混ぜたソメイヨシノの花弁が目眩しい。見渡せば真新しい制服に未だに
着られている感じのある少年少女たちが、親や友人と、あるいはひとりどこか緊張し

た面持ちをしたまま体育館へと向かっている。次々と体育館へ入っていくうちに後ろからもまだまだやってくるようで、ざっとでさえその数は掴めそうにない。また新たな生徒が校門から入ってきたようだ。

長く艶のある、真つ直ぐな髪が特徴的な少女である。この春から高校生になるというのに、既に女性的な体をしている。だというのに制服の上からでも油断のない引き締まった体でもあるというのがはつきりと見てとれる。髪が長いということと判断が多少は鈍るものの、おそらく何らかのスポーツをやっているだろうことを窺わせる外見である。顔立ちは整っており、凜としたという表現がしつくり来るだろうか。あるいは眼に対して鋭すぎるといふ印象を持つ者もいるかもしれない。

つむじを糸で引かれたようにびんと背筋を張って歩く姿は、その身長もあつて人目を惹かずにはいられなかった。もし初対面の相手に年齢を当てさせれば、多くが実年齢より上だと言ってしまうだろう。年頃の少女には疎ましくてしようがないものだろうが、大人びた雰囲気というものは努力で消し去れるものではない。

体育館の入り口の脇には “入学式” と大きく書かれた板が貼り付けられている。

入学式では体育館の入り口で渡されたプリントからそれぞれが自身のクラスと出席番号を探し、それと一致する席を自分で見つけることになっている。四百人に届こうか

という人数規模の中で見つけるという大変に聞こえるが、実際はクラスごとにわかりやすく分けられているためそこまで難しい話ではない。席についてさえしまえば後はじつとしているだけでいい。いわゆる偉い人の話を真面目に聞いてもいいし、聞いているふりしてもいい。誰もがそういう話をきちんと聞いているだなんていうのは幻想だ。場を掌握して聞かせるような演説をうてる人間は基本的に教職になどつかないものである。

滞りなく式は終わり、新入生たちは各自のクラスへと並んで歩いていく。校内に入った段階で、早くも親しげに話をしている者もいるようだ。どのみちこれから自己紹介があるからまあいいか、と長い髪を揺らして弘世董は歩きながら校舎内を観察し始めた。

自己紹介ほど退屈なものはない、と董は思う。一度に四十人近い人物の顔と名前を記憶するのは難しいし、それ以上の情報となるとさらさら覚える気にすらならない。せいぜいが出席番号が近くて席の近い子の名前と、あとは極めて強い印象を残した人くらいしか覚ええない。もちろん董は自分がそれになるつもりはないから無難な自己紹介の準備をしている。名前と入るつもり部の活くらいを言っておけば十分だろう。他の人がいることも考えると、あまり時間をかけるのも賢いとは言えない。そんなことを考えながらぼんやりと他人のものを聞いていると、思っていたよりあっさり董の番がやって

きた。

「それじゃあ次は弘世さん、お願いしますね」

す、と立ち上がることで担任の呼びかけに応じる。当たり前のことだが教室中の視線が董のもとへと集まる。もともと董は注目されやすい容姿や立場だったりののだが、いつまで経つてもこれだけは慣れない。内心ではうんざりしていたが、外面にはそれをおくびにも出さなかった。

「弘世董です。麻雀部に入るつもりです。どうぞよろしくお願いします」

董はそれだけ言うときつきと席についた。これ以上言うべきことがあるとは思えないし、そうであるならば立っている理由もないだろう。なにやらひそひそ話が増えたよくな気がするが、自分が目立ったあとにそう感じるのは仕方のないことで、それは短期的な自意識過剰というやつなのだろう。董はそう思うことにしている。

先ほど入学式前にもらったプリントを眺める。自己紹介は出席番号順だから、次は董の後ろの席に座る子のはずだ。自分の名前の下に書いてあったのは「宮永照」というものだった。後ろを振り返ってみるとその子はどう見ても女の子である。いまひとつ読み方に自信が持てないが、それはすぐにわかることだ。珍しい読み方でもするのだろうか、といういろいろ予想を立ててみる。すぐに董は自省する。どうも今日はくだらないことばかりが気にかかる。緊張しているのだろうか。あれこれと考えていると、後ろ

の席から椅子を引く音が聞こえた。

「……宮永照です。ええと、麻雀部に入ろうと思っています。よろしくお願いします」
赤をほとんど黒に見えるくらいまで暗く煮詰めたような髪の色をしていた。右側に
くせ毛なのか寝ぐせなのか判別のつかないぴんと跳ねた部分がある。髪自体は肩まで
届かないくらい長さだ。他には飛び抜けて目立つ特徴はない。たしかに顔立ちには均
整がとれているが目の醒めるような美人というわけではないし、体つきもすこし細身か
なという程度で実に高校一年生然としている。何の変哲もないただのクラスメイト。
一年生が終わったときにクラスで聞いてみたら多くの人がそう答えるであろうタイプ
の子である。これで趣味が読書とか音楽鑑賞だったら満貫だな、などと董はまたくだら
ない方向へと思考を飛ばしていた。それは見下すだとか馬鹿にするとかいったそうい
うものとはまったく無縁の、ただの感想だった。

白糸台高校における高校生活のオリエンテーリングを終えれば、授業の開始とともに
部活の勧誘期間が始まる。はじめから入る部活を決めている生徒は配られた入部用紙
に必要事項を記入して、さっさと入部を済ませている。董も照もそのうちの一人であ

る。用紙が配られたのは入学式から一週間ほど経ってからのことで、そのころには董はそれなりに話せる友人を何人か作っていた。董は席の関係と同じ部に入るということもあつて、照とはコミュニケーションを取りながら観察をしていた。董からの印象は表情の変わらない内気なヤツだな、というものだったがクラスではどうにかやれているようであつた。

まだ入部用紙が配られる前、すでに麻雀部に入ることと表明している新入生たちの間でひとつの噂が流れていた。いわく、今年の新入生の中に特待生がいるらしい。はじめに聞いたときは興味を持ちこそしたが、すぐにデマだろうと董は思い直した。たしかに白糸台は激戦区である西東京地区にあつて強豪校と呼ばれているくらいなのだからそういう制度自体はあるだろう。だが董も中学時代は全国でそれなりに鳴らしている。さすがに同じ東京の辻垣内や大阪の愛宕、江口と比べれば落ちるのは認めざるを得ないが。しかし特待生に選ばれるというのはそういうレベルの選手であつて、そんな上位のプレイヤーが同じ学校にいれば董が見落とすはずがなかった。仮に董が見落としたとしても、有名な選手のはずなのだから誰かが見つけて騒ぐに決まっている。考えてみればひどく単純な理屈である。特待生などいないのだ。

董は同じ部に入るといふ照にその話題を振ってみたが、彼女は片眉さえ動かさなかつた。芯から興味なさそうに、そう、とだけ呟いた。その表情の変化の無さに、董はむし

ろ感心さえしていた。とくに彼女から頑固な印象は受けませんが、それなのにこの鉄面皮ぶりは珍しい。どこか欠落しているのではないかとすら思えるようなものだった。

その日の空は薄曇りで、灰色というには心許ない色をした雲が空一面を覆っていた。天気予報では日付が変わるころから雨が降り始めると言っていたが、念のため折り畳み傘を鞆に入れておく。董はこういう準備に余念がない。駅から学校まで歩いた感じでは降りそうな気配はないが、さすがに何時間もあとのこととなると予想がつかない。考えてもどうしようもないことは頭の端に押し込んで、董は今日から始まる部活のことを考え始めた。

ホームルームの間に帰宅や部に行く準備を整えていたクラスメイトたちが、挨拶を終えると同時に動き出す。教室に二つしかない出入口を見てみれば多少の混雑を起こしていた。ああいうところに飛び込む気にはなれないから、董は窓の外に目を向ける。朝よりすこし灰色が濃くなったように感じられた。これは折り畳み傘を持ってきたのは正解かもしれないな、と思いつながら出入口の方を見ると、まだ混雑は続いているようだった。もう二、三分は経たないと出られないらしい。

董と照のふたりが連れだつて廊下を歩いている。目指すのはもちろん麻雀部だ。他にも麻雀部に入ったクラスメイトはいたのだが先ほどの混雑に突っ込んでいったら

く、通行がラクになってから出たのはふたりだけだったのだ。

「なあ宮永、お前中学では麻雀やってたのか？」

「……部活ではやってない。身内と、あとたまに雀荘でやってた」

まるで表情が変わらないとはいえ意思疎通ができないわけではない。たびたび董が照に話しかけるのも、要素のひとつとして返答が端的でわかりやすいものだったから、というのがあった。

白糸台高校の廊下は長い。一学年に十ものクラスがあるのだから当然と言えば当然だが、端から端までの長さは百メートルなどゆうに超えている。部活棟があるのは十組の先の渡り廊下を曲がった先にあるから、たとえば一組はすこし面倒なのだ。董と照は三組なので不利な側に分類される。なぜか四組と五組の間にある中央階段を通り過ぎて思うのは、部活棟に向かう生徒の多さについてだ。これなら部活動が盛んといっても嘘にはなるまい。

(……やはりそう簡単にはいかないか)

ひとつため息をついて額に手をやる。部活の初日は歓迎を兼ねたフリーの対局だつ

た。もちろん本当に歓迎の意味を持つていたのには間違いない。ルールを知らない初心者のための卓も立てられていた。ただそれと同時に打てる新入部員の品定めの意味を持つていたことも否定はできないだろう。半荘を三回打ってトップはなし。自身の實力にそれなりの自負を持つていた董であつても高校の強豪クラスとなると勝つのは難しいということだ。力をつけてのし上がるという展開は嫌いではないから、勝てなかつたことそのものを董は氣にしていな。仮にいきなり勝ててしまつたらそれはそれで拍子抜けというもので、氣の持ちようとは大事なことである。

さて周囲の様子はどうなものと董がまわりを見渡すと、あるひとつの卓に上級生たちが集まつているようだった。他の卓にもちらほらとは立つて見ている先輩はいるが、その卓との違いは瞭然としている。自身も打つた直後ということでは他の卓を見がてら、やけに人の多い卓を見に行くことに董は決めた。この位置では人垣のせいで誰が打つているかすらわからない。

果たしてその中心にいたのは、宮永照だった。

教室で見る普段と変わらない無表情のまま、上級生を相手に打っている。手元の点棒を入れる箱に目をやると、そこには誰がどう見たつて照が勝っているのはつきりと

わかるくらいに点棒が積み重なっていた。改めて照の対戦相手を確認してみれば、先ほど全体の挨拶を執り行っていた部長がいるではないか。他二名はよく知らないが、この部に所属している以上は最低でもそれなりの実力は備えているはずだ。それは董が身をもって知っている。だとすれば、この現状が示す可能性はそう多くない。

「いったいどうなっているんだ……？」

意識せずに董の口から言葉がこぼれる。

「いやすごいよね、あの子。あれウチの部長と団体のメンバー候補だよ」

「……フロックということはありませんか？」

「ないと思う。あの様子じゃ誰かトビだし、そうなれば四連続でトバしてトップだからね」

無意識の言葉に返されたことに気が付かないほど董は動揺していた。数多くの考えが頭のなかに浮かんで消えていく。実力を備えていることそのものに文句を言うつもりなどさらさら無いが、問うてみたいことはいくつもある。一方で何も質問したくないという気持ちがあるのも否定できない。彼女の口から不意に出る言葉が董を打ち砕かないとも限らないのだ。それらの考えを跳び越えて、董をもっとも動揺させたのは照の表情だった。目は他家や河を見るために動き、口はなんらかの発声をするために動いているのにもかかわらず、表情は一切の変化を見せていない。それは教室で話している

ときに感じたものをはるかに越えて不気味だった。大げさでなく人間としての機能が失われていると董に思わせるほどに、そこには感情というものが見られなかった。

能楽に使われる面の目や口だけが動く、というのがもつとも近い表現だろうか。もちろん能面の貌の造りと宮永照の顔の造りは違う。だが表情を変えないというただ一点において、宮永照と能面は恐ろしいまでの類似性を持っていた。木彫りの面が喜怒哀楽を自在に扱えないように、彼女もそれを扱えない。いや、扱えないかどうかは本人に尋ねてみるまではわからないが、少なくとも今見るところでは扱うつもりはないようである。

周囲をぐるりと人に囲まれた卓だというのに、麻雀に必要な最低限の音以外はまるで聞こえてはこなかった。唾を呑み込む音でさえ響き渡りそうな気がする。その卓を見ている誰もが既に勝負がついていることを悟っていた。打ち続けることの無意味さを理解していた。

最終的に照は西家に座る先輩をトバして勝利を収めた。誰一人として身動きひとつ取れないなかで、照だけがそれを意に介することなく立ち上がった。そうしてからはじめて囲まれていたことに気が付いたようにきよろきよろと辺りを見回した。そして頭ひとつ抜けて背の高い董を見つけて、抑揚なくこう言った。

「弘世さん、私勝ったよ」

言うまでもなく彼女の表情はまったく変化を見せていない。

そのとき初めて董は照の顔をはつきりと真正面から見た。少なくとも表面上におかしいところはない。目も口も鼻も耳もすべて人間のそれだ。だがそれでも董には目の前の人物が自分と同じ種の生物であるようには思えなかった。明らかにどこかがおかしい。しかし今の董はそれを説明するだけの言葉を持たない。自分以外がその違和感に寸分の違いなく気付いているかもわからない。もしそれに気付いているのが董だけで、あとで思い込みだと証明されたらどれだけ彼女は救われただろうか。ただ現実として董を襲っているのは、ちいさな蟻が体の内側をすこしずつ蝕んでいくような気分の悪さだった。

「あ、ああ。すごいな」

努めて平静を保ったつもりだが、外から見るとどう映ったかまでは意識を回せなかった。内心では叫びだしたい気持ちが暴れまわっている。董はそれを抑え込むので手一杯だった。

一階の中央階段そばにある自販機で小さなペットボトルを購入し、董は一息ついてい

た。理由はなんでもいいが、とにかく落ち着く必要があった。正直なところ誰に何を言つて部室を出てきたのかすら覚えていない。それほどまでに鮮烈で、衝撃的だった。こくり、とペットボトルを傾けて、はじめて喉が渴いていることに気が付いた。果物の味を強調した清涼飲料水によくあるべたついた甘味が、むしろ心地よいくらいだった。

外からは運動部の声が聞こえてくる。董は壁に背中を預けて、何を考えるでもなくそれを聞いていた。太陽が出ていないせいもか気温としては涼しめだが、ブレザーを着ているおかげでとくに寒いと感じるようなことはなかった。

宮永はまだ打っているのだろうか、とついつい思考がそちらへと寄つてしまふ。あれだけのことを大勢の前でやってのけたのだ。注目的になるのは免れないだろう。その質が良いものにせよ、悪いものにせよ。入部初日に名もないルーキーが実力で部を掌握、作り話にしたつて出来が悪い。これからこの部が彼女を中心に回るかどうかまではわからないが、団体戦のメンバー選出にあつて名前が挙がることだけは間違いないだろう。

買ったペットボトルを飲み干して専用のごみ箱に入れる。いつまでも休憩しているわけにもいかない。もちろんあの空間に戻ることには抵抗はあるが、たったひとつの、それも一方的な事情で部に出ないというのもおかしい話だ。董は董で求めるものがあつてこの白糸台の麻雀部に入ったのだ。少なくとも同期に飛び抜けて強いのがいたから

と行って折れるような安いものではない。
雨は、まだ降りそうになかった。

人生の中でも相当にひどい夢見だったような気がする。董は見た夢を翌朝にはすっぱりと忘れてしまうタイプの人間だったから内容を憶えているわけではない。だがいやな夢を見た後だけはその気分だけが感覚として残る。それなら何のために人の脳はそんな働きをするのかと問い詰めたところだが、残念ながら問い詰めるべき対象はどこにもいない。そんな苛立ちを追い出すように深くため息をついて、枕の側に置いてあるデジタル時計に目をやる。董自身が設定したアラームの鳴る時間まであと二十分というところだ。別にその時間で何をするといいわけでもないが、とりあえず董は起きることに決めた。

夢の内容は憶えてはいないが想像はつく。どうせ宮永照のものだろう。最終的な成績がどうなったかといえば、九回の半荘を戦って九連勝。うち全ての対局で誰かのハコを割らせている。つまり半荘を一度も消化していないのだ。さらに言えば南場に入つたのも二回だけ。理論上はそういうことがあってもおかしくはないと言えるが、現実に

はそういうことは起こり得ない。いや、起こってはいけないと言うべきか。董はもう一度だけため息をつけてベッドから足を下ろした。

朝食のときに両親から顔色の悪さを指摘されたが、なんでもないと言い張って学校へと向かう。まさか同年のプレイングにあてられて気分が優れないなどは口が裂けても言えまい。

昨夜十一時ごろに降り始めた春のやわらかい雨は、董が目を覚ました時点ですでに止んでいた。多少しつとりした空気だとは思うが大して不快には感じない。通学路のアスファルトはまだ濃い色をしている。道行く人たちの手元を見ると、傘を持っている人は誰もいない。もちろん董も同様である。鞆の中に折り畳み傘を入れっぱなしにはしてあるが。

中学と高校の大きな違いのひとつとして、董は実感としての自由を挙げる。通っていた私立中学はあれこれとしてはいけななことの規則が多かった。もちろん現在通っている白糸台高校にもそういう規則はあるが間違はなくその厳しさはすこし緩んでいて、ああ女子高生っぽいな、と妙なところで納得するあたり董も高校生という身分に対して何らかの幻想を抱いていたのかもしれない。

開きっぱなしの戸をくぐって教室に入る。ふと自分の席の方へ目を向けると宮永照

はもう彼女の席に着いていた。机の上に文庫本を出して、それに視線を注いでいる。董はクラスメイト達と軽いあいさつを交わしながら自分の席へと向かう。かたん、と音を立てて椅子を引いて机の上に鞆を置くと、後ろの席から声をかけられた。

「弘世さん、昨日はありがとう」

「……………は？」

董にはまるでさっぱり礼を言われるようなことをした記憶はない。むしろ一方的にはあるが、礼を失したことを考えさえしてしまった。もちろん卓など囲んでもいい。

「いやちよつと待て宮永、昨日？ 私には覚えがないぞ？」

「部活のあとでたくさん褒められたけど、最初に褒めてくれたの弘世さんだったから」
口周りの筋肉以外は見事なまでに動かない。精巧なロボットに人間の皮を貼り付けたと言われても信じてしまいそうだ。熱心に読んでいたはずの文庫本にはかわいらしい葉がいつの間にか挟まれている。視界に入った些末な情報を処理しつつ、彼女が発した言葉をどうにかして呑み込む。

不思議な物言いだ。どこかがかみ合っていない。ここがおかしい、とすぐさま指摘することができないぶん余計に董のなかに妙な印象が残る。歯車同士がかみ合わなければならぬのに、片方がゼリーののような軟らかいなかで出来ているような感覚だ。形

そのものは間違っていないのに感觸が本来のものとは違うのだ。正しい返答が董にはわからない。

「……なんというか、まあ、その、わかった」

「そう、何事も最初は大事。だからありがとう」

どうやら董は宮永照に対する印象をふたたび大幅に修正しなければならなかった。昨日のイメージともそれ以前に持っていたイメージともまた違う。今の彼女は文学少女をこじらせたか、あるいは不思議ちゃんのだちらかと言うべきである。それならば昨日卓に着いていたアレはいったいなんだったのだろうか。董は自分の席に座つて、教科書などを机にしまいながら考える。あまりの強さに自分が勝手に作り上げた虚像なのだろうか。少なくとも今の彼女からは昨日のような気味の悪さはまったく感じられなくなつていた。

昼に向かうにしたがつて次第に雲は晴れてきたが、空はくすんだような水色をしていった。

弘世董は、いわゆる良家のお嬢様に分類される。家庭環境も家族の関係もこれといつ

て問題ないどころか、きわめて幸せななかに育ってきた。兄弟姉妹がないことだけが彼女にとつての唯一の不満ではあったが、それ以外は本当に恵まれていると董は自分のことながらそう思う。

彼女は大概の場合、学級委員や部長などの人をまとめる立場にいた。それは生来の責任感の強さから来るものなのか、あるいは弘世董という能力に彼らが期待を寄せたのかは定かではない。だが結果として董はその役職をみごとにこなしてきたし、それは董に任せたクラスメイトや部員たちも常に納得のいくものだった。頭の回転が速く、周囲に目を配ることに飛び抜けて長けているのは、もともとの素質とこれまでの経験によるものである。そのせいか同年代の中では達観しているようなところがあって、だからこそさらに頼られるようになった。

小学四年生のときに友達に連れられて行った近所の麻雀教室が、董と麻雀の初めての出会いだった。テレビ中継などで見たことはあったもののルールさえ理解していなかったから、ああ、なにか盛り上がっているな、くらいの認識しか持っていなかった。だから正しく麻雀と出会ったのはその教室だったといえるだろう。今でも出会ったときの、あの不思議な感銘を覚えている。場況が進むにつれて次第に引き絞られていく感覚に、幼い董はわけもわからず興奮した。これは面白いものだとすぐさま確信した。当時から頭一つ抜けて物覚えのよかった董は、難なく麻雀の大雑把なルールを呑み込んだ。

あととは実戦を体験しながら教室の先生に細かいところを教えてもらった。はじめは初心者もいいところなのだから勝てないのは仕方のないことだったが、そのぶん初めて勝ったときの喜びは一入だった。

そうして麻雀という競技にのめり込んでいった董は、地道に研鑽を重ねてついに中学三年のときに花開いた。全国大会への出場を果たしたのである。中学生雀士にとつては憧れの舞台であるその場は、各都道府県から選りすぐられた精鋭たちにしか出場することが許されない。もちろん出場だけで満足しているようでは勝つことなど到底できないが、素直に感慨に浸ることくらいは見逃されて然るべきだろう。董はその大会で健闘を見せたものの、全国上位陣の壁は厚かった。折悪しくその年は他に類を見ないほどの実力者揃いの大会だったのだ。とても同い年には思えないほどの彼女たちの戦いを、董は大会の途中から観客席で見るとを余儀なくされた。スクリーンの向こうにいるのは董ではなかった。もつと自分が上手ければ、強ければ、こちらにすることはなかった。そう思った瞬間に、董のなかで憧れが目標に変わった。

董の責任感の強さは自分自身にも及ぶ。一度決めたのだからそう簡単に諦めたくはない。たとえ後ろの席に自分の目標としたものを軽々と踏み越えていく可能性を持つものが座っていても。

その日、董は照を昼食に誘った。あれだけの鬪牌を見せられて興味を持たないというのも難しい話だろう。あまりに一方的であつたことを差し引いても。さて昼食に誘うとはいっても確認してみればお互いにお弁当を持ってきている。わざわざ食堂の席を取るのも気が引けるし、董としては話を聞きたかつたから一緒に穴場を探すのも望ましいとは言えない。だから董は普段の席からそのまま振り向いて、照の机の上で食事をとることに決めた。

ほとんど自分から話しかけることのない照と、とりたてて口数が多いというわけでもない董のふたりだ。食事は静かに進んでいく。不思議なことにその状況は、気まずさを生まなかつた。

「……宮永は料理とかするののか？」

「お米を炊くくらいならできるけど、料理は無理」

自分の弁当をつつきながら、何気ない会話を始める。

「弘世さんはするの？」

「私も料理なんて呼べる代物は作れないな」

嫌味なく笑う。この年代で調理実習を除いて料理をしている、なんてのは女子に限つ

ても少ないだろう。多少はそういったものに憧れなくもないが。しばらく何でもない会話を続けて、董は本題に入ることにした。

「なあ宮永、お前なんであんなに打てるのに中学でやってなかったんだ？」

相も変わらずの無表情ではあったが、めずらしく答えるまでに少しの間があった。

「……私に妹がないから？」

文脈のまるでつながつていない返答に董は呆気にとられた。まるで表情を変えずに言い放つものだから、それが本当に理由なのかと思つてしまいそうになる。

「……冗談苦手なのか、お前」

「え、そう？」

あくまでも平板に、そつけなく照は返す。董に言われたことよりも目の前のお弁当のほうが大変なようだ。視線は明らかに机の上に注がれている。董もとくに深くは考えず、たまたま通つていた中学に麻雀部がなかったとかそういう理由があるのだろうと結論付ける。ふつうでは考えられないような事情などは物語のなかの話であつて、現実にとつていたことはまずない。日本全国を探せばそういう人もいるかもしれないが、いま自身の目の前にいる無表情な少女がそれだなんてあり得るわけがない。確率的にいつてそうだろう。

教室にはクラス全体の三分の一くらいの人が残つていて、それぞれお昼を食べたり

ノートを出したりと自由に過ごしている。窓から見える桜はほとんどその花卉を散らしており、葉桜になる前のあまり綺麗とは言えない姿をしていた。

白糸台高校麻雀部の、とくに団体戦のメンバー候補たちの当面の目標は宮永照の打倒になった。上級生が新入生を相手に何を情けないと思うなかれ、どの競技においてもそれが絶対的な力というものは間違いない存在し、才能は望んだからといって与えられるわけではなく、持たざる者にとつて持てる者はいつだつて想像を超えた壁なのだ。今やすべての部員が理解している。言葉にする必要もないほどに。もはやこの部の実質的な中心は宮永照なのだ、と。

麻雀部の活動の中心は、基本的に実戦である。見学や牌譜の研究もトレーニングの一環としては重要なものには違いないが、それらのためにも実戦が欠かせないので。他のスポーツと違って基礎練習のようなものが存在しない。だから頭脳スポーツと言われる囲碁や将棋とその性質は近いといえるだろう。ランダム要素を常に含むという点では、それらの競技と明らかに一線を画しているといえるが。

インターハイにおける麻雀の団体戦は先鋒から大将までの五人構成で争われる。各校の持ち点は十万点の変則ルールだ。その十万点を各自が二半荘ずつを戦って奪い合っている。大将戦が終わった時点でもっとも得点の高かった学校が勝利となる。予選の場合は

出場校数の多さの関係上、準決勝までは半荘一回となっている。持ち点が持ち点のため、あまり考慮されないことだがトビ終了もルールにはきちんと明記されている。

その団体戦に出場するメンバーの選定方法が、白糸台は一風変わったものとして知られていた。監督がある時点でチームを四つ作る。それらのチームはそれぞれに特徴を持つており、攻撃重視型、守備重視型、速度重視型、そしてバランス型に分けられる。その四つを団体戦の様式で定期的に戦わせて、その結果で代表のチームを決めるのだ。例外として事前調査で九割以上の部員に推薦された選手は、どのチームが勝ったとしてもメンバー入りが約束される。その場合は部内団体戦の人数が各チームからひとりずつ減ることとなる。図らずもこのシステムは、現在のインターハイで行われている形式の不条理さを体現していた。

「なあ宮永、団体戦のメンバー候補、どうなると思う？」
わざとぼかした聞き方をする。

「ちよつと意図するところがわからない」

「お前が入るんじゃないかって話だよ」

期待していたものとは違う可愛げのない回答に、董はちよつとへそを曲げた。もつともその期待が達成されるとはほとんど思っていないが。

「それは私が決めることじゃないから、なんとも」

「どつちにしろその通りだけど、願望とかないのか？」

葉桜の緑がきれいに映える昼休み、食後のなんとも気だるい時間。肌寒い日より暖かい日の割合が増えてきている。そろそろ高校生活に慣れ始めた一年生たちには、学校指定のブレザーではなくカーディガンなどを着てくる者も出始めた。董と照はブレザーのままである。カーディガンやらセーターやらはあまり似合わないというのが本人たちの主張だ。

「大会に出られたら楽しそうだとは思うけど、それとこれとは別」

まるで年齢にそぐわない自制心というか欲の無さに董はため息をつく。たしかに監督に選ばれるか事前投票で選ばれるかしなければどうしようもないのは事実だが、もつとこう、燃え立つものはないのかと問いただしたくなる。周囲から大人びていると言われる自身であってもそれは抑えられるようなものではないのに。

「ねえ、弘世はどう？ 出たい？」

「そりゃ叶うものなら出たいさ。もつとも自分の実力くらい把握してるけど」

いつの間にか照も董のことを呼び捨てで呼ぶようになっていた。クラスや部活どこ

ろか学校中を探し回っても照がそう呼ぶのはたったひとりで、それだけ気を許しているということなのだろう。

「そう。選ばれるといいね」

「……気休めはけっこうだ」

はあ、と先ほどとは種類の違うため息をひとつ。

「ため息をつくとき幸せが逃げるよ」

「逃げていくような幸せなら初めから願わずに下げだ」

「……弘世はときどきすごく男前」

「私はそれを褒め言葉ととっていいんだよな？」

ぐいぐいと照の頬をひっぱる。妙に伸びる。能面だ能面だとは思っていたが、実際には木彫りというわけでもないらしい。当たり前のことには董は小さな感動を覚えて目を丸くする。

その日、団体戦に向けての事前投票の用紙が配られた。無記名のうえに提出しなければならぬ義務もない。だからほとんどの場合において成立しない制度なのだが今回だけは事情が違う。宮永照がいれば全国大会出場どころか優勝さえできるかもしれないし、あるいは彼女ならば高校最強の呼び声高いあの天才にも届くかもしれない。そん

な選手が部内の団体選抜で落ちる可能性があるということ自体がもつた言いえない。もちろん彼女が投票で選ばれてしまえば団体メンバーの席は減る。しかしそれでも、白糸台高校の一員として勝つ確率を上げることが多くの部員が選ぶだろうことは想像に難くなかった。

部員全員が照と対局をしたわけではない。だが上級生を相手に未だ無敗どころか半荘を消化さえさせていない。この瞠目に値するデータを見て彼女を不必要だと言える者などおそろくないだろう。そこに嫉妬や羨望や、さまざまな感情が起きていることも間違いない事実ではある。しかしそれ以上に宮永照は強すぎた。議論を差し挟む余地などはじめから存在していない。

結果から言ってしまうえば、照は今年の団体戦のメンバーに選ばれた。この白糸台において異例の中の異例である。そもそもこの制度が機能すること自体が稀であるというのは先にも触れたことだが、その制度で一年生が選ばれるというのは史上初のことであった。

照がメンバー入りを確定させた一方で、堇は四つの候補チームに入ることさえ叶わなかった。

はじめからわかっていたこととはいえ、堇の胸中にもちいさな波が立っていた。他人

への悪感情ではない。董の場合、それは自分へと向かう。どれだけ抑え込んでも無力感や焦燥がどこかで燻るのがはつきりとわかった。それらの感情は自身の糧にならないと理解はしていても、完全な感情の抑制などできるわけがなかった。もちろんそれを表に出すようなことはなかったが。たしかに董のなかに思い上がりのようなものがあったのは否定できない。そうでなければ人は選ばれなかったことに対して傷つきはしない。反面それはどの人間も程度の差こそあれ等しく持つておくべきものであって、彼女のもそれも決して間違つたものではない。

幸いなことに麻雀のインターハイは常に東京で開催される。比較的近いのだからおそらくは部の全員で応援に行くのだろうし、仮にそうでなくとも一人でだつて観に行つてやろうと董は考えた。力がないのならつけばいい。誇りを失つたのなら取り返せばいい。それをするだけの環境は整つているのだ。ふと以前読んだ本の一節を思い出した。『だから人間はいくらでも強くなれる』。状況が似ているなどとはちつとも思わないが、それでも董はなんだか勇気をもつた気がした。

納得がいかないとまで言うと言葉が強すぎるが、董にとっては不思議な現象があつ

た。宮永照の周りには、自然と人が集まる。彼女のなかがそうさせるのかなどまるで見当がつかない。たしかに話してみればかなり独特なユーモアのセンスを持っていたり、受け答えに淀みがないなどの美点を持っていることはわかる。しかし例えばクラスではほとんどしゃべっていないのに、いつの間にか一座の中心に据えられていたりする。これは董と一緒にいてもそうでなくても同様である。なぜか当の本人もその状況に驚いているようで、どういうことだろうと董は相談を持ち掛けられたこともある。それでも表情は崩さなかつたことに感心したことをよく覚えている。

彼女には自然と人を惹きつけるなにかがあるのだろうか、と董は頭をひねる。よく考えてみれば自分がよく一緒にいるのもその影響かとも思うが、実際のところはわからない。気にしても仕方のないことだが、不思議なもの不思議なのだ。まあ孤立するよりははるかにマシかと思ひ直し、董は枕に顔をうずめた。西東京地区予選を月末に控えた、五月の初めの夜のことである。

帰りのホームルームのあたりから急に勢いを増してぎあざあ降りになった雨が、窓の外の地面をたたたく。風はなく、どんよりとした景色のなかにノイズが走るように水滴が絶えることなく白色を混ぜ込む。空を覆う雲は、断面を見たわけでもないのに分厚いと断言できるような色をしていた。あれが供給源なら止む気配がしないのも仕方ないな、と思えるほどの。

雨の匂いがする。董はそれを見事に表現する言葉を持たないが、たしかに晴れた日とは違う匂いがすると感じる。街が濡れた匂いとでも言えばいいのか、雨が降るとすべてが均質に包まれるような感じがするのだ。途切れることなく続く雨音を無意識に楽しみながら董は歩く。

週末に西東京地区予選を控えたその日、董は部長に話したいことがあって部活の終わりに彼女を廊下で待っていた。部活が始まる前に約束を取り付けてあるから問題はな

い。それなりに人数規模の大きい部だ。部長としてするべき仕事の量も多いのだろう、

部長が董の前に姿を見せたのは部活が終わってから二十分ほど経ってからのことだった。スクールバッグを肩にかけて、董にいたずらっぽく謝ってみせる。

「さて、弘世ちゃん。それで話したいことって何かな？」

毛先にほんの少しだけくせのあるショートボブを揺らして董を見上げる。特別に小柄というわけではないのだが、なにより董は背が高い。少なくとも女性の平均身長などとうに超えている。

「ええ、その、宮永についてのことなんですけど……」

「宮永ちゃん？」

とくに不思議がる様子もなく、視線は董に続きを促している。

「あいつは今後、かなり注目されることになると思います」

「そうだね。私もそう思う」

董はひとつ呼吸を置いて、すこし言いにくそうに切り出した。

「その、あいつは普段の態度がアレですから、部長の力で守ってやってくれませんか」

「うん？ 守る？」

「あの、インタビュートかに対応できるイメージがまったく浮かばなくて……」

くすりと小さく笑ったあと、慈しむように目を細めて彼女は董の背中をやさしくたたいた。何も心配はいらないよ、と言われているかのようで董はすこし安心した。

「だーいじょうぶ。いくらエースとはいえ一年生にそんなことまでさせないよ」

西東京地区予選は土日で団体の代表を決め、個人戦の代表を決める戦いは平日に実施されることとなっている。これは他の地区との間にインターハイに向けた練習期間などに差が生じないようにと配慮されたものである。つまるところ、五月の最終週と六月の第一週でインターハイ本選に進む選手はすべて出そろおう。この二週間は麻雀をやっている高校生にとつて、目標のための大事な期間なのだ。

団体予選の一日目はまた雨が降っていた。梅雨の季節らしい、細く長く続く雨だ。予選が行われる市民ホールは麻雀の対局が適切にできるようにきちんと設営されており、専用の施設にこそ及ばないが十分な機能を有していた。ホール内には大まかに言っただ対局場とスクリーンのある観客席があり、一般の方が見ていくことも可能となっている。地方予選と侮るなかれ、注目の試合にはプロの解説とアナウンサーがついており、地元ケーブルテレビで放送までしているのだ。もちろんそれはこの西東京地区だけでなくどの地方予選でも同様である。ここにも麻雀人気的一端を見ることができらう。

背もたれに思い切り背中を預けて予選の組み合わせを見る。ここ数年はインターハイ出場を逃してはいるものの強豪であることには違いなく、白糸台は第三シードをもらっていた。四校が揃わなければゲームが成り立たないという競技の性質上、試合数の調整のためにシード校の扱いが毎年変わるのだが、今年は二回戦からの登場とのことだった。董は映画館で売っているような大きな紙コップの飲み物を肘掛の先に置いて出場校をひとつひとつ確かめていく。名前だけで何がわかるといってもないのだが、そうせずにはいられなかった。隣では照がいつものように小説を読んでいる。なんとも頼りになるやつだ、と董は呆れ半分で照に何かを言うこともなかった。

百など優に超える出場校数のため、一日目にはどの高校にも控室が常時開放されているわけではなく、対局中の高校にのみ使えるようになっていく。そのためそれ以外の時間は過ごし方を各自で考える必要があった。とはいってもそのほとんどが場内で他校の試合を観戦したり、あるいは精神状態を整えるなどの自分の試合に関わる行動をとっていた。事前にいろいろと準備をするのはインターハイを目指す高校にとっては当たり前のことなのだろう。

「……宮永、試合は見なくていいのか？」

次鋒戦が終わった時点で一度も顔を上げていない照に対してしびれを切らした董が

声をかける。それまで照は一心不乱に読書が続けていた。そもそも実況も解説もついていない試合だが、どうせこの様子だと実況がついていたところで聞きそうにも思えない。

「うん。対局のときに見るから」

顔さえ上げずにぼつりとつぶやく。どちらかといえば照は冗談を言うときに相手の顔をしっかりと見る。もちろん目を合わせればすべて冗談というわけではない。ただ表情を除いて照が女子高生らしくふざけるのはきちんと面と向かったときだけなのだ。それは董がこの二ヶ月で発見した数少ない照の特徴のひとつだった。

「東一局のときにじつと見てるアレか」

「そう。いちばん精確」

「じゃあ、その精確なやつじゃなくてもいいから先輩に情報を、とか考えないのか？」

「考えない。先輩には先輩のプライドってあると思うから」

「……お前、気を遣うなんてことできたのか」

「驚いた？」

やっと手に持った文庫本から視線を外して董の方へ顔を向ける。董は董でスクリーンへ視線を固定していたが、何気なく照の方を見るといつもの鉄面皮がこちらを向いていた。

「いや、最近はその感覚がマヒしてきててな」

左の口の端をうすく上げて董が応えようと、照はひとつ息をついてまた紙上の文字へと視線を戻した。貴重とも言える反応があったもののそこから先は董にはわからなかった。がっかりしたのかもしれないし、拗ねたのかもしれない。本当に表情を動かさないというのは厄介なものだな、と董は思う。

間もなく二回戦第三試合が始まります、と場内アナウンスが流れる。董はただぼんやりとそれを聞いて、まだ誰も来ていないスクリーン上の卓に目をやった。いくら予選の一回戦とはいえ全ての局を見るのは疲労が残るのだろう、董の手には目薬が握られている。先ほどまで隣の席に座っていた照はすでに控室で待機している。彼女のポジションは大将ではあるが、おそらくどこかの試合で出場することになるだろう。団体戦において他校をトバすことはそう簡単なことではない。

空調が利いてはいるのだろうが人口密度のせいでもどうにもべたつく空気のなかで、董は宮永照の特質について考えていた。まだ部内での対局しかないと、資料としては心許ないのは承知の上での話だ。基本的に麻雀において注目されるわかりやすいデータは打点、速度、守備率の三点であろう。当然のことだが打点は高ければ高いほど相手に与える脅威は大きいし、速度があれば他家に和了らせることなく稼ぐことができる。そ

して他家に振り込む回数が少なければそれだけ負ける確率が下がるのだ。その三点に着目して宮永照のデータを見ると、それこそ平均からかけ離れた数値がそこには出ている。

第一に守備率である。照はこれまでの部内での対局で一度たりとも振り込んでいない。明らかにこれは異常と言えた。局の途中で他家をトバしてしまうということをし引いても、である。全国においてもそれを貫けるとは董もさすがに考えてはいないが、それでも驚異的な武器になることだけは間違いないだろうと予測していた。

そして宮永照の最大の特徴と言える火力と速度については絡めて考えなければならぬ。

彼女は和了るごとに打点を高めていくという極めて不可思議な形態を取っている。それも連続の和了でなければ成立しない。さらに言うならば、それは常に最低打点から始まるのである。打点が低いなら問題ないじゃないかと思うかもしれないが、それは大きな間違いだと言う他ないだろう。その連続和了を支えるのは圧倒的な速度なのだから。誰も聴牌にかすりもしない段階であつても関係なく照は点棒をさらって、打点を上げる要件を満たしていく。恐ろしいのが打点が上がった状態でも速度がそれほど落ちない点である。もちろん相応の役を作らなければならないのだが、宮永照はそれを軽々と跳び越えていく。

これらの要素が強豪たる白糸台の部員たちをして誰ひとり半荘を消化することを許さなかったものである。どこに穴があるかと聞かれても答えるのは難しい。たしかに親であつても東一局を必ず見に見に費やすのは弱点と捉えることも可能だろう。そこで叩いてしまえばよいという考え方も否定はできないが、それを達成するには彼女の堅固な守備を打ち崩さなくてはならないのだ。

普段から鋭いと言われる董の目つきがさらに鋭さを増す。スクリーン上で始まつた試合の趨勢が気になるわけではない。自身の属する白糸台が二回戦で躓くとは到底思えない。もちろん部員として観戦しながら応援自体はするが、思考はそこが中心ではなかった。その視線はなにか大事なものを探しているかのようにある点を見つめてはまた移動を繰り返していた。

スクリーンでは照をマスコミから守ると約束してくれた部長が先鋒として卓を囲んでいる。照にこそ及ばないものの彼女の實力も相当のもので、全国でも上位に数えられるだけのものを有している。攻撃にも守備にも隙がなく、卓上全体を見渡したプレイは鮮やかといつても過言ではないだろう。ほとんどの高校はエースを先鋒か大将に配置する。冷徹に戦術のみを考えれば大将にエースを置くチームがおそらく最も多くなると思われるが、先鋒にエース格を置く理由もいくつかある。ひとつは単にダブルエー

スで先行逃げ切りと最後に追い打ちをかけるため、という戦術面での判断である。もうひとつは麻雀が世界的に人気のある興行でもあるため、たとえば各国でプロリーグや世界選手権のテレビ放送がされている。そこで最も視聴者の多い先鋒に花形のエースを持つてくるといふ形式が高校の団体戦まで下りてきているという側面もある。実際にインターハイも日本では夏の風物詩となっている。

観客席は思っていたよりは静かなものだった。客の入りは十分ではあったが、たまに感嘆の声やそういったものが聞こえるだけであとは誰もがじつと見入っていた。それだけ白糸台の勝利が予定調和ということなのだろう。スクリーンの隅に出ている持ち点に目をやれば早くも他三校の戦意を削げそうな点差がついている。董は気付かないうちに舌打ちする。そこにどんな意図や思いがあったのかは知るところではない。

宮永照が公式非公式を含め、初めて大会に出場したのはインターハイ女子団体西東京地区予選の三回戦だった。

後年になって、宮永照をもっともよく知る人物のひとりとして董にこのときのことを尋ねると、彼女は苦い表情を浮かべる。自身と比べたのかもしれないし、あるいは対戦

相手の希望を根こそぎ刈り取ってなお平然としていた照のことを思い出したのかもしれない。それらとはまったく関係のないことが原因なのかもしれないが、どちらにせよいい思い出に分類されないことは間違いないところだった。

照にバトンが渡されたのは、もはや決着がついたと言つてもいいほどの差が開いてからのことだった。その時点での二位との点差はおよそ七万点。半荘が二つあつてもひっくり返すのは至難と言えた。

ふつうならば静かに局を消化していくだけでいい試合展開である。なんだったら他家の連荘を止めるために差し込むことさえ選択肢に入れても問題はないだろう。勝利の決まっている状況でわざわざ自身の手の内を明かす必要もない。董はそう考えていたし、また照が同じようなプレイングをするだろうことを疑つていなかった。しかし宮永照は砂粒ほどの手心を加えることもなく、いつものような徹底的な打ち方を変えることもなかった。

例えるならそれは自分で起動スイッチを押すことのできるゴーレムのようだった。プログラムを自ら組んで、実行さえしてみせる。そこに人間的な躊躇や懊悩はなく、ただ対象を砕いて踏み潰してひとり歩いていく。そこにはチームを勝たせるという意志ではなくて、宮永照を全うする義務が存在しているように董には見えた。そこにあるの

は間違いなく純粋なものだった。善悪正邪の立ち入る余地などまったくない、ただっ広い空色の地平。

董は思わずスクリーンから目を背けた。観客たちは未だ宮永照という異質に気がついていない。ただあの白糸台の大将が一年生だということに注目しているだけだ。連続和了に対して流石だな、なんて悪気のない感想を口にしてるだけだ。あまりに自分と違いすぎる照への理解に気分が悪くなって、董は席を立たざるを得なくなった。結局その三回戦の間に、董が再び観客席に姿を見せることはなかった。

入り口付近のロビーのガラスの向こうはまだ雨が降っていた。灰色の雲の高さがいちだんと低くなったように感じられる。董は背もたれのないミツバチの巣の断面図のような六角形のソファに腰を下ろして、じつと床を眺めていた。ロビーにはこれから試合に向かう選手や試合を終えて戻ってくる選手、あるいはどちらにも当てはまらない人たちがそこらじゅうをうろついている。今日この会場で一人になろうと本気で考えたら、それはトイレの個室に籠るくらいしかないだろう。

考えをまとめさせてくれない周囲のざわめきに苛立ちを覚えそうになるが、そもそも何について頭を働かせるべきかさえわかっていない。董のなかにたしかに存在するのは、今のところは静かな吐き気だけだった。ときおり通りがかった白糸台の部員たちが

見るからに気分の悪そうな董に声をかけていったが、それはほんのわずかな間だけ気を紛らわせる効果しかなかった。結局はまた思い出すことになるのだから余計に辛くなったと言えるかもしれない。

「弘世、こんなところでどうしたの」

耳慣れた声に顔を上げると、そこにはさつきまでスクリーンの向こうにいた少女が立っていた。

「あ、ああ、ちよつとスクリーンに酔つてな」

「ふうん、無理はしないほうがいいよ」

そう言うと、照は当たり前のように董のとなり腰を下ろした。スカートとソファの生地が擦れて音を立てる。

「なあ、どうして手を抜かなかったんだ？ さつきの試合」

「何を言いたいのかわからないけど、打つなら全力じゃないと失礼」

迷いのない照の返答に、董の胸中はざわつく。

「………そうか」

まるで気分は晴れないが、それでも頷くことのできる答えをもらつて董は安堵した。ならばなぜ吐き気がまだ止まないのだろう、と自問するが肉体はそれに返事をする手段を持たない。できることならすぐさま横になって目を閉じたかったが、そんな場所でも

状況でもなかった。

「……本当に体調を崩したのなら帰ったほうが良いと思う」

「大丈夫さ。心配はありがたいが、お前も頑張ってるのにそうも言ってもらえないだろ？」

照の瞳は微動だにしなかった。ただ滑らかに濃いブラウンを湛えた虹彩が、じつと董を見つめていた。言葉を探しているようには見えなかったし、また言葉を待っているようにも見えなかった。見るといふ行為だけにこれほど集中した瞳に董は出会ったことがなかった。それはほんの五、六秒のことだったが、ひどく消耗した気のする時間だった。

もはや白糸台が負けることを心配するのは不可能に近かった。粒の揃ったバランス型のチームが代表に残ったことで大崩れすることなどなかったし、そしていちばん後ろの大將に控えているのは他でもない照だった。彼女を相手にしたときのセーフティリードなど見当もつかない。この表情を変えない怪物が全国に姿を見せるのはほとんど決定事項のようにさえ思えた。

照の猛威は、それなりの実力校が残っているはずの準々決勝においてすらまったく衰える様子を見せなかった。その日最後の対局も他校の点を削りきり、翌日の準決勝進出

を決めてみせた。

帰りの電車の中では董と照は離れた位置にいた。照はレギュラー陣に囲まれ、董は同い年の部員ととりとめのない話をしていった。女子高生の会話の話題はあつちへ飛んではこつちへ飛ぶ。今日の試合の話をしているかと思えば今度の休みに遊びに行く話になつていたり、果ては好みの男のタイプまで実に様々な話題が浮かんでは消えていった。電車の中ではしやぐなどはしたくないと思う気持ちも多少はあつたが、楽しい会話を打ち切るなんてことは高校一年生の董にはまだ難しかった。

いくぶん小降りにはなっているものの、翌日もまだ雨は止んでいなかった。傘を差しても音など立たないくらい小さな雨粒が、街や木々の隅々までじんわりと染み渡っていく。予報では明日には晴れると言っていたが、梅雨時の晴れ間ほど信用できない予報もないだろう。どこか陰鬱とした空気のみなかで団体予選二日目は始まった。

前日に比べて会場に人が多いように感じるのは勘違いなどではない。世界的に人気のある競技である麻雀は、日本においても注目を浴びている。なかでもインターハイと

いうものは高校生という限られた期間にしか出場できず、またドラマチックな場面がよく見られることから特に高い人気を誇る。そのインターハイ出場を賭けた試合、ましてや全国的に激戦区と言われるこの西東京地区の試合となれば耳目を集めないわけがなかった。もちろんよその地区から偵察に來ている者も散見された。

白糸台の部員たちは呆れるほどに混みあつた観客席にある程度分散して座っていた。数人程度の小さな集団をいくつか作るのだ。まさか観客席の一角を白糸台だけで占領するわけにもいかないだろう。見渡せば夏服である白いワンピースタイプのセーラー服がちらほらと点在しているのがよくわかる。白を基調とした制服は数が少ないため、ひどく目立つのだ。

「ねえねえ董ちゃん、ウチ全国行けるかなあ」

董の隣に座る同い年の部員が期待七割、心配三割の表情で声をかける。おそらくはそれに対する返事の内容などわかりきっているのだろう。

「……先輩方もそうだが、なにより宮永が負ける姿が想像できないな」

「照ちゃんってホントすごいよね、なんだか落ち込んだじゃないそう」

「来年も再来年もあいつが味方で、私はほっとしてるよ」

乾いた笑いととも言葉宙に投げる。言ってからこれは本心ではないのかと思いついて、董はひとり眉をひそめた。ちょうどそのとき場内にアナウンスが入って、これ

から準決勝の第一試合が始まるとのことだった。

四

日程の関係上、個人の予選は平日に実施される。しかし董はその予選の日にきちんと学校に来て授業を受けていた。各校から個人戦に出られるのは七人まで、と定められている。高校によつては百人を超えるような部も存在するため、人数制限なく出場を認めってしまうと予選そのものがパンクしてしまうからだ。つまり、董はその七人からは漏れていた。白糸台はその変則的な制度のおかげで団体戦のメンバーでさえ個人戦に出られない者もいるくらいなのだ、それは仕方のないことと言えるだろう。

クラスの誰も気付くことができなかったが、董はどこか上の空だった。もちろん姿勢正しく座って丹念にノートをとっているし、教師からの質問にもよどみなく答えている。周囲に気付かせない振る舞いは圧巻といえるものだった。そして残念なことに彼女の異変に気付く可能性を唯一持つている存在は、今この教室にはいなかった。

部長、と呼ばれるようになったのは先代から引き継いでからのことだから、もうじき一年が経過する。名前に先輩をつけて呼んでくれていた後輩たちが、そろって部長と呼び始めて戸惑ったことを彼女はよく覚えていた。同い年の部員たちも初めはふざけて呼んでいたくせに、そのうちそれが自然になっていった。もう「部長」というのは自身の名前に等しいものになったことを認めないといけないね、なんてあつけらかんと笑う。彼女はこの大らかな人柄のおかげか人望は厚い。

部長は宮永照を、どこか危うさを孕んだ人間であると見ていた。

とくに何を話したというわけではない。相談を持ち掛けられたこともないし、なんらかの兆候が見られたわけでもなければ不穏当な発言を耳にしたこともない。ただ彼女をじいつと見ていると、いつも天井から頼りない糸で吊るされたガラス玉をイメージさせられた。部長は自身で人を見抜くような特別な能力を持っているとは思っていないし、また事実として持つていない。ただ彼女は気の利く人間で、すこし勘の鋭いところがあるというだけだ。だから何に対して危ういところがあるのかなど部長にはわからなかった。あるいはそれが大きな問題だったのかもしれない。

女子団体予選は誰も文句のつけられないかたちで白糸台高校が優勝した。先鋒であ

る自身を含めてメンバーは出せる限りの力を出したと胸を張って言えるが、それでもいちばん後ろに控えていた宮永照にその称賛がすべて集まるのは避けられないことだったと部長は思う。照は決勝では二校を同時にトバしてさえみせたのだ。

のちに聞いたところでは、観客席は非常に静かだったという。実況やプロの解説などどこ吹く風で、ただただ目の前で繰り広げられているなにかに見入っていたそうである。その異彩は場が進行することに際立って、ゲームが終了するその直前に最も輝いた。これまでに積んできた実績や年齢を遠くに置き去りにする実力がそこにはあつて、観客はそれに酔いしれた。誰しもが新たな女王の誕生を予感した。

選手控室でメンバーと抱き合つてインターハイ出場を喜ぶなかで、部長は画面に映る照がすぐに席を立てて一礼だけしてさっさと退場していくのを目にした。もともと感情表現の豊かな子でないことは、短いとはいえこれまで共にしてきた時間でわかっている。三年である自分たちと同じように喜びを嘔みしめろ、なんて強制するつもりは彼女には毛頭なかったが、それでもあそこまで無反応だと気にかかるのは仕方ないことといえるだろう。それでもそのことで突っかかるのは上策ではないと思ひ直し、部長は改めて仲間たちと喜びを分かち合った。

照は周囲のほとんどから、ひどくシャイなのだと思われる。感情を表に出さない割には受け答えがしつかりし過ぎているし、何より仲良しの董とよく一緒にいることか

らそう思われている。部長の違和感もそのシャイという範囲に収まる程度のもものではあつた。だから照が控室でちつともはしゃがなかつたことも白糸台の面々にとつては何ら不思議なことではなかつた。

雨こそ降っていないものの、救いといえればそれくらいしかないような暗く重たい雲が空を覆っていた。湿度も高く、そこかしこにカタツムリやナメクジが出張つてきている。会場へ向かうために家のドアを開けて外に出た瞬間に物理的に空気がまとわりついてくるような感じがして、部長は盛大にため息をついた。梅雨時のしとしとと降る雨は眺めとしては嫌いではないが、それは彼女自身が快適な部屋にいるときだけの話だ。

部長は前もって考えていたほど、個人戦に集中しきれないでいる自分に気が付いた。原因とまで言つてしまうといささか言葉が過ぎる気がするが、やはりそれは団体で全国出場が決まつたことが大きい。仲間と調和を大事にする彼女からすれば、団体戦で結果を出す以上のことは存在しなかつた。しかしだからといって個人戦をどうでもいいと考えているわけではない。彼女が出場している裏には望んでも出られなかつた部長が大勢いるのだ。

実際に予選が始まつてしまえばそんなこともなくなるだろうと考えて、部長はそのことについては放つておくことにした。この西東京地区では予選に七百人弱ほどの選手

が出場し、その中で四人だけが全国大会へと駒を進めることができる。百人に一人も勝ち抜くことのできない、実に狭き門である。一次予選はランダムの組み合わせの東風戦を一定数行つて、その得点の多寡で順位を決める。上位六十四人が二次予選へと進んで、そこから先はトーナメントの山を四つ作る。そしてそれらの一位が西東京地区の代表となる形式をとっている。トーナメントの山分けも一次予選の成績順に振り分けられるため、初めから手を抜くことができないのが特徴だといえる。

団体戦の大将としてこれ以上ない活躍を見せた宮永照が、個人戦においてもその猛威を振るうものだと思つていた。あらゆる出場選手が彼女と当たりたくないとの心の底から願つた。しかし蓋を開けてみれば、照は一次予選こそトップで突破したものの周囲が考へていたような飛び抜けた成績をたたき出したわけではなかつた。局によつては二着で終えることもあつた。

それは決まつて照が東一局で親番を引いたときだつた。照は必ず東一局では見に徹する。それは自身が親であつても徹底された。そして一次予選の東風戦を回すという性質と彼女の習性はひどくミスマッチなものだつた。武器である親での連荘が初めから存在しないのだ。したがつて安手を三つ和了つて逆転できなければそれで終わりであつた。もちろん逆転できた局もあつたし、そもそも初めに親を引かなければ相手をトバすまで打てるのだ。彼女が一次予選で落ちる可能性など実力的にいつてほとんど考

えられないことではあつた。しかし考えてみれば、照を叩くことができるのはここしかなかったというのもまた事実には違ひなかつた。真正面から打ち合えるのであればまた話は変わつてくるのだろうが、この西東京地区にはそんな選手はいないようだった。少なくとも照にとつてあまりよくない条件でも、彼女の成績を上回れる選手はいなかつた。

怖れつつも彼らが照に期待していたのは、全ての局で勝つことだった。それはとても無責任で、陰湿な期待だった。その期待は諦めと憧れと嫉妬の入り混じつた複雑な感情から産まれる、ひどく歪なかたちをしたものだった。その中で唯一幸いと言えるのは、それらの感情が直に照に伝わらなかつたことだろう。もし仮に届いたとしても彼女は表情を変えないだろうから、いったい何を思うのかは周囲の人間の知るところではないが。

白糸台の七人は一次予選をなんとか全員が突破することができた。東風戦という流れひとつでどうにでもなつてしまう形式で七人ともが残るといふのは驚異的な結果である。それは図らずも彼女たちの層の厚さを見せつけるかたちとなつた。

「改めておめでとうございます、部長」

「あはは、これで面目保てたかな」

観客たちはすでに帰って個人予選の熱気もすっかりとなくなった会場の廊下で、照と部長は並んで歩いていった。表彰式を済ませて、荷物を預けてある仲間たちのもとへと戻る途中だ。

すこしだけ黄色をした灯りが廊下を照らしている。じ、じ、と電球の中でなかが暴れるような音が聞こえる。ふたりの会話は淡白なものだった。宮永照とふたりでいると自然とそうなるのだ。敵意のようなものは互いに存在しないのに、どうしても無言の時間を選びたくなる。決して無言が気持ちいいというわけではない。当たり前のことだが静かな場所より騒がしい場所のほうが好きな人間だっているのだ。それでもふたりでいると、自然と会話がなくなつてゆく。あるいは照には言葉選びを億劫にさせるなにかがあるのかもしれない。

窓の外の雲はその重たそうな色と質感を保つたままだった。雨粒が落ちてきていないのが不思議なほどである。あとは部員たちと合流して帰るだけなので、できればそのまま降らないでほしいなと部長が思ったのは自然なことだろう。

歩きながら部長はちらと横目で照を見る。その顔はまっすぐ前を向いていて、まるでそこ以外に見るべきものなど存在しないと主張しているようにさえ見えた。強い視線

だと感じ取ることはできたが、何を見据えているのかは部長にはわからなかった。ひよつとしたらわかる人間など世界に一人もいないのかもしれない。

こうして西東京地区の予選は終了した。それは同時に宮永照の名が日本全国の高校麻雀の関係者に知れ渡ったことを意味する。まったく誰も知らない高校一年生の少女が、圧倒的と表現するしかないほどの力を以て西東京を制圧したことを。そしてその映像から彼らは判断した。彼女は間違いなく全国制覇を目指す上での壁になる、と。

彼らのその推測はある一点を除けば、きわめて正確なものだった。宮永照は今後の高校麻雀界において絶対的に君臨する存在であったし、また彼女の所属する白糸台も全国最強と等しく扱われる名前となる。ただひとつだけ彼らが間違えていた点は、宮永照あるいは白糸台を倒すことそのものが全国制覇なのだと認識できなかった点である。そして結果としてそれを達成できたのは、彼女が高校生でいられる三年間のうちでたったひとりだけだった。

まだ董が小学生で、麻雀を知らなかったころのことだっただろうか。その日は南方か

ら台風が近づいて来ていて、ひどく風の強い日だった。朝から暴風警報が出ていて学校は休みだとの連絡網が回されていて、小さな董が起きてリビングへ下りると母親がそれを教えてくれた。生活のリズムがきちんとしていて彼女にとつてもう一度ベッドに戻るのには難しく、仕方なく朝食をとつてからソファに身を埋めることにした。正直なところ面白そうなテレビ番組はやっていない。董は憂鬱そうに窓の外に目を向けて、ばたばたと窓を叩いては流れ落ちる雨を観察していた。

父親は会社へと向かい、母親は流しで洗い物をしている。フローリングのリビングは広いぶんだけ閑散としていて、董にはそれがなんだかつまらなかつた。L字に置かれたソファの前にはお菓子の乗ったテーブルがあつたが、さして気にも留めずにまた窓の外へ目をやる。窓に張り付いた雨粒の軌道は不思議なもので、同じところからスタートしたように見えるのにまるで違う方向に進んでいくことがしょっちゅうだ。とくに調べたいというほど気になるわけではないが、ただなんとなく董はそれを見ていた。

しかしそんなものをいつまでも眺められるほど成熟していなかつた董は、いつの間にか児童小説や携帯ゲーム機をひっぱり出してきていた。自宅で過ごすさざるを得ない降つてわいた休日なのだ。ひとりで遊べるものをうんと楽しんでもバチは当たらないだろう。ずっとゲームばかりやっていると怒られてしまうが、その辺りは幼いなりに董も弁えている。それに読書も面白いのだからそれで十分だ。そんな風にして風に閉じ

込められた午前中は過ぎていった。

　　ごうごうと風の音がするなかでの食事もまた普段と違う感じを董に与えた。荒れ狂う雨粒と目に見えない暴力は外に出ることの危険性をわかりやすく伝えており、それはたしかに怖れを抱かせるだけの効果を持っていた。だが董の心中には、恐怖とはまた異なる感情があつたのも事実である。わくわくしていたのだ。ごく単純な、これまでに体験したことのない何かが起きるんじゃないか、といった罪のない期待。どす黒いと言つてもいい雲の向こうに、未だ見知らぬ素晴らしい何かが見えるような気さえた。まだ十歳にもなっていないなかつた董はそれを論理的に考えるところで発想そのものを持つていなかったため、そこに理由を求めることなどしなかつた。ただただ途切れない興奮に身を浸していた。

　　ニュースではこれからさらに台風が接近するとの報道がされており、各地の被害状況やら何やらを伝えるためにレポーターが大変そうな状況に立たされていた。董の住んでいる地域はまだ本格的な強風に晒されていないとのことで、今よりもっと酷い天気になるのかと彼女は驚いた。これよりもっとスリリングな荒れ模様になるのかと、わくわくが強まった。

　　しかし董の期待に反して未体験のなにかは起きなかつた。実際にはただ台風が近づいてきているというだけなのだから当然のことである。ほとんど一定にさえ聞こえる

雨音と、食後ということも手伝つて董は眠気に襲われた。ふかふかなソファはまだまだ成長の余地を残した彼女の身体を掴んで離さなかった。

ふと目が覚める。姿勢がよくなかったのか、はつきりと位置さえわかるほどの頭痛がしている。言葉のかたちを成していない小さなうめき声を上げて、董は辺りを見回す。いつもの見慣れたリビングには違くないが、どうにも暗い。明かりが点いていないのだ。気が付けば体にかけられていたタオルケットをばさばさと退けて座りなおす。テーブルの上に紙片が一枚あるのに気が付いた。それによるとどうやら母親は買い物に行つたらしい。いくら立体駐車場のあるスーパーとはいえ、この天気のかな向かうのもどうなのだろうと董は思ったがまさか呼び戻すわけにもいくまい。諦めて董は電気を点けて小説の続きを読み始めた。

時間が経てば経つほどに風は強まった。午前中でさえ小さな董が外にはでられないな、と考えるほどの強風だった。それが今や吹くたび窓をびりびりと震わせるほどのものとなつてゐる。外から聞こえてくる音は、ときおり信じられないくらいに鋭いものになった。それは世界に対する知識も経験も足りない董を不安にさせてなお余りある威力を持つていた。

もはや午前中のわくわくなど消え去つていた。董の胸中をざわつかせるのは、空を覆

う雲と同じ色をした感情だった。明かりはきちんと点いているのに、ねずみ色をした空気があらゆる隙間から侵入してくるかのような気がした。外の、がなるような音がすべて自身をめがけて発せられていると勘違いしそうになる。董に取れる手段は何もない。目を閉じて耳を塞いでも状況は何ひとつとして好転しない。家という人工物かつ人のぬくもりが感じられる空間において、初めて董は孤独と自然の恐怖を知った。どれだけ願ったところですぐに母親が帰ってくることはなく、この世には絶対に逆らえないものがあるのだと身をもって理解した。

そのあとのことを董はよく覚えてはいないが、とりあえず母親が帰ってきたときに安心して腰が抜けたような記憶がある。あれほどドアが開く音を待ち望んだことなどなかったし、また今後もないだろう。とにかくその経験のせいで董は嵐があまり好きではない。統計をとれば好きではない人のほうが多いだろうが、董のそれは一般的なものはまたすこし違っている。

梅雨空のせいで余計なことを思い出してしまったな、とため息をつく。外へ出るのに

傘の手放せないこの季節は、祝日もないうえにテストやら何やらが重なるものだから年間を通してももつとも疲れが溜まるのだ。心なしかクラスの雰囲気も落ち着いているように感じられる。自分の席へ目を向けると、その後ろにはやっぱり照が先に来ていた。

「おめでとう宮永。ずいぶんご活躍だったそうじゃないか」

「ありがとう。それにしても耳が早い。部長から聞いたの？」
普段と変わらず手元の小説に目を落としながら照が返す。

「いいや、カマをかけてみただけだ」

「私もし負けてたら今のはすごく酷いセリフ」

董は手を口元にやって、くすくすと笑いながら鞆を置いた。照の表情はいつも通り変わることはなかったが、そのときだけは彼女の内心がわかりそうな気がした。

「信頼だと取れよ、エース」

「その呼ばれ方はあまり好きじゃない」

「そうか」

「そう」

それからは何もなかったかのように普段と変わらず過ごした。照と付き合いのある人から見れば明らかに照と董は仲が良かったが、それでもそのふたりはそこまでしよつ

ちゆう話をしているわけではない。どちらかといえば董はクラスメイトと話している時間の方が多いし、照は学校生活のほとんどの場面でじつと本に集中している。あまり高校生らしい友達付き合いとは言えそうにないのだが、それでうまくやっているのだから不思議なものである。

事前に聞いている部員が多かったためか、部室での個人予選の結果報告は董が考えていたものより淡泊なものだった。部長自身もそこまで持ち上げるような言い方をしなかったし、照に至っては全国に出られることになりました、の一言で済ませる始末であった。あるいは反応が淡泊だったのは期待の高さゆえだったのかもしれない。なにせよこれで白糸台高校麻雀部のこの夏の予定は決まった。それぞれが気合を入れるなかで、やはり照だけはその表情を変えていなかった。

梅雨時にあって珍しい快晴。いつもならじくじくと気分を悪くさせる空気中の水分がこの日だけはやけに少なく感じられた。あるいは普段の湿度が高すぎるために、その落差でそう感じるのかも知れない。まだ六月の半ばで、梅雨明けには少なくともあと三週間は必要だろう。今日は休日ではあるが部活に向かう生徒が多いらしく、駅からの通学路には白糸台の夏服が散見された。じりじりと近づいてくる夏に、学生たちの光る汗が応えているようだった。

董も鞆からハンドタオルを出して首筋に滲んだ汗を拭きとる。洗剤の清潔な香りが鼻腔いっぱいに広がる。母親と香りの好みが近くてよかったと董は思う。あまりくどさのない、くすぐるようなタイプのもの。考えてみればこういった嗜好が彼女のイメージを脇から固めていったのかもしれない。それが実像と結びついていくかどうかは別にして。

弘世董と宮永照は同じクラスで共に麻雀部に所属しているが、二人が同卓するという場面はそれほど多いものではなかった。それは主に実力をその原因としている。団体戦のレギュラー候補にさえ絡めなかつた董と、入部してすぐに絶対不動のエースへと上り詰めた照。たとえ董が中学時代に全国大会に出場した有望な選手であっても、それはこの白糸台高校での現実は何らの影響も及ぼさない。とくにこれからインターハイまでの時期は出場選手を仕上げていかなければならないため、部内の実力者同士が卓を囲むことが多かつた。

それでも打つ機会がまつたかないかといえばそういうわけでもなく、濃い青をしたきれいな空が見えるその日に、董と照は卓を囲むことになった。

卓の向こう、いや正確には董の下家の照は、気合を入れるでもなくただ座っているだけだつた。少なくとも表面上はそう見える。その表情があまりにもいつも通り過ぎて董は叫びだしたくなる。照の顔は普段授業を受けているときと何ら変わっていない。怒らない笑わないイヤそうな表情ひとつ浮かべない。それがここに至るまで継続されていることが董にとっては何より怖かつた。部に入るくらいなのだから麻雀に対する

思いは他の競技よりは強いだろうことは容易に推測される。だがそうであるはずなのにこの麻雀という競技に臨む場面において目の前のこの少女は眉ひとつ動かすことはなかった。それはまるで表情を作るといふ機能そのものを切り落としてしまったのではないかと思わせる。あの部活初日の感覚が董の中から消えることなどついぞありはしなかった。

(そうだ、この目だ)

董は局が始まると同時に起きる照の変化に息を呑む。あの平板な目が卓全体どころか打っている相手そのものまで見ようと動く。決して焦ったような動きなど見せずにも流れるように視線を配る。実に奇妙なことに、東一局であれば照はそれを同じ相手にも繰り返す。同じ面子で続けて打つ場合でもそれは変わらない。董はそこにこそ突破口があると思うのだが、未だにそれは具体的なかたちをとつてはいなかった。

ただ山から牌を自摸つて河に捨てるだけの動作を見られているだけなのに、受ける感じはそれとはまったく違っている。彼女の目には本来なら見通されるはずのない別の何か映っているような気さえするのだ。それはわずかな不快感とともに董の気持ちに逸らせる。早く撃ち落とせと理性が怒号をあげる。信じられないことに宮永照が卓につけば、そこには東一局から閉塞感が生まれる。誰もそれを打ち破れない。だから彼女がこの部の頂点に君臨しているとも言えるのだが。

他家の様子を見てみれば、董と大差ないようだった。鬪志こそ失われていないがそれだけの内側から聞こえてくる　「アレは倒せない」という声にどう逆らつていいかわからないのだ。気温のせいではなく額に滲む汗がそれを如実に物語っている。照を除く全員が必死にもがく。未だ場は東一局で、なおかつ卓上におかしな事象は起きていないというのに。彼女たちは理解しているのだ。次局に移つてしまえば照の時間が始まることを。それは太陽とともに朝が来るのと同様に、避けられる類のものではないことを。

十二巡目に董が二年の先輩に振り込んだ。焦るあまりに周囲のケアを欠いていたことそれ自体は否定できないが、董の手も仕上がりつつあつたため難しい局面ではあつた。苦い表情を浮かべて、ひとつ息を吐く。ここからだ、と董は気合を入れなおす。ここから先は部内でも地区予選でも誰一人として止められなかつた宮永照の時間だ。最初の和了はどれだけ遅くとも六巡目までには達成されるだろう。もちろんそんな馬鹿げたスピードと張り合うつもりなど董にはない。この局で董が確かめなければならぬのはまったく別の点にあつた。

三年の先輩が一鳴きしただけで、他に動きは見られることなくあっさり照が五巡目で自摸和了つてみせた。たしかにそれなりに麻雀を続けていれば、たまにはこういう早い巡目で和了ることもあるだろう。だが宮永照はそれを意図的に引き起こす。それが

彼女にとっての普通であるからこそ対局者の精神にダメージを与える。まるで照だけが別のルールのもとで闘っているかのような気にさえなってくる。怪物はにこりともしない。

（集中しろ、感覚を研ぎ澄ませ）

董は聡い。照に真正面からぶつかったところで敵わないのは理解している。だからそんな存在に対してただ挑んで、ああ負けた、なんてバカな真似はしない。いま弘世董は宮永照に一矢を報えることだけを考えている。その絶対性を崩してやろうと考えている。連続和了なんて止めてやる。そんな思いを胸に董は次の局へと向かう。

それでも照は圧倒的だった。ほとんど速度を落とすことなく打点だけを上げ続け、次の和了りで董を飛ばせるほどの段階まで差し掛かっていた。もちろんのこと東二局で和了って以降、彼女の連荘は続いている。山牌がせり上がってくるのを、照はただ無感情に眺めている。彼女の次の条件は最低でも六翻、跳満だ。いくら照といえどもその条件を一翻と同じようにこなせるわけではない。それでもせいぜいが一、二巡の遅れにか繋がらないが。

そのわずかな遅れが董にとっては値千金だった。彼女が挑んでいるのは、自分が和了ることではなく他家のアシストだからだ。事実として個人の技量で照に及ぶプレイ

ヤーはこの部にはいない。だが二人がかりならばどうか、それでもダメなら三人がかりでどうか。董はそう考えた。もちろん事前には話を通すだとかそんなことは許されないしするつもりもない。だから彼女は先輩たちに鳴かせることでそれを実行しようとした。だが席順に運がなかつたと言うべきか、下家には照が座っていた。つまり董から先輩たちへのアシストはポンしか存在しないのだ。この事実は董の集中力を跳ね上げさせた。他家が欲しがっている牌をピンポイントで射抜かなければならなかつたから。

そのとき何が起きたのかは当人である董でさえ理解できなかつた。

目に映る情報の無意識下での統合と極限まで高まつた集中とが重なつた結果なのか、それともただの幻覚なのか。先輩たちが待つている牌が、なぜか手に取るようにわかつた。別に手牌が全部透けるだとかそういうことではなく、ピンポイントでどの牌が彼女たちのキーになるのかが見えるのだ。意識ははつきりとしているし思考もきちんとできる。とくに危険な状態に陥つていようには思えない。自分自身を訝しむという奇妙な体験をしながらも、董はとりあえず自分を信じることにした。三年の先輩が欲しがっている（と董には思える）三萬を捨ててみた。

ポン、と董の捨てた牌をさらうための発声がなされる。本来ならば鳴かれることはあまり歓迎するべきことではないのだが、今の目的を考えれば成果とさえ呼べる。董は不思議な興奮を味わつていた。彼女の矢そのものが照に届いたわけではないが、それはこ

の閉塞感を打ち破る可能性を持ったものだった。

最終的にその対局では照の連続和了を止めることはできなかった。しかし一方で、董はその手になにか確たるものを掴んだ気がしていた。自分の手をじつと見つめながら拳を作り、また開いた。磨かなければならないが、それはきつと自身にとつて大きな武器になるだろうという確信めいた予感があった。知らず知らずのうちに董はまた、しかし今度は強く拳を握っていた。

董が先の対局で手に入れたのはそれだけではない。もうひとつのそれは、宮永照に対する見解である。彼女が強力無比な雀士であることに疑いはないし、穴らしい穴も見当たらない。それは事実だが、「こちら側から穴をこじ開けることは不可能ではない」。これが董の新たに得た知見である。つまるところ工夫次第では彼女を封じることが可能のひとつとして残るのだ。重要なのは常識から外れた麻雀を打たなくてもそれが実行できるという点である。ただ照に勝つことを考えた場合、そこからさらに発展した何かが必要だというのが問題だった。封じるといふのはあくまで宮永照の凶悪な連続和了に限定した話であり、照そのものではない。そこが董の限界であった。

対局を終えてすこし離れたところで飲み物片手に休憩していると、隣に照がやってき

た。彼女も飲み物を手に窓のそばに寄りかかる。何か話でもあるのかと思ひ、董は照のアクションを待っていたが彼女は何もしなかった。ただ部屋の様子を眺めて、ときおり思ひ出したように手元の飲み物を口へと運ぶだけだった。

東京都心の暑さは地元のものとはなにかが違ふ、と部長は思ふ。どこか、そう、身体の奥の方に重たいものを残していく暑さだ。インターハイのために移動してきて数日経つが、この暑さだけはどうしても彼女には慣れることができなかった。団体戦の序盤には試合の入らない日もあつたため部員とともに街に繰り出してみたりもしたが、外で歩くことの辛さは彼女の想定をはるかに飛び越えていた。白昼夢でも見ているかのようにゆらゆらと揺れる坂の上のアスファルトの向こうの景色を見たときに変な笑いがこぼれていたように見えたのは決して気のせいではないだろう。

そんなことを思ひ出しながら、白昼夢ね、なんて薄く笑う。

たしかに夢想しなかつたわけではない。彼女がここ数年パツとしなかつた白糸台を優勝に導いてくれることを。だがそれはあくまでそうなればいいな、という程度の可愛らしい願望であつて現実にならざる確信など持てるわけがなかつた。高校生という年

代は可能性がもつとも変動を見せる時期であり、そしてインタールハイという環境においてそれは花開いてきたからだ。常に想像を超える人材を育んできたからだ。

だが蓋を開けてみればどうか。想像を超える存在を連れてきたのはこちらではないか。嘆息混じりに部長は控室に設置された中継用のテレビに目をやる。強豪の中の強豪が集う準決勝において、やはり場の雰囲気支配しているのは宮永照だった。先鋒から副将まで誰一人として気の抜けない学校を相手にうまく凌ぎ、チャンスがあれば点棒を奪い、なんとか二位で繋いだたすきを照は簡単に一位にまで押し上げてみせ、今はそれを突き放しにかかっている。どうにも現実感の薄い光景に部長は自分の頬をつねってみるが、どうやら現実には違いないようだ。

宮永照の麻雀は、驚異的な力による制圧だけではない。底冷えのするような読みの手ささと、真綿を思わせる繊細さをも兼ね備えている。それらは対局が終わったあとに起こされた牌譜をつぶさに検討して初めて浮かび上がる類のものであるために、彼女のその特質にたどり着いている者は実に少ない。『強い』というその事実だけで大抵の間は満足か、あるいは諦めるのだ。

最終的な結果は白糸台の一位で終わったものの、さすがはその年の選りすぐられた高校の大将といふべきだろうか。誰一人としてハコを割ることなく準決勝を終わって

せた。それぞれやり方は異なっていたが基本的な方針は董のたどり着いたものと同じものだった。一般的な対局と団体戦との持ち点の差はあるにせよ、それをすぐさま実践に移せたかどうかが董と彼女たちとの決定的な差なのだろう。準決勝の終局をスクリーン越しに見ていた董の胸中は想像に難くない。

ともあれ初戦から十全に発揮されてきたその力量は、出場選手を含む会場にいる人々に白糸台の優勝という言葉を印象付けるには十分であった。もし彼女が大将の位置にいなければ他の学校にも優勝のチャンスはあっただろう。後ろの選手に逆転のチャンスが与えられるのだから。だが現実はそうではなく、宮永照を上回る戦果を上げなければ団体戦での優勝はあり得ない。そんなことが可能なプレイヤーはごく限られており、団体戦の妙といふべきか組み合わせの妙といふべきか、決勝戦の大将の卓にはそういった選手はいないことが判明している。つまりはそういうことで決まっているようだった。

くらくらするような、眩しい部屋を後にする。

廊下の色はよくわからない。白とも、ねずみ色とも、クリーム色ともつかない。

ひどく静かだ。

鈍く低い空調の音が廊下を満たすようにちいさく響いている。

わたしの帰る場所まで続いている。

わたしの帰る場所まで。

「お疲れ様、宮永ちゃん」

「お疲れ様です」

控室の前でのこのやりとりはいつの間にか通例となっていた。ただ部長が照を出迎えるだけのものです、それ以外の意味は何もない。部長は照が廊下の向こうから歩いてくるこの光景を、こうして何度も見ているがそこには常に変化などなかった。背景だとか髪の毛の長さだとかこまごまとした違いは別にして、その顔つきや挙動は録画した映像を流しているかのように一定だった。たとえば疲労がたまっているとかそういうった微細な変化であつても見逃さない自信を持っていたが、そんな雰囲気さえ感じ取れない辺り相当タフなのだろうと部長は思っている。見た目はまだまだ成長の余地を残していそうな体つきをしているが、どうやら中身は見た目通りとはいかないらしい。

照が手櫛で髪を整えるのを、部長は不思議そうに眺めていた。よく見てみればずいぶんと手入れのされた逸品であることがわかる。流れるように指が通つてすぐに元通りになつてゐる。今しがたまでメンバーにもみくちやにされてさんざんな状態だつた髪が、である。まあなんとも羨ましいものを持つてゐるな、と思ひながらも部長の関心は別にあつた。それ以前に抵抗もせずになすがままにされていたことにも疑問を禁じ得ないが、その一通りの流れのなかで表情がまつたく変化してゐないことに奇妙な感じを覚えていた。いつか読んだ漫画にそんなキャラクターがいたような気がするな、などと思考をあさつての方向に飛ばしながら。

翌日は夏らしい空、という言葉がぴつたりと当てはまるような空だつた。くつきりとした青と白のコントラストは、まるで油絵のように後から乗せたみたいに分かれてゐる。太陽はもう高く上がつて、東京だけでなくその光の届くすべての範囲を照らしていた。日向と日陰はそれぞれ別の空間と錯覚してしまひそうになるほどに過ごしやすさが違つてゐる。これからあと数時間も経過すれば今年度のインターハイ女子麻雀団体の優勝校が決まる。木陰がひどくゆつくりと進んだそのとき、決勝戦が始まつた。その過程は現実のステップとしては必要なものだつたが、しかしそれは言わば儀礼的なものでしかなかつた。なぜなら宮永照が白糸台の大将に控えてゐるのだから。

陽が沈むまでにはまだ少しばかりの猶予がある橙色の空の下。ある大きな建物の中で、わあっと大きな歓声が上がった。まるで待ち望んでいた瞬間が訪れたかのように、観客の口が一斉に弾けるように開いた。不思議なことにそれは歓喜の色に染まっていた。あるいはそれ以外の声は圧倒的な物量に押しつぶされてしまったのかもしれない。それほどまでに場内は熱狂していた。立っている客よりシートに座っている客を探すことのほうが手間がかかりそうなくらいだ。スクリーンに映っているのは、右側のぴんと跳ねた髪が特徴の高校一年生が右腕を突き上げている姿だった。

それはまるで古くから決められていた約束のように、誰もが納得をせざるを得ない光景だった。

六

天才というものは、決して人口の割合に応じて生まれるものではない。

そして照や董が生まれるおよそ二年ほど前に、四国は愛媛の地にひとりの天才が生まれた。彼女の才能はかなり多方面にわたるものではあったが、なかでも抜きん出ているのが麻雀に関するものであった。しかし彼女の育った白砂青松の地は、現代的日本に準じているかと言われるとなかなか頷きにくいような環境であった。幼いころの遊び道具といえば自身の肉体と、あとは自然そのものだった。春には野山を駆け回って虫を探し、夏には近くの海で思い切り泳ぎ、秋には落ち葉を踏みしめて果実を頬張り、冬でも鼻の頭を赤くしながら面白そうなものを見つけにそこらじゅうを走って回った。テールブルゲームになど目もくれなかった。

彼女は夏休みだとかの長期の休みに入ると、決まって家族といっしょに鹿児島を訪れた。それは恒例行事のようなもので、長い休みがあれば鹿児島に行く、と彼女のなかでも定式化されたものになっていた。そこには仲の良い従妹と、そのまた遠縁の親戚のよ

うなものがあるのだ。その親戚のなかにはけっこう年の近い子もいたりして、けっこう仲良くやっていた。それなりに複雑なコミュニティに内包されているとはいえ、子供は子供できちんと文化を築き上げることができなのだ。

中学校に入ってちよつと大人になった自覚を手に入れたその年の冬にも彼女は鹿児島を訪れた。夏は部活の練習があつてどうにも時間が取れなかつたのだ。小学校の六年間を活発に過ごしてきた彼女が選んだ部活はもちろん運動部である。かたや鹿児島の子供とその友人たちはひとりを除いて女の子らしいというか、活発な感じではない。分類するなら間違いなくインドア派というやつだろう。そんな彼女たちがみんなと一緒に遊べるものとして選んだものが麻雀だった。これまで訪ねてきたときには麻雀のままの字も出てこなかつたことを考えると、この一年の間に流行りだしたのだろうかと推測される。残念ながらそのときの彼女はまだ体を動かすことのほうに重きを置いていたから強い興味を示すこともなく、従妹たちが遊んでいるのを眺めつつ人数の関係で余つてしまった子と話をして過ごしていた。

髪も伸びて彼女の顔立ちがもうすっかり男子たちの注目を集めるようになり、やがて彼女自身の振る舞いも女の子らしさを飛び越えて淑やかさを感じさせるようになった。そんな彼女の卒業式が大変であつたことは想像に難くないが、とにかく彼女は無事に高校生になった。しかしそもそもあまり人の多くない地域であるため進学先もそれほ

ど多様とは言えないもので、高校に入ったところで中学からの友達が思ったより多いというのが実情であった。ある春の日、そんな友達の中の一人に麻雀部に入らないかと誘われた。彼女は中学で腕を磨いた競技にそれほど深い愛情を持っておらず、またいろいろな経験をしてみたいという思考の持ち主であった。そのためとくに悩むでもなくその誘いに応じ、彼女は麻雀の道へと足を踏み入れた。

彼女の名は、戒能良子。近年で麻雀の天才といえれば彼女のことを指すのが一般的である。

その経歴は実に輝かしい。高校に入るまで麻雀の名前くらいしか知らなかった彼女は、その年のインターハイ個人戦でいきなりベスト8に入賞する。翌年には団体戦でもチームを全国へと導き、そして個人では優勝してみせた。良子は自身の感性に従っていただけだったが、それがもたらした結果は尋常ではないものだった。

良子はその短い競技歴のなかで自身の核となる考えをひとつだけ手にしていた。麻雀とは可能性のゲームである。それが彼女の見つけたものだった。こういう言い方は多くの競技にも言えることなのだろうが、身を以て実感したことよりも説得力のある言葉など存在しない。だから戒能良子にとって、麻雀とは何よりも可能性のゲームであった。山から牌を自摸ってくるたびに手には新たな可能性を宿し、河へ牌を捨てるたびに可能性はその方向を定め、場合によっては対局相手の手へと影響を及ぼす。それは確率

などというちっぽけなものを遙か遠くへと置き去りにして良子を魅了した。つまり彼女にとつて麻雀を打つこととは、可能性を探求することを意味していた。

全国の麻雀好きが今年度のインターハイのなかでも女子個人でもっとも騒いだのも仕方ないことと言えるだろう。天才と新星の対決がおそらく見られるだろうから。その組み合わせを見てさらにファンたちは熱狂した。なぜならその二人がぶつかるとすれば決勝戦だったのだから。

(……しかしこの宮永さん、どうしましょうか)

良子はひとりため息をついて頭を悩ませていた。ふたつ年下の少女にこんな評価を与えることは失礼だと思いつつもこう思わざるを得ない。彼女は、モンスターだ。牌譜と実戦の様子とを見て特性とかその異質性は大まかには理解できた。いわゆる異能も彼女の驚異的な武器には違いないが、良子は注目するべき点はそこではないと考えていた。宮永照は実にクールだ。まるで判断を誤りそうな気配がない。麻雀において正しい判断などと言えば鼻で笑われそうなものだが、実際は違う。彼女には自身の判断を信じぬき、それを正しいものにしてしまうだけの力がある。自身の力をきちんと把握し、それを任意に振るうということを知っている。

もちろん決勝卓に残ったもう二人も強い。それも予選を勝ち抜いて本選の決勝まで

たどり着いた選手だ、波に乗っているに決まっている。おそらく誰の視点からでも一筋縄ではいかないであろう相手が揃っている。言ってしまうえば個人戦の決勝など常にそんなものではあるのだが、高校生活のうちでたった三度しかないチャンスなのだ。外から見た以上に卓に座る選手たちにかかるプレッシャーは大きい。

（とはいえ皆さん私より経験長いでしょうし、胸を借りるつもりで頑張るしかありませんね）

もうひとつため息をついて良子はベッドに身を投げた。自室のものより大きなベッドはやさしく良子を受け入れた。さらさらの生地が心地よい。明日の決勝が終われば帰ることになるのかと思うとなんだか名残惜しいな、などと良子は考えていた。

関東平野部はじつとしていて汗が止まらなくなるような気温と日差しになる、という天気予報の言う通りにインターハイ麻雀女子個人の決勝が行われるここ東京はすさまじい暑さになっていた。アスファルトに卵を落とせば目玉焼きができそうなくらいだ。熱を持った都市独特の匂いと少し遠い蝉の音が、さらにその気温を強調している。道行く人の誰もが早く目的地に着いて建物の中に入りたそうな顔をしていた。

試合開始時刻こそ午後ではあつたが、午前十時には開場自体はされている。注目の試合というだけあつて、席を取るために開場前から並んでいるファンが多く見受けられた。ちなみにホール内では高校麻雀の関連商品も取り扱っており、お土産として人気を博している。

いま選手控室に入ること許されているのは決勝卓につく選手と、その籍を置いている高校の選手あるいは引率者だけである。観客たちが見ることのできない選手用のスペースは地下に設置されているため、実に広い。それだけに控室を使用している高校が少なくなつてくると、そこは静寂に満たされる。単に静かなのではない。見えないなにかが張りつめて、壁を、床を、天井をぐいぐいと押ししているのだ。それは誰にでも体験できることではない。優れた者にしか見えない景色というものは、たしかに存在する。

ひやりとした廊下の空気が露出した腕の肌を包んで、神経を鋭くさせる。意識しているつもりはまつたくないが、それでもいつの間にか手に力が入っていた。大舞台というのはそういうものだ。たとえその競技の第一人者であつても緊張から逃れることはできない。それは決まつて自身の内側からやつてくるからだ。よく大舞台でも緊張しないなどとうそぶく輩がいるが、そういう人たちはほとんどの場合において活躍できないと良子は考える。彼らは見栄を張っているのがほとんどで、あとは例外的にどこかが壊

れている人がごく少数存在するだけだ。最高のパフォーマンスを発揮するには適度な緊張は必要であり、自然体がもつとも実力を発揮できるなんていうのはうそっぱちなのだ、と。そういう意味で良子はもう戦闘態勢に入っていた。廊下に彼女ひとりでもよかつたと考えべきだろうか、その様子は余人を寄せ付けないものだった。

意外に意識されていないことではあるが、対居室は無骨な造りをしている。部屋の中に台形のステージが設置されている。その骨組みは材質こそよくわからないが銀色をしたパイプを組み合わせたもので成っており、装飾らしい装飾はどこを探しても存在しない。ただ麻雀を打つために、またそれをファンたちが見るためだけに作られたその空間はひとつの意味で美しかった。

台形の上辺にはすでに三人が立って待っていた。それぞれが良子を射竦めるような鋭い目つきをしている。なぜかその視線を受けて良子は安心した。どれだけ時間がかかったとしても一時間にも満たない短いやりとりのなかで、彼女たちは多くのものを共有する。それはほとんど言葉も交わされなない不自由なコミュニケーションのように見えるが、彼女たちのあいだでは打牌のひとつひとつが言葉よりも多くのことを物語る。彼女たちはこの夏、いちばん最後まで麻雀を打つことを許された選手なのだ。

その卓でもっとも印象深かったものは何かと聞かれれば、良子は宮永照の目だと答え

るだろう。感情の起伏のない平板な目で、だからこそ妙な不安を煽る。彼女自身にどう見えているかは良子にはわからないが、同時にその目は見透かすという言葉がよく似合うものだった。あまり両立しそうには思えない印象だが、事実としてそう感じているものに嘘はつけない。東一局を必ず見に費やすというプレイスタイルも含めて、照の目は飛び抜けて印象が強かった。

この半荘は様子見などしていられない、初めから全力でいかなければならないというのが良子の考えだった。まず学年の違いがその大きな根拠になった。一年や二年くらい長生きした程度で大きな違いは出ないという考え方には良子も賛成だが、彼女が考えていたのは全国大会の経験という点だった。良子は昨年も一昨年も全国大会に出場しており、そのぶん多くの選手と卓を囲んできた。そしてそうなれば顔なじみの特殊な打ち手も出てくる。直接ぶつかった者にしかわからないプレイスタイルをより多く知ることができる。もちろん今大会にもそういういった選手は何人か見られた。だが宮永照は初めて体験するはずのその特殊な打ち手に対して実に適切な対処をした。それも東一局でその特殊性を發揮していないにもかかわらず、である。自身の経験と彼女の経験とを比較して、良子はひとつの結論を導く。つまり宮永照に対して隠し事をするのは無意味であり、であるならば初めから攻撃的に行くのは当然の帰結だった。

挨拶代わりの良子の跳満自摸で女子個人決勝戦は幕を開けた。状況は一気に良子へ

と傾いたように見えるが、その実そこまで簡単な話ではない。稼いだ点数はただの現時点の表示でしかなく、ことによるとたつたひとつの打牌でそんなものはひっくり返る。とくにこの卓は相手が相手だ、照の待ち構えるオーラスが終わるまで油断など許されることではない。そして卓についている全員どころか観客席にいるほとんどの人間が気付いていた。ここからあの少女が動き始めるということに。

風が、通り抜けた気がした。

理屈ではなく、ただ理解だけがそこにあつた。今の一瞬で、卓についている三人の情報が宮永照に割れた。良子以外の選手もある程度までは推測がついていたのだろうがまさか見られる側の感覚にまで訴えてくるとは想定していなかったのだろう、三対の視線は照のもとへと向けられている。それを受けてなお平然としている様子はある意味においては当然と言えるものだったが、一般的な意味においては異常そのものだった。

東二局の配牌を整えようとしたその辺り、宮永照の発する雰囲気が一変する。表情こそ変化していないが、ただそれだけだ。気配やそういうものに対して鋭敏な感覚を持っている良子から見ればその変化は目を疑いたくなるようなものだった。肩越しに見える景色が揺らいで見える。良子はこういう言い方が適切ではないとわかつてはいたが、それでもその身に纏う空気は女子高生が持つていいものではないと思わざるを得なかった。彼女はただ配牌をじつと見ているだけだった。しかしそれなのに、良子はなに

か決定的なものを手繰られているような、そんな思い込み染みたまものから逃げる事ができなかった。

決して良子に油断があったわけではない。彼女は照を倒すべき敵であるとしつかり認識できていたし、その覚悟は昨年個人戦を制したときのものと同比でも何ら遜色のないものであった。しかし良子に要求されていたものは、昨年のもをはるかに超える覚悟だった。

たつた四巡。それだけの間で宮永照は配牌から聴牌まで持っていき、良子から和了つてみせた。振り込まないようにと考えたところで警戒もなにもあったものではない。不幸な事故としかたとえようのない出来事だった。幸い彼女はまだ動き始めたばかりで打点は最低限のものであつて、それ自体が致命傷になるようなことはなかった。良子の顔に動揺は見られない。速度こそ異常と言つて差支えないが、それでも想定を超えるようなものではなかったということなのだろう。

（さーて、まずは第一のチェックポイントですね）

真正面から叩き合えばおそらく分が悪い。そう考えた良子はいくつかの対策を考えた。だがそれを実行するにも確かめなければならぬことがいくつかあった。たとえば宮永照の打点上昇は本当に一段階ずつしか上がらないのか。そこにまだ別のルールは隠れてはいないのか。半荘一回というごく限られた機会で見定め、アクション

を起こさなければならぬ。そこに不確実な要素が入ってしまうのは避けられないことであつた。だが逆に言えばどちらの意味にせよその確認がとれば良子は動くことができる。パターンによつては多少の振幅幅こそあるものの、それでも彼女は有利に戦況を運ぶ自信があつた。

戒能良子も、実は特殊な能力を持つてゐる。もともと引きが強く頭も回る彼女にとつて、それはあまり使用される機会のないものだつた。実際にこれまで良子は公式非公式を問わず大会においてそれを使ったことはない。効能でいえば良子の能力より優れてゐるものはいくらでも存在するし、能力だけでいえば鹿児島に従妹の友人たちのほうが余程のものを持つてゐる。彼女自身もそこは認めるところだつた。だがそんな能力の強弱を帳消しにするような特質が、彼女の異能には備わつてゐた。能力の発動を誰も捉えることができないのである。そして本来ならばあまり役立つとはいえない彼女の異能は、その特質によつて凶悪な武器へと姿を変える。

翻数はもともと上げていくことを主眼とするものであつて下げるべきものではない。結果として下がつてしまふことなどはあるにせよ、意識して下げるプレイングは存在しないと云つていいだろう。翻数を上げ下げすることは手役を変更することと意味を同じくしており、そのぶん遠回りをしなければならぬことは自明である。それは宮永

照についても言えることであつて、彼女が手を遅らせることがあるとすれば翻数の調整を措いて他にない。現況である東三局という場合は、宮永照が動き始めたばかりの局であるのだから翻数を上げることに苦勞することはないだろう。二翻以上にすればよいのだから。ということはおもひ彼女がもたつくとすれば手を下げること苦心しているということであり、それは同時に彼女が一段階ずつでしか打点を上げられないことを意味する。仮に宮永照のルールがそういうものであるならば良子は異能を気兼ねすることなく使用し、それを実に簡単に抑え込むことができる。彼女のルールが違つていて、上がった翻数のまま和了つたとしても問題はない。良子の能力は任意の対局相手の手役を上げてやり、その局で相手が和了つた場合、後の親番でその相手から一翻増しを直取りで徴収するというものであるからだ。

東三局は九巡目で良子の対面に座つてゐる選手が自摸和了つた。そして同時に確信する。彼女は一段階ずつしか打点を上げられない。それが彼女のルールだ。他にも何かを隠している可能性はあるが、今はそれを考えても仕方がない。当面は照を封じることができるとわかつた良子はそれに合わせてプランを練り始めた。

もちろん彼女の目にはこの能力も見えてゐるのだろう。だがそんなことは関係がない。なぜなら彼女には現時点で打ち破る手段がないからだ。もし照がふつうに打つことができたならば對抗する手段もあつただろう。しかし照のルールは打点を徐々に上

げていくというものだ。そしてその性質上、照は一発で逆転するという打ち方ができない。いつもの頼みの綱の連続和了は潰されている。決定的だった。

そこから先は照の親番だろうがまったく関係のない戦いだつた。良子が能力を使うタイミングさえ間違えなければ照から数巡は稼ぐことができたし、その間に残つた三人で決着をつけることなどそれほど難しいことではなかつた。一度は全員の自摸が噛み合わずに照が和了することもあつたが、それでも打点は最低水準のものであつて怖れる必要などどこにもなかつた。

意外なほどにその卓は静かで、少なくとも観客たちには熱気のようなものは感じられなかつた。スクリーンの向こうの音声は会場側には流れてこない。もちろん逆も然りである。つまり見方を変えれば決勝卓に座っている選手とそれ以外とは完全に隔離されておき、観客は別世界での戦いをスクリーンを通して見ているということになる。それはカメラという機械を通すことによって、すこしだけ現実感が削ぎ落されているような感じがした。

南場の良子の親が流れて照の親番。点棒状況は良子がトップで四万点と少し、あとは二万点前後で三人が固まっている。照は自摸以外で削られることがなかつたため、和了れずともそこまで酷いことにはなつていなかった。このオーラスさえ凌いでしまえば

戒能良子の優勝が決定する。逆転するには良子から跳満を直撃するか、あるいは倍満を自摸和了るしかない。条件として非常に厳しいものだ。照は親番であるから翻数の条件はひとつ緩くなるがそれほど変わりはないだろう。連続和了は封じられているのだから。

ただただ響くのは無機質な音。それは自動卓が発するものであり、空調から漏れるものであり、雀牌となにかがぶつかって鳴るものである。前局の間に洗牌され、形をきちんと整えられた山牌が卓上に姿を見せるその瞬間、良子の下家に座る高校一年生の身体が脈を打ったような気がした。

どくん、と空気を震わせて、宮永照の手が動く。その身に纏う雰囲気は、また性質を異にしている。ぴりぴりと目に見えないほどの小さな粒が肌を打つ感覚は、その危険性を本能の部分が訴えているのだろうか。空調の利いた対局室にいて、この良子の頬を汗が伝う。無機質な音に満たされた空間にあつて、だからこそ無言の圧力が重い。牌を山から自摸る動作でさえ億劫になるほどの昏く粘つく空間で、南四局が始まった。

良子からすれば、この局はタンヤオでも役牌でもいいからさつさと和了ってしまった。よかつた。それだけでこの不穏な空気から逃げられるし、何よりそれで優勝が決まる。これまでとは明らかに違う雰囲気宮永照を相手にしている余裕などない。様子見なんて強者ぶって逆転を食らうなんてことになれば笑い話にもならない。そして照はそ

れを可能だと思わせるほどのものを持っている。なぜ最後の最後までこれだけの力を隠し持っていたのかなどの疑問は尽きないが、それはいったん後回しにするべきことだった。

ぎ、ぎ、と建付けの悪い木製の扉が軋むような音を、良子は耳にした気がした。

現在トップに立っている良子が速度に重点を置き、ほかの二人が逆転するだけの手を作ろうとしている状況で、照の手は一翻のものではなかった。それはおかしなところもなく順調に満貫手へと育っていったが、それこそがおかしなことだった。先ほどまで存在していなかった可能性が新たに生まれている。良子はどこか肌寒さを覚えずにはいられなかった。

「……やっぱり足りなかった」

そう小声でつぶやき、照は手牌を倒して三人から四千点ずつの点棒をさらっていく。その手からこれから連荘で逆転をするという覇気は窺えなかった。点棒を持っていけばそれでこの対局は終わりと言わんばかりの弱弱しさだった。だが実際には良子と照の点差はもう五千点もない。次に照が何かを和了ればそれでひっくり返ってしまうような差だ。良子は気を落ち着けるために深く息を吸って吐き、膝の上の手を固く握りしめた。

南四局一本場の四巡あたりで良子はふと気が付いた。先程まで卓を覆っていたあの重たい空気が消えている。痛いほどに感じていた宮永照のプレッシャーがなくなっている。そこにどんな理屈があつたのかはわからないが、なぜか彼女は戦う気を失くしているようだった。そうなってしまえば早和了りを目指す良子と逆転手を狙うもう二人の争いでしかない。そのまま圧倒的優位を覆されることなく、戒能良子は個人戦連覇を果たした。

卓をとともに囲った彼女たちでさえ、あつけないと感じる幕切れであつた。

七

がたん、ごとん、と揺れる電車は都心からは離れる方向へと進んでいく。太陽はまだ沈んではおらず、西日が董と照の背中側から斜めに差し込んでくる。ふたりのいる車両にはあまり人が乗っていない。時間帯で言えば、多くの社会人はまだ仕事をしているだろうし、遊びに出かけている人はこれからが本番というところだろう。だから不思議なくらいに車内に人は少ない。

ふたりが電車に乗ってから五分ほど経っているが、どちらも言葉を発さない。ただ前をじいっと見つめているだけだ。おそらくどちらの視界にもオレンジ色の光線を受けてきらきら光る手すりが目に入っているだろう。冷房のせいで少し冷たい空気と、流れていく景色と、際限なく一定のリズムで続く線路と車輪がたてる音。ときおり体を左右に揺られながら、それでもまだ言葉は生まれなかった。

董の目には、決勝戦がひどく不自然なものに映っていた。それは原因を突き詰めていけば結局は宮永照が負けたということに落ち着く。現実には自身が肌で感じた。最強が屈するというのは董にとっては受け入れにくいものがあつた。たとえばそれが天才と呼ばれる相手であつても、である。東三局で照が連続和了できなかったとき、董は半ば放心したようにスクリーンを眺めていた。インターハイに出場している他校のどの選手よりも彼女のプレイングに関する異常性を知っていたからこそ、なおさら董の感情は目に映る現状を認めようとはしなかつた。唯一の救いは、それでも照がまったく表情を変えなかつたことだつた。

それから表彰式までの時間をどのように過ごしたのかを、董ははつきりと憶えていない。色素の薄まった川を遡行するように、ただただ何にもぶつからないように移動していたことだけは憶えている。しかしその間に話した相手の顔や内容、手にした飲み物やそういったものの具体的な事柄は何ひとつ記憶にない。気が付けば観戦していたときとは違う席に座つて表彰式を見ていた。

決勝卓についた四人にあてられたライトは、画面の向こうの現実をどこか遠い世界での出来事のような印象に作り替えていた。優勝者に贈られる楯を受け取つてうすく微笑む戒能良子は控えめに見たつて絵になつており、それこそ次に発売される麻雀雑誌の

表紙を飾っていてもおかしくないような姿だった。誰もが認める王者の姿。それも二年連続優勝というめつたに見られないオマケつきだ。観客たちはその音が届かないことを理解しつつも彼女への拍手をやめなかった。万雷の、という感じではなく穏やかに祝福する拍手が場内に響く。同席している白糸台の部員も董自身も拍手を贈った。だが、それでも、という思いを董は捨てきれなかった。それでも一番強いのは宮永照なのだ、と。

女子の部の全行程が終了したのは午後四時を過ぎたところで、西と東の地区の違いはあるとはいえ同じ東京ということでは白糸台は現地解散だった。大きな荷物は午前の段階で発送しているし、そのまま街へと繰り出すのもアリだろう。もちろん羽目を外しすぎないという前提はあるが。そうしたなかで、董と照はまっすぐ帰ることを選んだ。別に事前に約束していたわけではない。いざ解散、となったときに迷うことなくふたりは駅へと向かって自宅のあるほうの電車へと乗り込んだのだ。

人のいない車内で、董の意識がとある音を捉えた。それは電車の立てる音ではなく、ぼたぼたと何かが布地をうつ音だ。ちょうど雨が降り始めたときに聞くものによく似ている。外を見れば雨が降っているわけでもないし、電車で水漏れというのものもなかなか考えにくい。さてどこからこの音がするのかと辺りを見回してみれば、なんとすぐ隣に

座っている少女の瞳から、ぼろぼろと大粒の涙が零れていた。透明な滴は頬を伝って小さな顎の先端に集まり、不規則に滴っては制服を濡らしている。拭うでもなく堪えるでもなく、ただただ溢れるそれをそのままにしている姿は、まるでそのように創ることを目的とした彫像のようだった。

董は今すぐ言葉をかけるべき状況であることを理解していたが、肝心の言葉がなにも浮かんではこなかった。通りいっぺんのものならそれなりには思いつくが、それはきつと照の体を上滑りしていくだろう。いきおい董は黙らざるを得なかった。正しい選択とは言えないが、決定的な間違いをしないだけいくらかマシだろうとの考えのものと判断だった。名前のない感情のかたまりが身体の中で暴れるのを、董はじつと耐えるしかなかった。電車の窓には、その構造のせいで二重にブレたふたりの姿が映っていた。

「……負けた」

小さな口がぼそりとつぶやく。大粒の涙はときおり思い出したように流れていき、制服を叩く。

「ああ」

「ねえ弘世、私いますごく悔しい」

「ああ」

「……………弘世はやさしいね」

「……そうか」

結局ふたりが目を合わせることはなかった。

インターハイの会場がある都心に比べれば自然の豊かな白糸台高校の近辺では蝉の声が少しだけ近い。さすがに降り注ぐような、とはいかないがそれでも差は感じ取れるくらいのものだ。

遮るもののないまっすぐな日差しが学校を目指す葦を襲う。ちりちりと少しずつ皮膚が焼かれていくような感覚は、意識するとくすぐったいような気さえしてくる。電車から降りて五分も経っていないのもう汗が噴き出してくる。タオル地のハンカチがだんだんと湿っていく。こんな日はプールなんか気持ちよさそうだな、なんて葦は独り言ちる。もちろん夏休みに学校に向かう理由など部活以外ないのだから葦のそんな希望は通らない。

校内に入った途端にすつと涼しさを感じて葦はふう、と息をつく。日陰にいても十分に暑いのだが、その感覚がマヒしてしまうほどに外は暑い。気温自体は三十二度を上回っているが、直射日光の下で計ればそれがどれくらいの数値を示すのか想像もつかな

かった。下駄箱で上履きに履き替えて廊下を歩く。今日は風もないため窓を開けても閉めても変わらない。いやどちらかといえれば外の温められた空気が入り込んでくるから閉めておいたほうが正解とすら言えるかもしれない状況だ。それもこれも冷房の入っている部室につくまでの話なのだから麻雀部は恵まれている、なんて意見は董には聞こえない。

高校生の麻雀部員の最大の目標であるインターハイが終わった直後だ。それに急いで照準を合わせるような大会もない。だから今日の部活は三年生の引退式を兼ねた自由につづきの一日なのだ。もちろんそれとは別に引退パーティーのようなものが企画されてはいるが。そしてこの日が終われば一週間ほどの休みを経て、一、二年生だけの新体制が始まる。

「董ちゃん、ちよつといい？」

「ええ、大丈夫ですよ」

声をかけてきたのは肩までかかる髪を後ろで一本にまとめて下ろしている二年生の先輩だった。彼女は「部長」からこの部を引き継ぐ立場の人間だ。とても優秀で、

二年生でありながらきちんとレギュラー候補にも名を連ねていた。そんな彼女に連れられて、董は多くの卓が見渡せる窓際のほうへと足を運んだ。

「せんば、……いやもう部長ですね、どうしたんですか」

「なるほど、これは慣れないね」

何かを思い出すように彼女はすこし遠い目をしてつぶやくが、董にはよくわからなかった。

「ああ、ごめん、こつちの話。もちろん本題は別だよ」

彼女は申し訳なきような笑みを浮かべて董に向き直る。部室全体からいつもとは違う楽しそうな声が響いてくる。いわゆる無礼講というやつだろうか。

「それで董ちゃんに話したいことっていうのは、まあ私が部長になることについてなんだけど」

董は彼女の言いたいことが掴めないために、言葉を発さずに聞く姿勢を維持している。

「正直言つて私には部長って立場は荷が重すぎる、と思う」

「いやそんなことは……」

「別に自分を卑下するわけじゃないんだけど、私には部長ほどの求心力はないし」

ああ、と董は内心で納得する。目の前の先輩を侮辱する意味合いではなく。董は

部長” が他の人にはないような輝きを持つているとは考えていない。たしかに懐が深いような気はするが、それは割と多くの人に見られる美点だろう。ふつうに笑った時、ときたま機嫌が悪かったりとかくふつうではあるのだが、なぜか人望を集めた人を引つ張るのではなく、中心にいて安心感を与えるタイプのリーダーだった。おそらく努力では到達できない、生まれもつての人間的な魅力がそれを実行することを許したのだろう。

「もちろん一年にも気を配ろうとは思うんだけど、きつと無理が出てくると思うんだ」
「そうでしょうね、一般的に見ても少なくない人数ですし」

ようやく董は彼女の言いたいことを理解した。それと同時にすこしだけ傷ついた。誰も悪くないことは聡い董にはわかつてはいたが、小さなため息を止められなかった。その意味を理解していたかどうかは定かではないが、新部長は迷うことなく切り出した。

「董ちゃん、一年生全体のとりまとめをお願いできない？」

どのみちこうなることは避けられなかっただろうから、董は首を縦に振ることでそれを了承した。浮かべた笑顔は寂しげなものだったがそれも仕方ないことだろう。一方で肩の荷が下りたといった表情をしている新部長の視線の先には、やはり宮永照がいた。

二着で半荘を終えて、部長は雑談もそこそこに席を立った。さすがにこれまでいた場のせいもあつてかお誘いが絶えないな、とひとり思う。その目はきよるきよると、ある部員を探していた。部室が広いうえに部員の数もなかなかこともあつて特定の部員を探すというのは意外と難しいのである。これがたとえば董のような長身で、なおかつ立っていてくれれば見つけるのは簡単なのだが彼女が探している部員はそうではない。どちらかといえば特徴の少ない子なのだ。加えて物静かなので集団の中では本当に埋もれやすい。とはいえ勝手知つたる麻雀部、部室さえ出ていなければ見つけ出すのにそれほど時間はかからなかった。

目当ての人物は椅子に座つてじつとある卓を眺めていた。それは彼女が対局時に見せるような、恐怖を抱きたくなるような視線ではなかった。ただ純粹に目の前で行われている競技を見ている、という感じだった。そんな姿を見たような記憶がなかったから、部長はわずかな間だけ卓を眺めている彼女を見ていた。卓についていないときの彼女は部員に囲まれている、弘世董と一緒にいる、あるいは読書をしているのどれかだったから。

それにしても、と思う。この少女が団体戦優勝の原動力かつ個人戦準優勝のプレイヤーだと言ったところでどれだけの人が信じるだろうか。もちろんインターハイの映像を見ていない人限定で、である。人は見かけによらないという言葉があるのは知っているし自身に対して使われることもよくあるが、宮永照に比べればまだまだだよなあ、というのが部長の正直なところであつた。

「や、宮永ちゃん。隣いい?」

そう言つて返事を待たずに部長は照の隣に座る。他の人ならいざ知らず、部長ならばそれは強引にはならない。自然と身についたものなのだろう、その動きにぎこちなさは見られなかつた。ほどよく設定された室温のおかげで、椅子がすこしひんやりとしていゝ。およそ高校生や大学生になると女子は学年の判別がつきにくくなるというが、並んで座っているふたりもまさにその通りであつた。

結局この子の表情が変わるところを見られなかつたなあ、などと思ひながら部長は隣に座る照の横顔を見やる。髪も肌もきれいだ。顔の造りは日本人的で、はつとするような美しさがあるわけではないが可愛らしいと評するには十分だろう。メディア映える、いやしてしまうことに疑いはない。これから彼女に話さなければならぬ内容に思ひを馳せて、部長はちよつと気が重くなつた。

「ねえ宮永ちゃん、インハイ行つてみてどうだつた?」

何とはなしに部長が話しかける。別に聞かれて困るような話題などないのだから、場所など気にする必要もない。

「……よく、わかりません。全部がぱつと終わっちゃったような気がしています」

「そっか、宮永ちゃんも緊張してたんだね」

部に入って四か月も経つというのに照のぼそぼそとした話し方は修正される兆しすら見せない。大の仲良しと思われる弘世堇にすらこのように話すらしいので、そこに関してはもう身についてしまった部分なのだろう。堇が彼女を心配した理由が改めて部長にはよくわかった。

「……ありがとね、宮永ちゃん。団体で優勝できたのは間違いなく宮永ちゃんのおかげだよ」

「先輩方が繋いでくれたからです。私の力じゃありません」

それを聞いて部長は手の甲を口元に近づけてくつくつと笑った。

「そうだね、ひとつ覚えておこうか。謙虚っていうのは過ぎると失礼になることもあるんだよ」

相変わらず表情が変わらないから照がどのような言葉を受け取ったかははっきりしなかったが、部長はとくに気にする様子もなかった。照の頭が悪くないことなど、とうにわかりきっていることだ。

窓の向こうはこの夏一番と言つてもいいくらいに晴れわたつており、冷房の利いた室内にいてというのにその暑さが察せられるくらいにはすさまじい日差しが降り注いでいる。これから彼女の進む道がこの景色くらいに明るければいいのに、と部長はひとり思つてまた口を開いた。

「ところで宮永ちゃん、わたしはキミに謝らなくちゃならないんだ」

さすがに話の方向性がつかめず、照は無表情のまま首を傾げる。器用なものだ。

「きつとこれから宮永ちゃんは少なくとも麻雀界でとんでもなく注目されることになる」

「注目、ですか」

「うん。雑誌のインタビュートかテレビ取材とか、わんさか来ると思う」

照には今ひとつぴんと来ていないようだった。それも当然だろう。急にそんなことを言われて、呑み込める人のほうが珍しい。

一応ね、と前置きした上で部長はその辺りを取り巻く事情を説明した。麻雀の熱が高まつているせいで忘れられがちだが、インターハイに出場しているのはすべて高校生である。したがって正式に取材をする場合、まずは学校を通してからでなければそれは成り立たない。これはいわゆる紳士協定であつて、明確に文書化されているものではない。もちろん協会が目光らせていることもあり、たとえば記者が選手の自宅に押し掛

けるような事態は発生していない。

「以上のことを踏まえてなんだけど、大丈夫？ わかりにくいところなかった？」

照はこくこくと頷く。

「でね、実は予選以降、明らかに宮永ちゃん目当ての取材が殺到してたんだ」

「……でも、そんなのひとつも」

「実はわたしと学校で内々に処理してたんだよ。あ、別に感謝してほしいとかじゃなく」

実際のところは彼女が言うよりも壮絶であった。予選直後の取材申し込みは学校側で対応しきれれる程度のもだったが、本選ではそうはいかなかった。インターハイ本選という有力選手が集まるような環境で、報道陣がどうにかコメントをもらおうと奔走するであろうことは想像に難くない。時には自身がインタビュースタッフに應對したり、時には監督に力技をお願いすることで部長はそれを本人どころか周囲にも悟られることなく巧みに回避した。あるいは照が実力を発揮しきれたのは彼女の働きによるところが大きかったのかもしれない。

「でもわたしは今日で引退だし、宮永ちゃんの注目度はもつと跳ね上がってる」

「……………」

「団体優勝の立役者の上に、個人である戒能さんに次いで準優勝だからね」

黙り込む照に対して申し訳なきを感じつつ、部長は話を続ける。

「わたしはもう手出しできないし、学校側も全部断るのは無理だと思う。だから、ごめんね」

「……どうして、そこまでしてくれたんですか」

ごくごく珍しい照からぶつけられた質問に、部長はすこし嬉しくなった。部長の目から見ると、彼女はなんでも自分一人の力で解決するタイプに見えていたから。

「たとえレギュラーとはいえ大事な一年の部員に負担をかけたくないってのがひとつ」

照は眉ひとつ動かしていないがこの話に興味を持っているのだろう、部長の目をまっすぐに見つめていた。

「もうひとつは、頼まれたからだよ。弘世ちゃんに」

「弘世が？」

「そ。アイツは取材対応なんてできないだろうから助けてやってください、ってね」

言い終わると同時に部長はふわりとした笑顔を浮かべる。たしかに照がここまでのプレイヤーだとは思っていなかったが、それでも注目を集めていただろうことは間違いない。だからこの事態は避けられるものではなく、それを考えた上で部長は初めから照に全てを話す気だった。おそらく董はそんなことを言う必要はないと主張するだろう

が、部長の考えは違っていた。部員のことを心配して自分に相談までしてくれた董に報いるところがなければおかしいだろう。そう考えていた彼女は照を基準に考えた根拠をいくつか持つてはいたが、それを些末なものとしか見ていなかった。

その日の部活は夏の太陽がとつぷりと暮れるまで続き、現在の部員がすべて揃う最後の時間を、彼女たちは心の底から惜しむようにして過ごした。

董の頭を悩ませているのは各科目から出された夏休みの課題でも多くの女子高生が気にしがちな体型のことでなく、インターハイ本選前に照と打ったときのあの感覚についてだった。なんとかあの状態を再現しようと頑張つてはいるものの、結果はあまり芳しくはない。ときおり似たような感覚もあるにはあるが、以前のような確信は得られていないのだ。単に調子の問題なのか集中力の問題なのか、はたまたそれらとは異なる問題があるのかと考えてみても比較対象となる成功事例がひとつしかないのだからなかなか結論は出そうになかった。

いつそのこと同じクラスの大家エースに尋ねてみようかと董は考え付いた。自分より格上の人間に教えを請うのはおかしなことではないし、上達のためにはプライドなどいろいろいな問題でしかない。たしかに尋ねる内容が董の感覚に関するあやふやなものだから満足な回答が得られるとは限らないが、ダメでもともとと考えれば聞いてみる価値はありそうだ。夏休みはあと十日ほどで終わるが、次の大きな大会まではかなり時間があ

る。様々な可能性を試すためにも、董はまず照に聞いてみることを決断した。

暑いには暑いが風もあつて湿度も低いその日の昼食休憩も、董はいつも通りに照と食事をとつていた。夏休みの校舎は教室こそ閉まっているが行ける場所は案外多く、なんでも麻雀部部长に代々伝わる秘密の場所なんてのも存在するらしい。

お弁当をつついている間にも機会を窺つてはいたのだが、照には食事中だと受け答えがおろそかになる癖がある。これからする質問は董にとつては非常に大事になり得るものだ。だから食事中はなんでもないような世間話をしつつ、きちんと質問できるタイミングを待った。

「なあ宮永、ちよつといいか？」

「うん。でもその前にひとついい？」

これまでの会話のなかに存在していなかった切り返して董は驚きつつも頷いた。

「弘世に宮永って呼ばれると監督に呼ばれてるみたいで、なんかいや」

「なんだそれは……。呼び方を変えろつてことでいいのか」

「そう。照つて呼ぶといいと思う」

「ならお前も私を下の名前で呼べ。そうじゃないと不公平だろう？」

「わかった、董。これでいい？」

「上出来だ」

どうして照が突然こんなことを言い出したのかはわからなかったが、董はさして気にも留めなかった。それよりは自身の麻雀の腕の向上につながる可能性のある話があった。ひどく抽象的で雲をつかむような不確かな話は、雲一つない青空の下で存分行われた。あまりに話に集中し過ぎていつの間にか腕を蚊に食われていた董は苦々しげな顔をしていたが、そのぶんだけ報われるかは今後の彼女の頑張り次第ということだった。

二学期が始まったところで途端に暑さが和らぐわけもなく、まだまだ続く残暑に学生も教師たちもうんざりしていた。なんでも暦に従えば、八月上旬の暑中を過ぎれば残暑の扱いなのだそうだが、二十四節季など実生活において役に立たないことは百も承知なのだが、あまりにもズレがあり過ぎて董は文句のひとつでも言いたいような気分だった。部室はエアコンがあるからいいが、教室にはそんなものは設置されていない。じわりと滲む汗のせいでべったりと肌にくっつく制服がうっとおしい。どうにも集中力が削がれて仕方がないが、クラスメイトたちもどうやら董と大差ない状態のようだった。

さすがの照も生物としての機能は失っていないようで、滲む汗を止めることはできないようだった。当然のことを改めて確認して董は安心する。普段の董であればそれが礼を失したことだとすぐに気付くのだが、今日は気温のせいで頭が正しく働いていないのかもしれない。

九月も半ばを過ぎたというのに未だに気温三十度を超える日が当たり前にあつて、地球温暖化に対して董が訳のわからない八つ当たりをぶつけていたある夜のことだった。自室のテレビの電源を入れて適当にチャンネルを回していると、ある局でよく見知った顔がテレビに映っていることに気が付いた。しかしそこには強烈な違和感があつて、それは董の認識をひどく遅らせた。さらさらのほとんど黒に見えるくらいに暗くて赤い髪、右側のハネた癖毛、整っていると表現するのに十分な顔かたち。間違いない。宮永照だ。だがどうしたことか画面に映っているのはいつもの能面ではなく、それが違和感の原因だと理解するまでに多少の時間が必要だった。

そこには、やさしい笑みを湛えた宮永照がいた。

友人のまったく知らない顔にどこか薄気味悪さを覚えて、董はぶるりと体を震わせる。テレビに映った彼女は満面の、というわけではなく実に自然な笑顔を浮かべてインタビューに答えている。口角をわずかに上げて、ときおり目を細め、それこそ董がほこ

ろぶような完璧な微笑だ。受け答えに淀みなどなく、声は実に聞き取りやすい。董が知る照とテレビで取材を受けている彼女の共通点といえば、せいぜいが身体的特徴と受け答えの滑らかさくらいだった。

冷蔵庫にあるよく冷えたアップルジュースを飲み下して気持ち落ち着かせる。心臓の音が妙に大きく聞こえるが、今はどうしようもないことだ。少しだけ冷静さを取り戻して考えてみれば、先の出来事はあの振る舞いを見せているのが宮永照だという点を別にすればおかしなところはどこにもないことがよくわかる。単に彼女は注目を集めすぎたのだ。それは董の想定したよりも、そしておそらく前部長や学校が想定していたよりも。厳密に言えば照の振る舞いについて董が尋ねる必要はなく、それを彼女も理解してはいたが、それでも尋ねないという選択肢はないようだった。

翌日、当の本人は休憩中なのか椅子に座ってチョコ菓子を口に放り込んでいた。何の影響を受けたのかは董の知るところではないが、照は夏休みが明けてから部活の合間にお菓子をつまむようになった。頭脳スポーツに分類されるだけあって、麻雀という競技は想像以上に脳を酷使する。それだけにブドウ糖などの頭への栄養補給は重要だとされている。そういった事情もあって、麻雀部員たちは休憩時間に食べたり飲んだりすることにあまり抵抗がない。もちろん女子高生がゆえにカロリーとの兼ね合いも考えて

いろいろと苦勞を重ねていたりするのだがそれはまた別の話である。

董が隣に座ると、照は無言のうちに手に持ったチョコ菓子を勧めてきた。甘くておいしそうだなと思いはしたが、なんとかそれを押しとどめて董は照の善意を手で制する。

「なあ照、昨日テレビでやってたインタビューなんだが」

「見たの？」

いつものように視線を向けることなく淡々と言葉を交わす。照の調子は普段と変わらない。空の様子について話しているかのような調子だ。

「ああ、お前あんなふうに喋れたんだな」

「人前に出るならあっちのほうが自然でしょ？」

「大女優の言い方だな」

「女優なんて興味ないけど、私はそういうのを要求される立場だから」

それを聞いて董は目を丸くする。たしかに照は頭の回転は悪くないし、それなりに氣を利かせて行動を取れることは事実だ。だが周囲、それも白糸台以外の周囲に与える影響を考慮に入れた上で取るべき道を選ぶとなると、それは董の中の宮永照像を越え出たものだった。

「……それを実生活で活かそうとは思わないのか」

「余計に疲れることにあまり意味があるとは思わない」

「全国的にお前に対する勘違いが広まるな」

「別に気にするようなことじゃない。本当のことを知っている人はいつだって少ないもの」

そう言って照はチョコ菓子をひとつ口へと放り込んだ。まるで達観したかのような照の物言いは堂に入ったもので、その場しのぎの発言ではないことがよくわかる。いったい何が彼女をここまで変えたのか董にはわからなかったが、そこに疑いを差し挟む余地はないようだった。

董は照の持っていたお菓子の袋からひとつつまんで取り出し、上品に口へと運んだ。塗りつぶすような甘味が口の中に広がる。一連の流れを照はじつと見ていたが、結局は何も言わずに照自身もお菓子を食べることに集中し始めた。

季節は巡って夏とは違う意味でお風呂が恋しくなる頃、白糸台麻雀部の活動形態はひどく安定していた。言い方を悪くすれば変わり映えしないと断言してもいいくらいである。ときどき照が練習をテレビやら雑誌やらの取材で抜ける以外には大きな問題も発生していない。普段の練習に加えて、日によっては近場の有力校と練習試合などを経験

した部員たちは傍目に見ても順調に成長しているようだった。董も他家のアシストをすることで照の連荘を止めることができるようになりつつあった。まだ彼女に勝つ方法だけは見当もつかないが。

新部長から頼まれていた一年のとりまとめ役も、董は見事にこなしていた。とはいっても意見の吸い上げや部全体の連絡の管理くらいしかやることがないため、それほど大変というわけでもなかった。董はその辺りのことを公表することなく自然にそうなるように仕向けていったから、とくに反対の意見が出るようなこともない。人心掌握という言葉が過ぎるかもしれないが、その種のようなものを持つていることは否定できないだろう。

董は麻雀部専用の資料室の一角に陣取つて様々な牌譜を見比べていた。外には冬の到来を告げる冷たい風が吹いている。窓から見える校門の周辺にはマフラーや手袋、中には軍手などという防寒具を身につけた生徒たちが散見される。部活が休みで、これから帰るのだろう。一方で董は紙媒体であったりパソコンの画面であつたりを睨みながら深く考え込んでいる。

麻雀という競技について思考を巡らせることは極めて難しい。そもそもその基盤として、運が絡むという性質を持つている限り正解などという考え方は持たない方が賢明だ

ろう。自分が何を引いてくるのかもわからない。相手が何を考えてどう動いてくるのかなどもっとわからない。だから牌譜を使って考えるときはどこかで蓋をしてしまわないと思書の迷宮に陥ってしまう。だがどこで蓋をすればよいのかと問われてもその人の実力次第で線引きは変わってしまうから、*「経験と勘」* という実に不確かなものに頼らなければならぬ。それはバランスボールの上にヤジロベエを乗せるようなもので、どこまでいっても不確かなものであることに違いはない。尤も、上手な人の打ち回しを見るといのは勉強になるため、牌譜が役に立たないというのは誤解であること
を付記しておく。

彼女がじつと眺めているのは自身と似たタイプの雀士の牌譜で、そこから戦略の幅を得られないかと考えてのことである。さすがに強豪と呼ばれる高校だけあって興味深い牌譜には事欠かない。こうした地道な積み重ねはすぐに花開くわけではないが、蓄えた知識はいずれ繋がりが合つて実を結ぶ。弘世董という名前が全国に知れ渡るのはそう遠くない未来の話である。

がちや、と資料室の扉が開いて、そちらに目を向けると入ってきたのは董と同じ一年生の部員であった。眼鏡をかけた、どちらかといえば内気なほうに分類される子だ。少女は軽めの挨拶をしつつ董の近くに座った。ため息でもつきそうな、明るいとは言えない表情をしている。

「どうした、景気の悪そうな顔をして」
即座に董は水を向ける。

「あはは、いや、いつものことだよ。照ちゃんに吹っ飛ばされちゃって」
「……まあ、アイツに関しては何も考えただけ無駄だろう」

別に頭痛の種というわけでもないのだが、董は額に手をやってやれやれと首を振る。あの個人戦決勝以外では一度たりとも一着を譲っていないというのだから恐れ入る。連勝の数など数える気にさえならない。

「頭ではわかっているつもりなんだけど、やっぱり悔しいっていうか、ね」

ぼつりとこぼれた言葉は董にもひどく共感できるものだった。たとえ相手が誰であつても負けるのは悔しい。いや、隠さずに言うならば勝ちたいのだ。

「あれは理不尽だよなあ」

「だよね、だから私もなんでそんなに強いのか、って思わず言っちゃった」
「で、照はなんて？」

「私に妹がないから」 だって」

「……またそれか」

何度聞いたか知れないそのセリフに、董はため息を抑えきれなかった。

年も明けて、高校生の間で行われる二つめの全国規模の大会である春季大会をおよそ二か月後に控えた白糸台高校はひとつの大きな問題を抱えていた。それは照のみならず多くの部員たちに対して行われる数多くの取材である。春季大会はインターハイとは異なり予選が存在しない。実績などにより選抜された、いわゆる招待による大会なのである。となれば団体戦優勝かつ個人戦準優勝の宮永照を擁する白糸台はほぼ出場が確実のようなもので、全国の注目が集まることも仕方ないと言えた。学校側はこれでも抑えているほうだと主張してはいるが、練習時間が明らかに削られている現状を鑑みると素直に頷くことは難しいというものだ。

それがレギュラー候補のチームに名乗りを上げただけの董にさえ飛び火してくるのだから、照の負担など容易には推し量れない。一言でも弱音を吐いてくれれば彼女を守るために全力で動くこともできるのだが、照は弱音を吐くどころかいつもと変わらない表情を維持し続けた。どこか普段と違うところはないかと聞かれても、せいぜいがお菓子の量が増えた気がするといったくらいで目に見える変化はなかった。

春季大会はすべての高校が春休みに入った三月の末に実施され、その立ち位置はイン

ターハイの前哨戦という意味合いが強い。例外的な新入生が入ってこない限り、次の夏を戦うのは春季大会を中心としたメンバーであるのだから当然と言えば当然の話である。もちろん夏の予選を突破するという前提はあるにせよ、全国のチームとの力量差を見極めるためにも重要な舞台だと言える。他の都道府県から見れば白糸台、ひいては宮永照のデータを取る絶好のチャンスというわけだ。

夏の大会で照に魅せられたファンたちも、彼女を見ることを期待していた。天才とさえ謳われた戒能良子とギリギリまで張り合ってみせた宮永照が、いったいどんな進化を遂げたのかを見たいと思うのは無理もないだろう。それは優勝を期待してのものだったし、確信と言い換えても違和感の残らないほどのものだった。あるいは彼女に牙を突き立てられる者がいるのならば、それでもいいという思いも隠れていたのかもしれない。

だが、出場校の算段も、ファンの希望も、どれひとつとして叶うことはなかった。それは春季大会を前に、宮永照が姿を消したからだ。

三年生の卒業式を終えて、協会のほうから招待が届く直前のことであった。ひとつの学年がまるごといなくなつて、なんだか空気が薄くなつたような気がするそんな春の日。いつものように練習を終えて、いつものようにみんなと駅へ向かい、いつものよう

に違うホームから別方向に進む電車に乗って、そうして、宮永照は姿を消した。

二年生編

九

メランコリー、という言葉のニュアンスの正確なところなど董は知らない。しかし日本語で言うところの憂鬱とはまた違うのだろう、と思っている。そして今の自身の気持ちを表すならどちらの言葉を選ぶかと聞かれれば、董は間違いなく前者を選ぶだろう。この感情は憂鬱に似てはいるが、どこかが決定的な部分で違っていた。

問題が山積しているというわけではない。常に問題はあるひとりの少女を中心に見展開されており、その規模がただ大きいというだけの話だ。それは大きな荷物を一度に運ぶか、それともその荷物を小分けにして複数回に分けて運ぶかの選択に似ている。董が荷物運びそのものをしたくないと思つたところでそれは叶わない。そして董が荷物を運びきれるかということもまるで考慮されていない。ため息くらいは許されて然るべきだろう。

宮永照に対する一般的な評価について触れておくことは無駄ではないだろう。そもそも中学時代に部活にすら入っていないなかつた選手に対してたった一年で一般的な評価がついてまわるといふ点でその異常性の一端が見て取れる。また二年前には戒能良子も同じような注目を浴びたが、続けてこういった選手が出てきている現状そのものも異常と言えよう。

春季大会で姿を見られなかつたことは残念だったが、チームのことをきちんと考えている誠実な選手というのが一般的な麻雀ファンから見た宮永照の像である。それほどまでに彼女の取材対応は完成されており、そのイメージは彼女がメディアに姿を見せるたびに強固なものになっていった。嫌味なほどに完全無欠なその態度に、多くのファンが次のインターハイを期待した。宮永照は二度目の夏にさらなる進化を遂げるのだ、と。

現役の高校生雀士、つまりは照と卓を囲む可能性のある選手からの評価はまた異なる。全国制覇を達成するうえでこの圧倒的な壁としての認識がそれにあたる。照と同卓したくないと考えることも自然なことと言えし、逆に打つてみたいと考えることも自然であった。中間は存在しない。奇妙なことにも思えるが、彼女を知つてなお意識しないというのは不可能な話だった。彼女に向けられた評価はその根源が称賛であれ疎ましさであれ、最高のものであることに違いはなかつた。

“宮永照は本当はシャイなのにあれだけの取材対応ができてすごい”。いつからかそんな声が部内から上がるようになって、董はひどく驚いた。たしかに彼女の口数だけを見ればシャイに見えないこともないだろう。だがあの対局中の、能面もかくやの無表情を見て誰がそんな評価を与えられるというのか。彼女と卓を挟んで向かい合ったときのことを思い出して董は身震いする。シャイなどという概念とあれほどかけ離れた存在など他にいないとさえ思える。董は人の本質という短絡的な考え方など好きではないし見抜くつもりも毛頭なかったが、それでも照の本質が世間あるいは部内で言われているものとはまるで違うと確信していた。彼女にはこの一年間もつとも近くで照を見てきたという自負がある。

こと宮永照に関する評価については圧倒的に董が正しかった。もちろんそれは競う類のものではないし、正しいからといってどうなるものでもない。どちらかといえばその正しい認識は董の身に重くのしかかるだけだった。もし董が迎合さえしてしまえば、彼女はどこまでもラクになることができただろう。しかし彼女は決してそれを選ばなかった。彼女にそう決断させた原因は本人以外の知るところではないが、彼女自身知っていたかどうかは定かではない。

未だ鳴き方のおぼつかないウグイスの声が響く。窓の外に目をやれば、二度目の桜がその花卉を散らし始めている。風もないなかでただ地面にやわらかく舞うさまは、董に雪を思わせた。天候としての雪は足元が悪くなるため好きではないが、情景としての雪は好きだった。どこか幻想的ですからある。あまり見慣れていないからかもしれない、と董は思い直しひとつ息をついた。

学年が変わって驚いたことが董には二つあった。ひとつは春季大会直前で姿を消した照が当然のように登校していたことである。対外的には病欠ということに対応していたものの、連絡さえつかなかった経緯を考えるとそのまま二度と帰ってこない可能性すらあった。董にそう思わせるだけの突拍子のなさが照にはある。常識がないという意味ではなく、宮永照を全うする義務が発生したときには何を措いてもそれを実行するだろうという意味だ。麻雀において一切手を抜かないということと、何も告げずに姿を消すことは董の中では共通する部分のある事柄に感じられた。

もうひとつは二年生に上がっても照とクラスが同じだったことである。白糸台は一学年に十ものクラスがあるために二年連続となると確率はそれほど高くない。仲の良い友達と離れ離れになってしまうというのはよく聞く話だ。それでも照とまた同じクラスになったという事実には、董は驚くと同時にどこかで納得もしていた。どのみちこう

なるような気さえしていた。

「甘いものでも食べる？」

「なんだ、いきなり」

帰りのホームルームが始まるまでのわずかな空き時間に、机を指で叩きながら考え事をしていて最中のことだった。持ち帰るノートも教科書もすでに鞆にしまつてあつたが、どうしてか筆箱だけは机の上に置いてあつた。

「このところ董が難しい顔をしてる時間が増えたから」

なんだそれは、とまるで妹のヘンテコな発言を姉が受け流すように董はちいさく笑つた。

「ある意味で言えばお前が原因だよ」

「どういふこと？」

「私が感覚打ちに偏りすぎてるって話だ」

もちろん董の言う原因に嘘はないが、それがすべてというわけでもない。いま董が触れていないほうの原因は、あらゆる意味で繊細で複雑である可能性が高い。何かを間違えれば、まるでドミノのように止められない事態が発生するように感じられた。だからこの場で準備もなく踏み込むわけにはいかなかった。

董の言葉を聞いて、ああそのこと、と照はそつけないように返す。しかし彼女は常に表情も声色も変えないのだから本当に興味がないのかどうかを確かめることはできなかった。

「でもそれは董にとって必要になることだと思う」

「わかつてるさ、だから今こうして必死に考えているんだ」

董はおおげさにかぶりを振つてみせる。その様子を見るにどうやら成果は順調とは言い難いようだ。それなりに長い時間をかけて形成されてきたプレイスタイルはそう簡単には変えられない。

それは去年の秋のことだった。インターハイが終わつて董が照に麻雀についての相談をするようになって何度めかのある日、いつものように視線を董に向けることなく照は言った。彼女にしてはめずらしくはつきりとした口調だったことを董はよく憶えている。

「董はもつと論理を大事にしなきゃいけないと思う」

「きちんと牌効率などは意識しているつもりだが？」

「そうじゃなくて、莖は感性と論理のどちらにも自信が持てないときに必ず感性を選ばから」

莖はどうか反論を試みたが、まるで言葉が出てこなかった。今この場に至るまで一度たりとも意識していなかったことが、照の一言で鮮やかに脳裏に浮かんだからである。論理を理解していることと使いこなすことの間には深く大きな溝がある。それは言葉の捉え方によって多少の振れ幅を持ちはするものの、その二つが決定的に違うという意味においては変わりない。莖の感性が他のプレイヤーに比べて鋭いことは事実だが、逆にそのせいで詰めが甘い部分があるというのも否定しきれない事実であった。

聡いがゆえに感情に身を任せるといふことができないう莖が感性に頼った麻雀を得意としている、というのも妙な話に思われるかもしれないが事情はそう簡単ではない。むしろ性格と資質が完全に合致していることのほうが稀であるくらいなのだ。そういった意味では彼女は自らの資質を把握しているだけ恵まれているときさえ言えた。

「知性や理性をヒトの象徴とすれば、野性や本能は獣の象徴」

「照？ 何を……」

「わかる？ 莖。これは論理と感性の関係」

詩を紡ぐように照の口から流れる言葉は、まるで。

「ヒトと獣のどちらが優れているっていうことじゃない。それはただの戦い方の違

い」

次の時代の様子を言葉で表現しているかのようで。

「でもヒトももとは獣で、そこにはたしかな違いがある。いい?」

董の理解を遥かに。

「だから董、獣でありながらヒトの知性を手に入れるの」

超えていた。

「野性と知性の同居。考え得る最高のかたちを董は手にできると思う」

これだけ照が一度にしゃべったことも驚きではあったが、董にとって衝撃的なのは何よりもその内容であった。いくぶん比喩に過ぎる表現ではあるが、筋そのものは通っているような気がする。いま照の連続和了を止めるために磨いている、あの他家の牌をピンポイントで見抜く力とその知性が組み合わされば、別の使い道が見つかる可能性は十分にある。それは単純にもっと考えて打てと言われるよりも、実感をもって董に迫ってくる言葉だった。

その日から董の猛勉強が始まった。徹底的に、それこそ初歩の教本から見直して打牌の意図を考えるようなことまでやった。もちろんそれはどこまでいっても確実にはならないものではあるが、ある程度のパターン化という意味では非常に役立つものであった。一方で獣の部分も完成とは程遠いものであったため、そちらも実戦で磨きつつの

日々が続いた。

いつの間にか始まっていたホームルームへと意識を戻す。およそ半年も前の出来事だというのにこれだけ鮮明に思い出せるということは、それだけ衝撃が大きかったのだろう。董はやつと筆箱を鞆にしまつて教室を出る準備を整えた。

白糸台の新生生のうち、例年より多い数が麻雀部に集まったのは当然のことと言えし、仕方のないことも言えた。もちろん彼女たちの目当ては宮永照であつて、例外は一人としてなかつた。それがただの憧れであるならばよかつたが、照と卓を囲み、あるいは勝つことさえ考えている者がいることが問題であつた。新部長も董もその気概は買っていたが、不用意に同卓させることだけはどんなことがあつても避けようと話し合っていた。新入部員を歓迎する対局でさえ照を打たせるわけにはいかないという結論が出ていた。

それは照が新生生を壊してしまいかねないからだつた。手を抜くことは対局相手に失礼である。去年の予選のときに董が聞いた照の言葉だ。たとえ相手がどんな状況に

陥っていたとしても、その考え方を貫くことを照は自身の行動で証明してみせた。間違
いなく彼女は新入部員であることなど考慮に入れず、一年生を対局相手として認識する
だろう。それはある意味においては高潔な振舞いと言うこともできよう。だが彼女は
その振舞いの与える影響を考慮しないのだ。照自身にそれらのことを考える能力が備
わっていることは周知の事実だが、その優先順位のなかで対局の位置が高いこともまた
同様である。照の闘牌は去年の夏に比べて技術的な意味合いではなく、明らかに凄みを
増している。異常とさえ呼べるほどの精神力がなければ心が折れてしまうだろうこと
は疑いようがなかった。

最終的に新部長が下した結論は、照に初心者向けのルール解説を任せることだった。
これならば間違っても彼女が卓につくことはない。加えて言えばあれだけ見事に取材
対応をこなせるのだから人前に立つての解説もお手のものだろうとの読みもあった。
これの評判は上々で、照も期待通りの働きをみせた。一方で念願の照との対局が叶わ
ず、へそを曲げてしまった一部の跳ね返りの鼻っ柱を折るのは照を除いた部員たちの仕
事となった。多くのスポーツにおいてそうであるように、中学と高校では競技のレベル
がまるで変わってしまう。麻雀もその例にもれず、中学において全国で鳴らしたところ
で高校では歯が立たないことなどざらにある。たとえば董がそうであったように。今
は宮永照という名前が圧倒的に先行してこそいるものの、白糸台という名前は十分に強

豪として通用するものである。そんな部の部員が圧倒的な実力を目の前にしてただ指をくわえて見ているだけのはずもなく、その名に恥じないための研鑽を積んだ彼女たちに新入生が敵う道理などなかった。

少なくともレギュラー候補のチームに名乗りを挙げない限りは照と打つことさえままならない。その印象を植え付けることは白糸台麻雀部という部活を守るうえで何よりも重要なことであつた。照に手加減することの意味を伝えるという手段もあつたのだが、理解はしても実行するかどうかという点において確実ではなかつたため董たちはそちらを軸には置かなかつた。

もちろん実戦も大事にしていたが、ここしばらくは資料室に入り浸ることが増えていた。目的のなかで一番大きなものを挙げるとすれば学習であり、それはやはり董自身の成長へとつながるものであつた。もし最近の董の食欲さについて白糸台の部員たちに尋ねてみればさまざまな反応が得られるだろう。あるいは心配するかもしれないし、あるいは対抗心を燃やすかもしれない。ただひとつだけ言えることは、彼女のその姿勢は白糸台にあつてなお頭ひとつ抜けたものであつたということである。その原因など改めて考える必要もないだろう。

ここがひとつの転換点であつたのかもしれない。白糸台の麻雀部に限らずすべての

物事は複雑に絡み合っており、なにかひとつを解決すればあらゆることがうまくいくなどということはほとんどない。しかし一方で、以後に影響を与える選択を突きつけられる場面も確実に存在する。手段こそ誰にもわからないが、董は、彼女たちは宮永照の成長を止めるべきだった。あるいは彼女から公式非公式を問わずに対局の機会を取り上げるべきだった。

だが、宮永照は確実に成長を遂げようとしていた。同じ部の仲間である董たちでさえ気が付いていなかったことだが、やっと高校二年生になったばかりの彼女が麻雀という競技において完成しているはずもなく、それはまた成長の余地を残しているということであり、手を抜くことを良しとしない彼女がそれを放っておくわけがなかった。現時点で圧倒的な高次元にある照の麻雀が劇的に変化するようなことはなかったが、それは間違いない前進していた。

このことは宮永照ならびに弘世董の未来の大枠を決定した。あるいはその規模は彼女たちだけに留まらないものだったのかもしれない。しかしそんなことは誰も知らないことだった。

「あ、あの、弘世先輩―」

「亦野か、どうした？」

ホームルームを終えて部室へと向かう廊下の途中で、董はある少女に呼び止められた。窓の外は春によく見られるどちらともつかない感じの薄曇りである。地面に落ちた桜の花弁はいつの間にか雨に流されたか掃除されたのだろう、その姿はどこにも見当たらない。

「その、どうして私たちは宮永先輩と打てないのでしょうか」

避けられない質問であると同時に説得するのも難しい質問だった。質問をしてきた彼女の眼差しはまっすぐで、皮肉や嫌味の要素は感じられない。ただの疑問を、あるいは願望も混じっているのかもしれないが、それをぶつけているだけだ。だがそれにどう答えればよいのか董には見当もつかない。照という一種の異常事態を別にして考えれば、新部長の下した決断は、新入生たちの実力を劣るものとみなしているのと同じこと

である。それを正直に伝えるのも躊躇われるし、だからといってこの質問から逃げ続けるわけにもいかない。

「……すまない、もう少しだけ待ってくれないか」

絞り出すように答える。おそらくテレビの向こうのインターハイしか知らないだろう彼女たちは照に幻想を抱いてさえいるだろう。それはどちらかといえば漫画やアニメの登場人物に抱くようなものに近く、現実感を失ったものであった。宮永照はもはやそういった領域に踏み込んでしまったと言っている。インターハイ準優勝の彼女に対して、挑戦して勝とうとする一年生が出てきていることがその証明だ。その幻想を叩き壊すにはひとつしかない。彼女の強さが現実には存在するということを見せつけることだ。ただ、照と一年生たちをぶつけることなくそれを達成するということになると、その機会は限られた。大会しかない。五月の末に行われるインターハイ予選で直に見てもらい、肌で感じてもらうことが最良であった。

「そうすれば、きつとわかってもらえと思うから」

すこしだけ寂しそうに顔を翳らせた少女に、董はこう言うことしかできなかった。

外には薄い雲を通した弱い光が降り注いでいる。眩しいわけでも光量が足りないわけでもない。空の色にさえ文句を言わなければとても過ごしやすそうに見えた。

感情の大部分は申し訳なきに支配されていたが、ごくごく一部の片隅に後ろ暗い快感が芽生えたことを董は自覚した。決して嗜虐的な傾向を持ち合わせているわけではない。それはただ、とある秘密を自分だけが握っているときの、あの感覚であった。感情の内訳を正確に計ることはできないが、しかしそれは両の手のひらの一掬いのうちの砂粒のひとつほどの大きさだった。

対局の見学あるいは牌譜の研究で特定の選手の特徴を見抜くというのは、一般的に考えられているよりもはるかに難しい。それはほとんどヒントのない人探しに似ている。特徴というものは他の選手とは明らかに違う部分のことを指し、そこへたどり着くにはまず違和感を抱かなければならない。そうしてその選手の戦い方の共通点を見出すことが第一歩となり、そこからようやく実際的な研究へと移ることになるのである。要求されるのは麻雀を打つという行為のなかに違和感を持てる勘の良さと、そのあとで膨大な資料と向かい合える根気である。これらの能力を持ち合わせている人物は稀にしかおらず、また高校生という条件を加えればほとんど皆無と言っても差し支えないだろう。

つまり白糸台の新生入生たちに、宮永照を正しく見ることなど不可能であった。

董をはじめ対局者が怯えたのは卓の向こうに存在した能面であり、決して安全圏から

眺める宮永照ではない。外から見た白糸台のエースは、初めの辺りは早いけれど打点の低いプレイヤー程度に見えるのかもしれない。とくについて一ヶ月前までは中学生だった者たちにとつては。すくなくとも決勝戦の解説を務めたプロが興奮気味に語り、またインターハイを振り返る番組で別のプロが手放して称賛したところの宮永照を正確に掴めた者は高校のトップレベルでさえほとんどいなかった。

実は董が先に受けたような質問は初めてではない。彼女は二年生の取りまとめ役を任されているため、立場としては新部長の次くらいに目立つ位置にある。そのこともあつてか、照に関する質問のおよそ三割ほどは董へと投げられた。六割は新部長、残りの一割はその他の先輩である。内訳ができるほどに質問があつたと言えば多少は想像もつきやすくなるだろう。

董のため息が奇妙なほどに濃淡のはつきりした曇り空に消えていく。それは特別な意識のない、その時点で使えるだけの空気を一齐に吐き出すだけのもので、これ見よがしに長いものでも動作のついたものでもなかった。こういったため息をここ最近だけでどれだけついてきただろう。制服の下の体がいったん膨らんで、しぼんでゆくような感覚に襲われた。

自室の椅子の背もたれに背中を預けて輩は目を閉じる。明らかに疲労の色が残っていた。麻雀は個人の資質による部分が大きい競技であるという定説があるが、実はこの言葉は才能だけを指したものではないということを知っている人間は少ない。麻雀を競技として捉えず、ただの娯楽として捉えるならばこれほど気楽なものもなかなかないだろう。勝者と敗者が出ることに違いはないが、四人あるいは三人で遊ぶのが基本であるために勝敗への執着が一对一で行うものよりも薄く、またその気になれば何度だってできるのだからなおさらである。

しかし、競技として捉えた途端に麻雀はその姿を変える。競技としての難易度を比べるわけにはいかないが、囲碁や将棋と同様に「勝つ」ということの意味が圧倒的に重くなるのである。そこには常に良手や悪手が存在し、なにか一つのミスで勝利がその手からこぼれ落ちていくなどということも珍しいものではない。四人の思考が入り乱れることに加えて山から牌を引くという要素を考えれば、囲碁や将棋とは異なる意味での無限の手筋が存在するのだ。そしてその中で勝ち続けることと、そのための努力を続けることの難しさと不毛さを競技者たちは知っている。

誰かは上に行けば行くほど条件の厳しくなる登山だと表現し、誰かは対岸の見えない底なし沼を渡ろうとするようなものだと自嘲した。

そんなことを言うくらいならやめてしまえばいいのに、なんて心にもないことを董は思う。だが競技としての麻雀の魅力に憑かれた彼らは、どれだけ苦しかろうとそう簡単には音を上げることはしないだろう。董にはわかるのだ。それは未だに董が麻雀から離れない理由と同じだから。

そういった意味で、彼女は資質を持っていると言えた。

また、彼女を取り囲んできた環境もその一助となっていた。中学生のときの全国大会で明らかに彼女より上のレベルで戦う少女たちを見たこともそうだし、何より高校で宮永照に出会ってしまったことが大きい。董はそこで恐怖を抱くことを選択せず、憧れを抱いた。それもショーウインドウの向こうにあるような手の届かないものに対しての憧れではなく、いずれ自身も同じ舞台に立って牙を届かせてみせるという種のものであった。

日本で一番だとか世界で一番だとか、董はそういった具体的な目標を持ってはいるわけではなかった。ただ、頑張れば挑める範囲にいる相手に負けたくない、という幼稚と見られることもできる意地が顔を覗かせただけの話である。一も二もなく彼女たちには勝てない、と決め付けられることに、董は我慢がならなかった。決して表面上に出すことはいが、董の負けん気は上を目指す者にとっての必須のレベルをきちんと備えていた。

そんな資質に恵まれた彼女が麻雀に対する研鑽を怠るはずもなく、その実力は本人で

さえ気付けないほどにゆっくりと、だが確実に向上していった。

いよいよ緑が深くなって、春と初夏のあいだの名前のつけられていない短い季節がやってきた。鳥も虫も活気づいて、青空の色味が明らかに変わる。春に特有のどこことなくもったりとした匂いは消えて、木々や葉の匂いが強まってくる。それは比較的自然に囲まれた白糸台高校に限られたものなのかもしれないが、彼女たちはその環境以外に身を置けないのだから比べようもなかった。

ある火曜日の放課後、部室ではなく会議室に集められた部員たちを前に、監督がメンバー選抜にあたっての話をしている。だが董はそれをほとんど聞いていなかった。普段であればそんなことはまず考えられない。そしてこの場は今の董にとって何よりも重要なものと言っている。奇妙なことにも思えるが、だからこそ董は話を聞くことができなかつたのだ。それは単純にひどく緊張しているからだ。まず舞台上がらなければ、積み重ねてきた成果を発表することさえできないのだから。体を内側から圧迫してくるごわごわした感情を押さえつけるために、董はほんの短い間だけ拳をきつく

握った。

拳の握りを緩めると同時に血液が通っていくのがわかる。隣に立っている照の頭がわずかに動いた気がしたが、董はそれを無視した。定まっていなかった視線を、一年生のための説明を終えようとしている監督の方へとやっと固定した。会議室の窓は閉め切られていて、空中に漂う小さな埃が無軌道に動いては董の視界に入り込んだ。部員全員が集まっているせいか、すこし息苦しく、またわずかに暑い。それでも董は高校二年の女子としては相応に高い身長だったから、他の部員よりは楽な状況に違いなかった。咳払いがひとつあつて、監督の口がゆつくりと動き始めた。

「おめでとう、がいい？ それとも応援してる、がいい？」

チームの発表が終わわり、部員たちが会議室から部室へと戻っている最中に、董にしか聞こえない小さな声で照が呟いた。いつものように視線は前に投げられ、話しかけた対象の方へは向いていない。ということは何となくとも冗談で言っているわけではないらしい。もし相手が董でなかったらとんでもない嫌味になりかねない発言だ。事前にレギュラーが確約されている存在からそんな言葉をかけられて、純粹に喜べるような部員はそう多くあるまい。董は照を誰よりも理解していたから、ため息をつけてこう返した。

「おめでとう、でいいよ。自力でお前のところまで行ってやる」
「そう。じゃあ待つててあげる」

今の言葉のやり取りに込めた董の決意を照が読み取ったかどうかは定かではない。いつまで経つても彼女は表情を変えなかつたし、口数が増えることもなかつた。董もそれにについてはどうでもいいと考えているようだった。

それからの三週間余りを、董は自身の鍛錬を継続しながら試合形式の部活を消化していった。

宮永照という名前がはじめて対外的に広がったあの大会から、ぴつたり一年が経過しようとしていた。どこまでも続く比較的明るい色をした雲から、粒の小さな雨が降りてくる。大会に出場する選手やその応援のみならず、多くのメディア関係者が傘を広げてインターハイ西東京地区団体予選が開催されるホールへと集まってきていた。理由に一も二もない。宮永照のいる白糸台が会場するというそのひとつの事実だけでいくらかでも人は動くのだ。あるいは彼女を打ち倒す存在がいるのならそれでも構わないのか

もしれない。どちらにせよ基準点が照に置かれていることは疑いようのないところだった。

傘の水気を払って盗難防止の傘立てに預け、董は適当に観客席の空いているところを探すことにした。後ろには照がついてきている。どうせ席についたところで小説を読み始めるのだろうか、董は照に気を遣わないことに決めていた。最悪、ロビーの背のないソファでもいいかもしれない。当たり前のように二人をセットとして考えている辺り、どれほど普段から一緒に過ごしているかが窺える。すこし探すとちよよく空いた席が見つかって、董と照はそこに座ることに決めた。

前年のインターハイ団体優勝を果たしている白糸台高校がシードを外れるわけもなく、予選が始まってからしばらくはただ座っているだけの時間が続いた。去年もこの予選で似たような状況になったが、董は去年ほど目の前の試合を見るのに集中できていない自分に気が付いていた。緊張があるのかもしれない。焦りがあるのかもしれない。いくつかの対局が終われば、このあと彼女はスクリーンを眺める側の存在ではなく、向こう側の存在になるのだ。董がどんな種類の緊張をしているのかは董自身にしかわからないことだったし、それを正確に言葉で表現できるかもわからないことだった。ごくりと董の喉が鳴った。照の視線は伏せられたままだった。

それからしばらく試合を観戦していると、董の肩を誰かが叩いた。二人で席を探したことを考えれば誰かというのもおかしい話だ。そちらへ顔を向けるとやはり照が董の方を見ながら、親指で観客席の出入り口を指していた。もともと声が大きくはないタイプなのだから小声で話しても良いような気はしたが、とりあえず董は照に従って廊下に出ることにした。

「どうした？ 何かあったのか？」

「そろそろ控室に行ったほうがいいかと思つて」

言われてみればついさつきまで熱心に観ていた試合が大將戦であつたことに董は思ひ当たつた。やれやれと額に手をやつてから照に感謝の意を示す。どうやら本格的にいつもの精神状態とは離れた状態であるらしい。普段なら董はむしろそういう状況で誰かの手を引いてやるタイプの人間だ。照の方が試合という場に慣れているということとを差し引いても、これはちよつとした失敗だつた。珍しく先導する照の後ろをついていく董の姿には、違和感と親和性が同居したような奇妙なものが感じられた。

廊下の窓ガラスの向こうに見える雲はすこし色を濃くして、木々を見れば風が出てきたようだった。それはこの時期にはよく見られる空の様子で、董に何らの感慨も残さなかつた。すれ違う出場選手と思わしき学生たちの表情はたいがい暗く沈んだもので、それらは董の気分をより悪くさせた。単純な話、勝つて次の試合に進む高校よりも負け

る高校の方が多いのだ。試合の進行に合わせて控室の入れ替えを行うこの時間帯にはつきものなのだが、レギュラーとして行動するのが初めての董にとつては多くのことが未体験であった。あるいは董たちが着ている白糸台の制服が八つ当たりのような視線を集めたのかもしれないが、正確なところはわからない。

それはひとつの予定調和に過ぎなかった。どの高校も白糸台を、宮永照を倒すために策を講じ、あらゆる状況を想定して練習を積み、選手を選び抜いてぶつかってきた。そして照はそのすべてを真正面から受け止めて粉々に砕いた。大将に座る彼女に一番が回った時点で勝負は決まったようなものだった。それはまるでベルトコンベアに乗って強靱な機械に破砕されるのを待つクルミのようで、全体の風景としてはどこか物悲しいものだった。一方で観客たちはその圧倒的な力に歓喜した。春に姿を見せなかった新時代の女王の変わることはない、いや、以前より増したであろう力に再び酔いしれていた。

インターハイ団体戦西東京地区予選は、ファンたちの望んだ通りに幕を閉じた。

昼頃に吹き始めた風がやんで、その代わりに雨粒がすこし大きくなった。太陽はきちんと沈み、宮永照は白糸台の勝利を決定づけた。今はその表彰が始まるまでのがらんとした空き時間である。そこにある倦怠感や地区予選を突破した高校にだけ許された、あの種の特別なものだった。帰りは表彰式が終わってからと通達があつたし、その表彰式まではまだまだ時間がある。表彰されるのは部の代表である部長なのだからレギュラー入りした身であつてもそこに輩の出番はない。輩はその空いた時間を観客の帰り始めたスクリーン席で過ごすことに決めた。控室にある無骨な椅子よりはふかふかのシートの方がいいに決まつている。輩はシートに思い切り身を沈めて、映画館のような空気をいっぱい吸い込んだ。

高校生になって初めて選手として出場した二日間を振り返る。一試合だけマイナスだったものの、全体で合計して見ればプラスだったのだから戦績としては上々だろう。少なくとも試合の流れを壊すことなく中堅へと回すことはできた。ほう、と意識するこ

となく漏れた息は、きつと安堵からくるものだったのだろう。とりとめのないことを何も映っていないスクリーンを眺めながら考えていると、誰かが隣の席に座った音がした。照かとも思ったがなんとなく違う感じがして、董はそちらへ顔を向けてみた。空いている席がいくらでもあるなかでわざわざ自分の隣に来るのだから、何がしかの用事があるのだろうとの判断によるものである。

そこに座っていたのは亦野誠子という一年生だった。女子にしては珍しいくらいに髪を短くしており、わずかに幼さこそ残るものの精悍と呼べる顔立ちはどちらかといえば麻雀よりは何かのスポーツのほうが似合うような印象さえ与える。彼女は董と違って特殊な才能を持った打ち手であり、その意味ではあちら側の人種である。董の記憶ではひと月だかふた月だか前に、照に関する質問を投げかけてきた少女だ。

「ああ、亦野か。どうした？」

「あつ、その、お疲れ様ですっ」

本当なら自分から挨拶するべきだったのに失敗してしまい、それを取り繕うように口早に誠子は董に対する労いの言葉をかけた。董は彼女が短いあいだ硬直した理由がよくわかっていなかった。せいぜい先輩という立場の相手に気後れしてしまったのだろう、くらいに考えていた。

「ああ、ありがとう」

実際はそれと比べるともう少し根が深かった。奇しくも董が以前願ったように、新しく白糸台に入った新入部員たちはこの予選で宮永照というプレイヤーを理解したのだ。それも入部から予選が始まるまでの二ヶ月間できちんと高校生のレベルを叩きこまれた上での理解であつたから、その不透明な異常性が彼女たちにもよく見えた。そんな存在とただひとり対等に接することのできる弘世董という存在もまた、一年生たちにとっては畏敬を通り越して恐怖に近い感情を呼び起こす対象となつていたのである。

それを考えれば誠子は実に勇敢だと言ふことができるだろう。この場合においてはむしろ董の方が宮永照という存在の意味を見誤つていたのかもしれない。既に董は照に対する独自の視点を構築してしまつていたから、異なる立場からの見方ができなくなつてしまつていた。

董は言葉を促すために黙つていた。亦野誠子が労いの言葉をかけるためだけに自分の隣に来たと董は考えていなかったし、またそれは正しかった。ただすこしだけ彼女の精神性が同年代のそれに比べて成熟しすぎていたから、その無言の時間が生む気まずさに気付けなかつただけで。

「……………その、宮永先輩は」

意を決してやつと開かれた誠子の口から出た言葉は、董の予想の範囲を出るものではなかつた。

「宮永先輩は、いったい何者なんですか」

「見たままで、としか言いようがないな」

ひどく冷たく聞こえる言葉ではあるが、これ以上の親切な返答を董は思いつけない。言葉という不完全な道具で宮永照を説明するのは不可能である。それはある一個人を言葉で説明するのが不可能であると言うのと同じ意味を持つてもいたし、また別の問題を含んでもいる。そして照に近い人間が求めるのは、その別の問題のほうだった。大雑把な形容ならこれほど簡単なこともない。宮永照は特別だ、異常だ、とでも言うておけばいい。しかしそれらの言葉は確実なものを何一つ蔵していない空っぽな言葉であつてそれ以外ではない。董がそれを考えなかつたわけがないのだ。ずっと彼女がいちばん近くにいたのだから。

「ひよつとしたら怖く見えるかもしれないな、だけど必要以上に怖がらなくていい」

董はそれまでとくに気を回していなかつた表情に、少量の優しさを乗せた。新部長も董も、決して新入生たちを怯えさせたかつたわけではないのだ。ただ宮永照という劇薬に何も知らないままにぶつかつてほしくなかつただけのことなのだ。絵空事ではなくしつかりと現実に彼女が存在していることを理解してさえもらえれば、照は最高の手本になり得る。そしてそのことは麻雀打ちにとつて他にない価値をもつて輝く。

怖がらなくていい、という自分の話を聞いて怪訝な顔をした誠子を見て、懐かしさと

いう感情が心の奥に生まれたことに気付いて董は驚いた。それは原理的におかしいこととて、その感情は過去に似たような体験をしていなければ生まれるはずのないものだ。しかしそのことに気付いたところで伝えるべき相手がいるわけでもなく、また伝えてどうなるものでもない。董はたしかに自分自身に疑問を残しはしたが、それよりは目の前の先輩に声をかけることのほうが重要に思えた。

「別にアイツは嘯みついたりはない」

董の精一杯の冗談に、誠子はわずかに間をあけて小さく笑った。

「その証拠にほら、私は無傷だろう？」

梅雨の季節に白糸台に降る雨は特別に軽くて長い。それなのと言うべきか、だからこそと言うべきか、余計に気分を落ち込ませる何かがある。地形的な要因があるのかもしれないが、それを調べたところでどうにもならない。空気はべつたりと皮膚に張り付いて離れないし、気持ち悪い熱を帯びてじつと留まる。この時期を好きだという人があまりいないのと同様に、董も好きな季節には数えていない。董は個人での全国出場を逃していた。

何のことはない。不運と言えば不運であり、実力不足と言えば実力不足であり、理不尽と言えば理不尽だっただけのことだ。麻雀という競技に身を置いているのだから、それに文句を言うべきではないことを彼女はきちんと理解している。時にはそれが彼女を勝たせてくれることもあるのだから。席替えのおかげで窓際に座っている董は、ふい、と曇っている空に目をやった。特別な感慨は何も湧かない。わりと親しんだ景色で、灰色で、ただそれだけだ。三時間目に見る教室からの景色はいつだって面白くない。自身がレギュラーとして出場した団体で全国出場を決めて董の生活が変わったかと同われれば、それはイエスでありノーだった。表面上は何も変わらない。学校生活も部活も、照に麻雀の質問を飛ばしているときでさえも変化は見られなかった。しかしそれは別に、彼女の心のなかに小さな灯がついたこともまた事実だった。

珍しく青空の面積のほうが多い日の放課後、部室へ向かう途中で董は照に話を振ってみた。

「なあ照、お前でも対局中に不安になったりすることはあるのか？」

「……ときどき董はすごいシツレイ」

相変わらず表情は動かさないので本当のところはわからないが、言葉をそのまま受け取ればどうやら不満であつたらしい。たしかに董の言い方も不躰なものだが、そこは気

の許せる友人同士のやりとりだ。お互いに他意はない。

照はすこし歩く速度を落として董のほうに顔を向けた。こうなると照はもつとも厄介だ、冗談を言うときもあれば言わないときもある。それを彼女が自覚的にやっているかどうかはわからないが、自覚的にやっているのだろうと董は思っている。宮永照が賢く立ち回れる能力を持っていることを忘れてはいけない。

「いつでも必ず勝てるなんて保証はないし、現に去年は負けた」

「言ってることは正論なんだがな、お前が言うとうどうにも」

「信じられない？」

「とまでは言わないが、あの宮永照が不安ねえ、とは思う」

気のない乾いた笑いを飛ばしながら董は軽く請け負った。実際、董にとつては宮永照はスーパーヒーローに近い存在だ。身近な友人であることにも違いはないが、その前の初めて彼女を見つけた衝撃が董の中にかたちづくったものは大きい。だいぶ珍しい関係性だが、成立している以上はそこに不思議はない。

「てつきりお前は、負けるわけがない、くらしいの気持ちで打ってるものだと思ってた」

「ううん、いつだって怖いよ」

「へえ？」

「それにもし絶対に負けない人がいたとしても、そんな人は麻雀なんてやらないと思

う」

その言葉は董のなかに奇妙に響いて残った。天井のとても高い静謐な教会で、パイプオルガンを思い切り鳴らしたような響き方だった。全方位から包み込むように身体に染み入ってくる。そして董がパイプオルガンのことをよく知らないように、どのような経緯で照がそういった考えを身につけるようになったのかが、董にはわからなかった。董は照のいまの言葉のなかに、宮永照そのものを理解する糸口のようなものがあるような気が、漠然としていた。具体的なことは何も言えない。ただそんな気がするだけだ。

「どうしてそう思うんだ？」

「私に妹がないから」

当たり前でしょう、という風に照は断言した。

董はいつの頃からか、この言葉に不快なものを感じるようになっていた。

同い年の他の少女たちに比べて董の成長期の終わりはすこし遅かったらしく、彼女の背は未だにしっかりと伸びていた。高校入学時に比べて4cmも目線の位置が高く

なった。普段はさほど気にしていないが、ふと気づいたときに周囲の友達よりも頭一つぶん近く大きなことを自覚したため息をつくこともあった。高校生というのは、おそらく人生のあいだで最も急激なスピードで大人へと近づく過渡期だ。肉体的な成長が終わりに近づいて、精神的な成長が本格的にやってくる。

灰色に染まった風景に、紫陽花が鮮やかな汚れみたいに浮かび上がる陰鬱な季節のことだった。突然、董は自分の成長を自覚した。あまりに突然過ぎて、董はその事実がうまく呑み込めないほどだった。これまで宮永照の連荘を潰すただけに磨いてきた、他人の鳴きたい牌を読んで鳴かせる力が応用できるものであることに気付き、そして自分がそれを既に行使できるレベルにあることに気付いた。それはほとんど立体的なパズルのようなものだった。あるパーツ同士的位置を組み替えれば形が変わる。それくらいに自然なことだった。そして董は、もとある形からそのパーツを組み替えて、効果的な別の形を生み出した。

「狙撃」という名前がついたのはしばらく後のことで、実際には夏のインターハイが終わってからのことであつた。董が手に入れた新しい形は、董に不思議な自信を与えた。これで強くなった、という正常かつシンプルな自信ではなく、もつと歪で限定的なものだった。そのことに董自身は気付けない。とくに彼女のどこかが壊れていたというわけではなく、それはある意味で避けようのないことだった。

ちようど東の牌を河に捨てたときのことだった。これは他家に鳴かせようという意図のない、ただ単に董の手には必要がないから捨てようという牌だった。同じ卓に照は座っていない。その東から指を離れた瞬間に、例のパズルが頭の中で組み上がった。相手の鳴きたい牌がわかるのなら、ちよつと考え方を変えれば手格好も想像がつく。そこからいつか零れるだろう牌の予想など容易いことに違いないのだから、それを狙つて和了ればよい。こういつた考えが、淀みなく自然と流れていった。

もちろん董はその卓でその考えを実践するようなことはしなかった。それは妄想の類だと誰かに言われれば、きつと董はそれを信じただろう。自分の内側から出てきた考えにしてはあまりにうさんくさかつたし、何よりそういう妄想が出てきてもおかしくないくらいに疲れているという自覚があつたからだ。ちかごろ取り立てて忙しかつたという記憶はないが、梅雨はそれだけでじわじわと疲労を蓄積させるものだ。それに六月には祝日がないという事実がそれに拍車をかけた。いくら大人びていたつて董も人間であり、それらのことをまったく無視するなんてことはできない相談だった。

しかしあまりに頭から離れないその戦法に、いつか違う意味での不審を感じ始めた董は、それを試すことを決意した。身体の内側でなにかが変質していくような、奇妙な感覚があつた。

紫陽花のような董の不幸の明確な出発点は、きつとこの日だったに違いない。

飛び抜けた実力を持つ世代というのはたしかにあつて、その中核を担うのは、常にどうしようもなく隔絶した実力を有した存在だった。 “宮永世代” なんていう言葉が生まれたのも、ある意味で言えば当然のことだったのかもしれない。ただ、その名付けが他のものに比べて特別なのは、彼女たちが二年生の段階ですでにその名がつけられていたことだった。それはつまり前年に一年生にして団体優勝と個人準優勝を達成した彼女を筆頭に、各地で照や董と同一年のプレイヤーが大暴れしたことを意味している。それこそ照の存在が起爆剤になったのかもしれない。もしそうだとすれば、正しく彼女たちは “宮永世代” だろう。

きつとその言葉に何の興味も示さないだろうな、と董は雑誌を放り投げた。雑誌はベッドの上に柔らかい音を立てた。もう荷造りは済んで、明日には荷物を先にホテルに預けることになる。董自身が都心のホテルに身を寄せるのは明後日のことだ。その翌日に開会式と抽選会があつて、そしていよいよ本選が始まる。梅雨は少し前に明けて、これからは夏の要素が一気に強まっていく。気が付けばいつの間にか流れているのが

季節であつて、足を止めなければその微細な変化の端々を意識することは難しい。たま
たま董に足を止める機会が訪れただけのことであつて、特別な事情があつたわけではな
い。遠くの夜空が瞬いた。星の光は、赤かつたような気がした。

亦野誠子による手記

まず初めに、私がこうして慣れもしないペンを握るといふ行為をなぜ行っているのかを説明しておかなければならない気がする。その理由としては、おそらく私自身のためということになるのだと思う。別に飛び抜けて文章に自信を持っているわけでもないからそもそも誰かに見せるつもりはない。だからどこをどう辿っても結局は私のため文章になるはずで、だからこそ自分に嘘なんかつかず、正直でいようと思う。でも私には完璧なんてできないから、いつかこれを読み返したときにいろいろと思い出せればいいと思う。

環境。書き始めるとしたらまずそこなのかな。最寄りの駅を降りて十分も歩かないうちに校舎がゆるい坂の上に見えてくる。その坂の半ばあたりで右に折れて、そこでやっと校門が見えてくる。私は他の高校をたくさん見たわけじゃないから言い切るのには難しいけれど、校門から先はおそらく普通のものだと思う。体育館があつて、校舎が

あつて、グラウンドがあつて。校門の側に桜の木があるのは定番だと思うから、きっと普通なのだ。

校舎の窓から見える外の景色は面白かった。白糸台はちよつとした坂の上にあるから、たとえば家や木なんかが精巧なミニチュアに見える。そういつた人の営みがどこにでも見られることを考えると、緑はそれなりにあるけど風光明媚というのとは違うのだと思う。風光明媚という語の正確な意味はわからないけれど、なんとなくそんな感じがする。まとめてしまえば住宅地のなかにある、普通の高校なのだ。自分の通う高校のことからいもう少し良く書けばいいのと思わないでもないけど、そのための表現力が無いのだから仕方がない。

とにかくそういった環境のなかでのことを書いていこうと思う。

おお、なんだか序文みたいだ。

書き始め、というものにいつも困らされる。夏休みの読書感想文にしろ、学校単位で観に行った舞台の感想にしろ、三日もたずにやめてしまった日記にしろ。どこから書き始めれば私が望んだ終着点にたどりつくのかわからないから、いつも手探りで頑張ら

なければならぬ。たとえ同じことを言ったつもりでもその過程が違ってしまえば受け取られかたも違っていて、私はごまかすように笑うしかなかつたりする。ドラマだったか漫画だったか忘れたけれど、*「言葉は不完全なものだ」* というセリフに、案外世の中そんなものかもしれない、なんて思ったりもする。

物事と言ってしまうと大げさな気もするけれど、それは私が思っている以上に常に巨大で複雑なものだというのがこのところの私の実感だ。うまく説明できる気はしなけれど、ここできちんと私の考えを書いておかないと、いつかの未来でこれを読む私のためにならないと思うから頑張ることにする。

りんごと私がある同じ空間に存在するとする。他にはなにもない。りんごは上から吊るされてるでもいいし、理由もなく宙に浮いているでもいい。私はりんごについて知ろうとして近づく。でも近づきすぎると視界がりんごの皮の赤一色に染まってしまつてそこで完結してしまう。かといって離れすぎてしまうと今度は砂粒ほどにしか見えなくなつてしまつてよくわからない。適切な距離に近づいてもりんごの前半分しか見えていない。味は、香りは、と言われるとどんどん複雑になつていく。結局、私はりんごというものを完全には把握できない。

うまく説明できただろうか。とりあえず私にとつての私と物事の関係はそういうものであつて、ましてやそこに私以外の人という要素が加わると大変なことになつてしま

う。だから私がこれから書くところのものが不正確、あるいは間違っていたとしてもそれはどうしようもないことなのだ。どう読んでも言い訳にしか見えないね、これ。

先のとえ話で挙げた、りんごにあたる人は二人いる。

ひとりは言わずと知れた宮永先輩だ。新入生も含めて高校麻雀に関わる人間で、宮永先輩を気にしない人なんていなかったと思う。もうひとりは弘世先輩。宮永先輩について話をしようと思えば弘世先輩の話をしないことにはどうにもならないし、その逆も成立すると思う。結局のところ二人は不可分なのだ。ただその関係性がひどく複雑で、端的な言葉では足りないから、私の目と言葉を通してなんとかかたちにできればと思う。

出会い、と書くほど劇的なことは何もなかった。私は単に白糸台の麻雀部に入る新入生として、ふたりはそれを迎える立場の先輩として出会った。もちろん私を含めた一年生たちの目は宮永先輩に注がれていた。それは一種の不可抗力なもので、少なくとも高校に入りたてのひよっこに我慢できる類のことではなかったと思う。夏にあれ

だけの活躍を見せて春季大会には姿さえ見せなかったこともそれに拍車をかけていたはずだ。それでも宮永先輩は落ち着き払った態度をとっていた。ああいった無遠慮な視線に慣れていたのでろうか。私より一年早く生まれただけの先輩がそれに動じないということの異常性を理解したのは今になってのことだ。ひよつとしたら本当は今でも理解できていないのかもしれない。

実は私が宮永先輩と個人として話をしたのは入部してからしばらく経ってからのことで、これは同性の人に使う表現ではないとわかつてはいるけれど、先輩はいわゆる高嶺の花だった。部活中に見かけるよりもテレビや雑誌で見る機会のほうが多かったんじゃないかなんて本気で考えてしまうほどに、当時は接触が少なかった。期待していた新入生歓迎対局のときは初心者ルールから教えていたくらいだ。さすがに私も落胆したような記憶が残っている。私以外の麻雀経験のある新入生も同じようなことを思っていたんじゃないかな。

だから順番で言えば、弘世先輩が先で宮永先輩が後。このことは大事なことだったように思う。

「なにか困ったことがあったら私か部長に言ってくれ」

それがさも当然のことであるかのように弘世先輩は言った。文字にしてみると、場合

によつては傲慢と取られかねない発言だ。当時の先輩はまだ二年生だったし。でもそれは実際に本人の口から聞いてみると、自然と受け入れてしまうようななにかがあった。なぜかその言葉がどこにもひっかかることなく心の奥にびたりと嵌まる。そういうことつてあると思う。

これは後になつて気付いたことだけど、そのときの弘世先輩は麻雀部の全学年のパイプ役として動いていた。あらためて思い返してみるとこれはとんでもないことだ。言い方を変えればすべての学年から信頼を得ているということ、それを二年生の身でやっているのだからすごいとしか言いようがない。弘世先輩は私の頭の中にあつた理想の先輩像の二段階くらい上を行つていて、二年生になつたらあんな風になれるかと聞かれたら私は全力で首を横に振るしかないくらいだった。

私が宮永先輩のことについて尋ねるつていう無礼を働いたときも、弘世先輩はできる限り真剣に答えてくれたことが今ならわかる。その時はなんだか要領を得ない答えで濁しちやつて、なんて不満にも思つていたけど、先輩はそれしかないつて答えをくれた。もし私が同じ立場に立つていたらとしてもその言葉さえ出てこなかつただろうと思う。

ひと通り、そう、西東京予選が終わるまでをひと通りとして、それが終わったその時点で私が弘世先輩に対して持つていたのは尊敬だと思う。もつと適切な言葉があるよ

うな気はしているけど、それは私の使える言葉のリストにないのだからどうしようもない。これは直接は先輩たちのことに関係ないけれど、日常的に使っている言葉を厳密な意味で使おうとすると、なかなかピンポイントに当てはまらない。意外な発見だ。

宮永先輩と初めて会話らしい会話をしたのも、たしかその辺りだったような記憶がある。内容も本当になんでもないようなもので、いつも同じ缶ジュースを飲んでいたからそれが好物かどうかを尋ねられただけのことだ。これを読み返している私がこのことを思い出しているかどうかも不安なくらいに些細なこと。今でこそ誠子と呼び捨てにしてもらっているけど、そのときはまだ苗字にさん付けされてて、それでも嬉しかったことだけは覚えてる。それは誇張でなく別世界との邂逅（意味的に合ってるのだろうか）に等しいことだったから。

とても物静かで声も小さくて、見た目以外の文学少女的要素を集めたみたいな人というのが宮永先輩に対して私が抱く印象だ。さすがに見た目は生まれ持った外見と服装の趣味、この場合は装飾品になるのだろうか、による部分が大きいから、絵に描いたような文学少女というわけではない。

思い込みに近いものかもしれないけれど、宮永先輩は弘世先輩と一緒にいるか、そうでなければひとりであるようなイメージがある。部活以外で、たとえば廊下とかで見か

けたときもそんな感じだった。でもいつだったか弘世先輩が、あいつの周りにはなんでもだか知らないんだけど人が集まるんだ、と言っていた。先輩の言葉を疑うわけじゃないけど、いまでもそれは不思議に思っている。たとえば弘世先輩は誰の隣にいても違和感はないし集団の真ん中にいるのだからって見事に様になっていくけど、どうしてか私の中では宮永先輩はそうじゃない。違和感を持つとか似合わないという言葉だと語弊を招くような書き方になるのは理解してはいる。もつと正確に言葉にするなら、宮永先輩の隣に立つことでバランスを取れるのは弘世先輩ただひとりのように思える、だろうか。

そういう思い込みと文学少女っぽいという印象のせいか、いつの間にか私は宮永先輩を見ると離島を連想するようになった。とびつきりに透明度が高くて浅い海で、底は踏みしめただけでちよつと足が埋もれてしまうようなやわらかい白い砂が周囲を取り囲んでいるような島。楽園だとか天国だなんて形容をされそうなの、たったひとつぽっかりと浮かんでいるような。文字にすると文学少女と島なんてまるで関係ないじゃないかと自分でも思いたくなるけど、でもそう繋がってしまったものは仕方がない。正直に書くとしたのは私だ。

弘世先輩と宮永先輩は間違いなく仲が良く、それが表面上のものでないことはふたりのちよつとしたやりとりを見るだけで簡単にわかる。思っていることを伝えるとき

に言葉を使うのは当然で、もちろん先輩たちも例外ではないんだけど、ふたりの場合は言葉の量が少なくて済むのだ。決してそれが優れたコミュニケーションだとは言わないし思わない。それでもそれが特殊な領域に属しているのは間違いないと思う。まあでも大きな問題はそこではなくて。

問題は、それほど仲なのに、私には一線を引いている瞬間が見えた気がしていたことだ。

一線、とは言っても説明が難しい。隔てなくべたべたしていれば仲良しの証かというともた話が違ってくると思うし。それに私から見れば決定的に大人に見える弘世先輩と宮永先輩のふたりがそういうことを意識していないと思えない。つまり、私の見た気がした線とはそういう線ではなくて、もつと歪んだかたちの線だった。ライブルでもなければもちろん敵でもない。繰り返しになるけどふたりは仲間に違いないし、その前に親友だ。だからその線は言葉の端々なんかからは決して読み取れないし、表情に浮かぶことなんかも絶対がない。空気や雰囲気なんて曖昧なもの隙間から、ちらつと見間違ひみたいに場違いななにかが見えることだけがあった。

初めて見た（あるいはそもそも勘違いなのかもしれないけど）のは西東京予選が終わってからわりとすぐの部活のことだった。それでも一回目だったし、それこそ勘違いとか考えすぎだろうと思っただけだった。二度起きることがなければ

そうやって済ますことができるタイプの問題だったから。それよりも予選突破が決まって全国へ向けて部全体が活気づいていたからそんなことを考えている暇なんてなくて、忙しさに殺されるように私はその出来事を忘れていった。歪んだ線のことを決定的に意識させられたのはインターハイだ。なぜと言われれば単純な話で、何度かその場面を目撃したからだ。

ばつちり思い出したのはインターハイ団体戦初日のことだった。いまでもはつきり憶えている。次鋒戦から中堅戦のあいだのわずかな休憩時間。私たち白糸台はシードをもらって二回戦までは出番がなかったから、レギュラー含めて自由行動だと監督から言い渡されていた。とは言っても試合観戦をする以外の選択肢はまずない。私も仲のいい友達とふたりで試合を見て、それで私はその短い休憩時間に友達のぶんも合わせて飲み物を買ってくることにしたんだ。席を取られちゃうから一緒にには行けなくて。そこでロビーに出て行ったら弘世先輩と宮永先輩がふつうに話をして、邪魔をしないようにと思つてちよこつと頭を下げて近くを通り過ぎたときに、まるで土の中の蔓をすすると引き抜くようにあの時の記憶がよみがえってきた。

話している内容は聞き取れなかったけど声を荒げる様子はなかったし、冷たい雰囲気も感じなかった。それどころか弘世先輩はちよつとした笑顔を浮かべていたくらいだ。宮永先輩は背中を向いていたから顔は見られなかったけど、きつといつもの表情をして

いたんだろうと思う。

これは幼稚な推測かもしれないけれど、きつとあのふたりの一線は麻雀が関係しているところに引かれているんだと思う。だってそうでなければ、インハイの会場で私が何度も目撃してしまったことに説明がつかない。当然だけど私が見たのがすべてのはずがないから、もつと何かがあったに違いない。学校での頻度に比べて明らかにおかしかったのは事実だ。

やっぱり言葉が足りなかったとは思うけど、これが私から見たあのふたりの像であり関係性だ。物事は巨大で複雑で、ひよつとしたら解明なんてしないほうがいいのかもしれない。なんてわかったふりをして書いてはみるけど、何を言っているのか自分でもわからなくなった。

私は、それぞれ意味は違っていても弘世先輩と宮永先輩のふたりを尊敬している。決して嫌いななどなるわけがない。白糸台の麻雀部員であの姿に憧れない者などひとりもないはずだし、もちろん私もそうだ。

ただ、どうしようもなく怖くなることがある。

私が何を怖がっているのか、これを言葉にできればいくらか救われるような気もするんだけど。病的、偏執、どちらもかすっているような気もする。でもどちらも外れてい
るような気もする。

できればこれを読む未来の私が、きちんとその辺りのことを言葉にできたり、あるいは
まると笑って飛ばせるような成長をしていればいいと思う。

一年前に訪れたときから、董はインターハイの会場となつてゐる気密性の高いこの建物が好きになれなかつた。とくに建造物に対する造詣やこだわりを持ち合わせてゐるわけではないが、だからといって幾何の持つ美しさをまったく解さないということもない。すくなくとも表面的には彼女が建物に対して一方的に嫌悪を抱く理由はない。多くの女子高生がそうであるように董も建築物に対する立場を決めてはいないし、そもそもそういつたことを考えた経験がない。しかしこの円墳のようなかたちをした建物を見て起る感情は、決まつて前向きなものではなかつた。

とはいへ董はその感情を口にすることはなかつた。いくらでもある話題の中からわざわざ嫌いなもののお話を選ぶ意味などないと考えているからだ。それならば小さな疑問であつたり、あるいは好きなもののお話をしたほうがいくらか建設的だろう。嫌悪にもいくつ種類があるが、この会場に対しての董の持つ嫌悪はそういつたタイプのものだつた。

開会式の前日の自由時間には、選手と応援という立場の違いから感じるところにも違いがでるのだろうかと思ひ、ひとりで一年ぶりのホールの外を一周りし、内部を大雑把に歩き回ったがそれは結局のところ無駄に終わった。仮に心が球のかたちをしているとして、表面から中心へと向かつて三割ほど進んだ点に感じる疼きに変化はなかった。原因はわからない。一年前よりも麻雀の実力も精神性も成長した自負があるが、あるいはそれとはまったく関係がないのかもしれない。そこまで思考を進めて、自分の考え方に明らかな矛盾が生まれていることに気付いて董はため息をついた。周りには誰もいなかった。

白糸台にとって必要のない抽選を昨日に終えて、今日からは一回戦が始まる。また今年も頂点を目指す戦いが、言い方を変えれば白糸台を、宮永照を倒すための戦いが始まる。場内に集まる誰も口にはしないが、認識は共通していた。

シードを与えられている白糸台の面々が大会初日から会場に出向く必要はないが意味はあつて、それは単に偵察であつたり場の雰囲気をつかむことであつたりと決して重要性の低いものではない。そのことは董も十分に理解しており、だからホールに姿を見せはいた。しかしどこか、ひとりで座る彼女が目の前スクリーンの映像に意識を集中しきれていないのは明らかだつた。その様子は地方予選とは明らかに違い、緊張から集

中できないこととは理由を異にしているようだった。

目の前で展開される各県の代表の打ち回しはたしかにレベルが高く、それこそ董が今後の自身の打ち方の参考にしようかと思うようなものも数多く見受けられた。しかしそこまでだった。布地の細やかな肘掛けに片肘をつけてスクリーンを眺める彼女の姿は絵になるほど様になっていたが、逆に言えばそれは身を乗り出すほどの衝撃はなかったということの証明でもある。

(……違う。私が考えているのはそういうことじゃない)

頭の奥がしんと冷えていくのを感じて、董はちいさく頭を振った。

秋田の先鋒が七萬を捨てる。妥当だ。ときおり映される彼女たちの手牌を考えればプレイングの妥当性くらいは判断ができる。それはもちろん判断基準を個々人に委ねるという前提はあるが。しかし自身のなかで先の判断とはまた別の声が上がっていることを董は自覚しなければならなかった。誰か別の、董ではない人間が声に出しているのなら無視すればいいだけの話だが、自分の内側からの声をそう扱うことはできない。それを無視をしようにもそこにあり続けるのだからどうしようもないのだ。抵抗を試みてもどうにもならないだろうことは初めからわかっている。彼女はここ最近で何度もこの感覚を味わってきたのだから。

結局、董は先鋒戦さえ終わらないうちに席を立った。レギュラーであるというのに試

合観戦を放棄することに対する言い訳をいくつか自身の中で用意したが、どれも董には空虚に思えた。

「ちよいとそこ行く美人さん、おねーさんの話相手になつてくんない?」

そんな女性の声が聞こえると同時に夏服の袖口を引かれて董は振り向いた。場所はまだホールの中で、董がスクリーンのある部屋から出てきたばかりのところだ。ナンパの文句にしてももう少しあるだろう、いや同性同士だからそもそも、と見当違いの方向に思考を飛ばし始めた董の目に入ったのは着物姿の背丈の小さな女性だった。

董がその人を即座に少女でなく女性と判断したのは、その立ち姿と董のほうに送られた流し目に妙な色気があったからだ。和装のせいなのかもしれないし違うのかもしれない。一見した印象では対峙する相手を威圧するようなものを感じられないが、向かい合うとどうしても大人というものを意識させられそうな感じがある。袖に隠れた手に握られた巾着も扇子も小さな彼女の着物姿と完全に調和しているのだが、それでも漂うアンバランスさが董の視線をつかんで離さなかった。あるいは彼女が日本を代表する麻雀のトッププレイヤーであることも無関係ではないのかもしれない。

「お、その反応は知ってくれてるってことかねい。ま、知らんけど」

目を細めてころころと笑うと、そのままホールの出入り口へと向かってまっすぐに歩き出した。それは後ろを振り返ることのない、董がついてくることを前提としているような歩き方だった。着物が崩れない範囲での上品な速さではあったが、どうしてか急かしたくなるような気持ちは生まれなかった。しばらく眺めていたいとさえ董には思えた。

もちろん選択肢としては行かないというものもあつた。しかし自然と董の足は彼女のあとを追っていた。出入り口の自動ドアの向こうに見える外の景色は、青と緑と白とで支配されている。外のあらゆるものに反射する光が目突き刺さって、思わず董は右手を顔の前にかざした。董の歩幅の四歩先を行く彼女が自動ドアの前にわずかな時間だけ立ち止まる。彼女の命に従うように強化ガラスが左右に身を引いていった。

ただ彼女の背中だけを見て歩くというだけのことかなぜか董には面白く感じられた。隣に並んで話しかけようという発想自体が生まれてこなかった。いつの間にか近くを歩く人も、過ぎていく景色も、ずっと遠くにあり続ける空も、すべてが霞んで目に映らなくなっていた。あるのは彼女の背中だけだった。そうやってホールを出て十五分ほど董の知らない横道を行つたところで彼女は不意に立ち止まり、振り返って董の姿を確

認するとからかうような笑みを浮かべて前へと向き直った。董には何がなんだかわからなかったが、その混じりつけのない自然な笑顔は奇妙に心に残った。

それからほどなくして董が目にしたのは、高級住宅地にあつてよくよく覗き込まないと看板さえ見つけられないようなカフェだった。はじめは何の気兼ねもなく門を開けて入つていく彼女の姿に驚きさえした。それでも彼女の背中を信じて中へと入ると、外観以上に広く感じる余裕のある空間がそこにはあつた。種類こそわからないが店内は落ち着きのある色調の木材で統一され、ほのかに香る紅茶やコーヒーが董を安心させた。テーブルの数は多くないどころかはつきりと少なく、あるいは趣味に近いレベルで店をやっているのかもしれない。

勝手知つたるといった風に彼女は空いている席に腰を掛け、扇子で向かいの席をびつと指した。ここまで着いて来ている時点で董に否応の選択肢はない。掛かる董の体重にあわせて木の椅子が、ぎ、と音を立てた。

「はっは、ま、いわゆる隠れ家的な店つてやつさ、そんなにキョドんなくていいぜ」
運ばれてきたミルクティーを傾けて、彼女はわずかに満足げな表情を浮かべた。董はとくに何も混ぜないストレートティーを注文している。香りを楽しめるほどの紅茶など茶葉の品質や淹れ方を含めてそうそう出会えるものではなく、董は素直に感動しながらそれを味わっていた。そして董はふと視線を上げて、にやにやと自分を見つめる彼女

に気が付いた。

「……どーにもね、こんなシゴトしてつと勘つつーのが冴えちまうんだよな。知らんけど」

「勘、ですか」

「そ、後ろ姿見ておもしろそーだなんて声かけたら白糸台の二年生レギュラーときたもんだ」

「そこまで言われてやつと董は自分が自己紹介をしていないことを思い出して、謝罪とともに普段とはまるで違う早口で自分の名前を告げた。

「いーっていーって、有無を言わさない感じで引つ張ってきたのはこっちだしね」

陶器同士が触れ合つてかちやりと音を立てる。和装とティーセットの組み合わせだというのに、どこにも古臭さを感じさせるものはなく、いたって現代的な印象を持つてしまうのが董には不思議でならなかった。

時間がゆつくりと流れていく感じがあつて、それが董には心地よかつた。ここには董を追い立てるものは何もない。

「どうだい？ この店は」

「とても不思議な店だと」

「その……ころは？」

「雰囲気もいいですし、紅茶しか頂いていませんがそれでも素晴らしいことはわかります」

「なのになんかにひっそりやっている、ってかい？」

思っていたことをぴたりと当てられたことへの驚きを、できるだけ表情に出さないようにして、董は、ええ、と頷いた。看板すらもあまり目立たないように出されている理由が董にはよくわからなかった。もしももつと目立つように店を構えていけば、きつと連日満員になるまでそれほど時間はかからないだろうとさえ思えた。

「ま、いーんだよ、いいトコってのはほつとしても客が来るって相場が決まってる。それに」

「それに？」

彼女は扇子で顔の中心を指していたずらっぽく笑う。

「いい女つてのは鼻が利くのさ」

話の中心が明らかにずれているのに、董はそこに不快なものを感じなかった。どちらかといえば結論を急ぎたがる傾向のある董にとって、それは珍しいどころか初めてに近い感覚だった。ころころと笑う彼女の飾りつ気のない態度の影響か、あるいは店自体の落ち着いた雰囲気の影響かはわからない。いま董にわかるのは自分のなかにあるものだけだ。

董たちを除いたほかの客は、示し合わせたように一言も発さなかつた。いつもの董ならばきつとこの状況にいたたまれなさを感じていたに違いないが、この場所ではそれが実に自然なことのように思われた。ここは真夏もいいところだというのに季節の音が遠く、時間の停滞をさえ思わせる。実際、この店には時計というものが見当たらなかつた。

「なんか甘いモンでも食べるかい？ 味は保証するし、おねーさんのオゴリだぜ？」

「いえ、さすがにそこまでお世話になるわけには」

さすがに申し訳なさが先に立ったのか、董は焦つたように申し出を断つた。失礼にあたるかとも思ったが、当の彼女はまったく気にしていないという風で、それも董を安心させた。太陽が先ほどよりも高い位置に來たのか、窓の外の景色の色がわずかに明るくなった。

「あの、三尋木プロ、ひとつお聞きしたいのですが」

「んー、固つてーなー、咏ちゃんとかでもいいんだぜい？ で、どしたの？」

「今日はどうしてこちらに？」

「解説の打ち合わせですつげつまんないからさ、ぶつちぎつてきた」

いたずらが成功して面白くてしょうがない、という風に彼女は笑つた。別の種類の二つの驚きを同時に経験するという珍しい体験に、董はある種の感動をすら覚えていた。

ひとつは彼女が話したここにいる理由。もうひとつは笑顔ひとつ取ってもこの短時間でいくつもの表情が見られたことに對してだ。

いまの言葉でいろんな些末なものが吹き飛んでいった気がして、驚きの感情が去ったあとに董も思わず笑みをこぼした。間違ひなく褒められない行動原理だが、彼女にはそれを押し通してしまう不思議な魅力のようなものがあつた。

「いーんだよ、麻雀なんて何が起きるかわかんねーのが売りなんだからさ。知らんけど」

「明日の試合のですか？」

「そ。対局者の情報はアタマに入れてんし十分だつて。……ま、小言はもらうだろうけどねい」

やれやれといった様子でわざとらしくかぶりを振つて、彼女は自身の正当性を主張した。そこにはひとつも彼女をフォローできる要素はなかつたが、状況は決してそんなものを要求してはいなかつた。ふたつ離れたテーブルに新しい紅茶が運ばれてきたようだった。

董の白い肌を削ごうとするかのように日差しは強く降り注いでいた。彼女のあとを追って店へと向かっているときにはまるで気にならなかつた季節の証明が、今ではその存在を激しく主張している。ホールの敷地の証である白張りのタイルに足を乗せたころにはハンドタオルの手触りがしつとりしたもののへと変わっていた。

彼女との話は盛り上がったと説明するにはいささか疑問が残るような内容であったが、それでも会話自体は途切れることなく続いた。そこを見るとふたりの相性は意外とよかつたと言うことができるのかもしれない。ある程度の時間が経ってからは董も相手がプロであることを認識しながらも失礼にはあたらない範囲で自然に接することができるようになっていた。それはこのまま一日まるごと時間を潰したつていいと思えるくらいには董にとって収穫のあるひと時だった。

真つ青な空との対比でいつそう白く映える円墳は、やはり董の気分をより明るくはしなかつた。とはいえ好きか嫌いかで問われて、どちらかといえば嫌い程度の感情なのだから決して董の気分を害するほどのものではない。無視をすることだつてできるくらいのものなのだから大きな影響などないと言いつついい。もしそうでなければ去年の応援でさえまともでできていないはずなのだから。ほとんど無意識にすこしだけ長く息を吐きながら、董は出入り口のほうへと歩いて行つた。

外が極端に明るいせいで、ガラス張りの自動ドアの向こうが暗くて見えなくなっていた。音さえ立っていないように見えるその暗さからは、どこか冷たささえ感じ取れるような気がした。建物内は当然のように空調システムが働いているため過ごしやすい室温になっている。まだ猛暑日と呼ばれる気温の中に身を置いている輩からすると、その暗い空間が魅力的に見えて仕方がなかった。吸い込まれるように輩は自動ドアのセンサーが反応する位置まで近づいて、暗い空間への扉を開いた。

まだ試合中ということもあってあまり人のいないロビーに、ひとり出入り口をまっすぐ見つめる姿があった。光量の違う環境下に入ったせいで輩の目はそれが白糸台の制服を着ていることまでしか認識できず、誰なのかを断定できなかった。やがて目がゆっくりと周囲の環境に慣れて本来の視力を取り戻したとき、輩はそこにひとりの少女の姿を認めた。

宮永照が、立っていた。

「……照か、どうしてまたこんなところに」

「あまり試合を観るつもりはなかったから。それとどうしてここに、はお互いさま」
返ってきた答えは董が考えていた通りのものだった。照はいつも事前研究まではしっかりやるが直前の試合に対してはまるで興味を持たない。試合を見るための場所へ連れて行つたところで、視線は手元に落ちるのがオチだ。ふた月ほど前の西東京予選でも同様だったことは記憶に新しい。

董が照の顔からわずかに視線を逸らすと、彼女の右手にはいつものものように文庫本があった。いつもブックカバーがしてあって読んでいるもののタイトルはわからない。同じものを読んでいるのかカバーを付け替えているのかもわからない。おそらくは愛用しているしおりと同じく使いまわしているのだろうか、確かなことは董には何も言えなかった。手元の文庫本から判断するにおおかたどこかで読書をしていて、気分を変えするために場所を移そうとしていたのだろう。半ば照のクセのようなものだ。董も読書

自体は嗜むが、場所による気分の違いというものを実感したことはない。

「あー、まあ、なんだ、ちようど外から帰ってきたところなんだよ」

若干、よりはもう少し色の濃い気まずさとともに葦は口を開いた。もともと彼女は生真面目で、周囲からもそういう目で見られる立場にあることに自覚的でもある。しかしある意味で言えば周りが勝手に作り上げた像であるとも言えるはずなのに、それと違う行動を取ることは常に裏切るという意識が彼女の中に芽生えるのだった。

初めからそうと決めてかからない限り、葦は嘘をつくのがどこまでも下手で、そういう意味では限りなく不器用だった。

「二回戦で当たるところが試合してる時に葦が外に出てるとは思わなかった」

「……そうだな、こんなことをしたのは中学を合わせても初めてだよ」

照の濃いブラウンの瞳が葦のそれを捉えた。いつものように表情は変わらない。

「あれ、でも朝はスクリーンのほうに入らなかった？」

ほとんど聞き覚えのない照からの疑問形に葦は片眉を上げた。しっかりと目と目を合わせて必要最低限の表情筋以外を動かさないその有様は、葦以外が見れば詰問しているように捉えられたかもしれない。もつとも、照の発言の意図がどのようなものかは本人にはわからないのだが。

「いったんは入ったんだ。ただ、そのあとどうにも集中できなくなってるな」

「董が？」

「ああ、嘘をついても仕方ないだろう」

正直なところを話してしまうとあらためて調整された室内の空気が自覚された。ついさつきまで肌と空気の境目がなくなるほどの熱のなかにいたことが遠い思い出になつてしまったような気さえした。必要なこととはとても思えなかったが、どうしてか董はここと外とがはつきりと違う場所だと意識せざるを得なくなつていた。強化ガラスの自動ドアの向こうとこちらは仕切られた別世界だった。

いつの間にかすっかり汗が引いていたことに気付いて、董はポケットにハンドタオルをたたんで仕舞つた。そしてその動作が終わると、それを待つていたかのように照が口を開いた。

「やっぱり董が抜け出す理由がわからない」

「……説明するのは難しいな、なんとなくあの場から離れたくなつたんだよ」

「観てた試合がつまらなかつた？」

「いや、そういうわけでもない。参考になる打ち回しもあつたしな」

董を見る照の目がほんのわずかに、真正面にいる董でさえ気付けないほどに大きくなつた。照の目の変化はきつと意味を伴つたものだった。ただ何を受け取つたかかはつきりしなただけだった。なんだか居心地の悪さを感じて董が照から視線をそらす

と、人のざわめきが急に聞こえ始めた。そんなにも照との会話に集中していたかと思つたが、そうではなくどうやら単純に次鋒戦が終わつて短い休憩時間のあいだに観客が席を立ちはじめたということらしい。

それにしてもこれだけの観客が一齐にスクリーン会場から出て来るのに、試合中は栓をしたようにぴたりと誰も出て来ないのは董からすると不思議なことに思われた。咏に声をかけられたときも周囲に誰もいなかったことを思い出して、董はなにか薄気味悪いものを感じた。まるでこの現実が精巧に作られた模型なのではないかというような冷たい疑念が湧いた。

あまり明るいとは言えない考えを振り払うために、董は思い出した名前を使ってできるだけ楽しい話をしようと考えた。奇跡的な偶然の重なるの果てにトツプロといったしよに時間を過ごしただなんて、これ以上に他人の興味を引けそうな話題を董は思いつけない。

「……そういえばな、外に出てたときの話なんだが」

「うん」

「たまたまなんだろうがすごい人に声をかけられてな」

いまだに現実感と夢の感覚とが半々に感じられるほど信じがたい体験であつたから、董の表情は自然と笑顔に近づいていった。いくら周囲から大人びて見られていても、ま

だ十七歳の高校生であることに変わりはない。興奮するなというほうが無理な話だ。ちようどこのとき誠子が近くを通りがかつたのだが、董は気が付かなかつた。

「三尋木プロだ、信じられないだろう？ 誘つてもらつていつしよにお茶までしたんだよ」

ある程度の予想は立てていたものの、照の反応は董の口から出たトッププロの名前をおうむ返しするだけで終わってしまった。鉄面皮もここまで来れば称賛してもいいのではないか、とさえ董が思うほどだった。ただ、無表情に名前を口にするだけの照の様子に、どうしてか董は後ずさりそうになるのを堪えなければならなかつた。周囲のざわめきがむしろ自分の心を守るように包んでくれているような錯覚を覚えて、董は出所すらわからないその考えを捨てるように二度三度と頭を振つた。

「楽しかつた？」

「途中までは緊張で何がなんだかわからなかつたけどな」

董の肯定の言葉にも、ふうん、としか照は返さなかつた。興味がないようにも面白くなさそうに受け取つたようにも見える。もつとも常にそんな感じなのだから何に對して前向きな、あるいは後ろ向きな感情を持つのかなどわかつたものではない。もう一年以上の付き合ひになる董でさえも明確にそれがわかつたと確信が持てたのはたつたの一度だけだ。

奇妙なことに周りを歩くほとんどの観客は二人に注意を払っていないようだった。すくなくとも麻雀界限においてここ一年で最も注目を浴びた少女がいるというのに誰も声をかけることすらしなかった。話をしているところを見て気を遣ったのかもしれないが、それにしたってただの一人も、というのはあまりにも状況に即していなかった。「どんな話をしたの」

「……そう言われると困るな、なんでもない話をしてただけなんだよ」

董の言うところに嘘はない。それこそクラスメイトと話すような、お互いの日常で気にかかったことや少し興味を引いた人の話だった。こういう話をした、と取り立てて強調する部分のない雑談らしい雑談だった。たしかに必要性のない、だからこそ気兼ねなく楽しむことのできた価値のある無駄な時間だった。照に話すために思い出すことで、自分にとつてそういう意味合いがあったのだと董は改めて理解した。ロビーの空調が効きすぎているように感じられて、董はそつと右手で左腕をさする。

目の前にある照の立ち姿には一本の筋が通っているように見えた。去年はとくにそういう印象を抱くこともなかったのだが、取材対応などをこなしていくうちに自然と人前に出ておかしくないものを身につけたのかもしれない。飛びぬけて美しい姿勢とまで言うつもりはないものの、だからといって簡単に維持できるものではないことを董は知っている。

「それでなんだか気分が晴れたからこっちに戻ってきたんだ」

「じゃあ次の試合からまた観るの？」

「そのつもりだが」

「ねえ、董は物足りないって思わなかった？ 先鋒戦を観てたときに」

「……バカを言うな、よそのエースを相手にそれはないだろう」

そう、とだけ返して、照は二階への階段へと足を向けた。二階には会場の円周に沿うようにきれいに円を描く廊下と、ところどころに設置されたソファに一階へ降りるための階段、あとは自販機とせいぜい大きなガラス窓があるだけで、要するに規模の大きな休憩所が延々と続いているようなかたちになっている。きつと照はそのどこかで持ってきた本に集中するのだろう。背を向けた照は振り返ることなく階段を一段ずつ上がっていく。会話の終わりがずいぶん味気のないようにも見えるが、董はもうとくに何も思わないようになっていた。

白糸台の部員たちがまるごとお世話になっているホテルの玄関口。制服からは着替えてすっかり身軽な服装で外へと向かう影が二つあった。真夏の太陽が沈み切るには

よほど時間が必要だったらしく、空は暗いのに熱の残滓が空气中に浮かんでいるようだった。

董の隣には照ではなく同じ二年生の眼鏡をかけた同室の少女が立っている。彼女も去年と比べてだいぶ大人っぽくなったが、それでも隣に立っているのが董だとどうしても高校生の感がぬぐえない。二人が同級生だと言うよりも似ていない姉妹だと言ったほうが納得する人が多そうだ。きつとそんなことを言えば董は表面に出ないように機嫌を損ねるだろう。

「うわあ、夜つて言つてもぜんぜん涼しくないね」

「今日も熱帯夜だそうだ。ま、私は蚊がいるほうがイヤだけだな」

「そんなこと言つて董ちゃんめっちゃ肌出してるじゃん、何なのそのすらつとした脚」
「あのな、コンビニに行くのにわざわざ着替えるのも変だろう。部屋着でもないんだし」

呆れた顔をして同級生に目を向けると、彼女はじとつとした目を董の脚に向けていた。いったい何のつもりだと董は小さなため息とともに首を傾げるが、わかつていないのは本人だけだ。一七〇センチ半ばもある身長に、日本人離れた上半身と下半身の比率を見て嫉妬あるいは羨望の感情を持たない女性は少ないだろう。ただ本人は逆に高過ぎる身長にコンプレックスを抱えていたりもするのだが、そのことは誰も知らない。

歩き出さずに脚をじつと見続けていた同級生の頭を軽くはたいて董は歩き出した。どのみちそんなに大げさな買い物などする予定もないのだから、董はさつさと用事を済ませてしまいたかった。

さすがにこまごまとした買い物にそれほど時間がかかるわけもなく、董と同級生は再びコンビニから夜の下に出る。店内の空気はなるほどレジの店員が長袖の制服を着ているわけだと納得するほどに冷やされており、そうなると思しろ熱帯夜の空気のほうに居心地のよさを覚えるのだから不思議なものである。董もなんと気が楽になったような気がしていた。

その気温の安心感と、昼にあったインターハイのデビュー戦で見事というほかない結果を残したことから来る気の緩みからか、珍しく董が頭に浮かんだことをそのまま口に出した。

「なあ、対局中に」
「負ける理由が見当たらない感覚」
「って体験したことあるか？」
「え？ あー、わかるよ。そういうときって何やってもうまくいっちゃう感じあるよね」

「ん、ああ、そんな感じだ」

「それにしても突然どうしたの？ 董ちゃんからそんな話が出るとは思わなかった

よ

弘世董という人物の返事としてはずいぶん歯切れの悪いものだった。そのことに気付いているかどうかはわからないが、相手を務める彼女の眼鏡の奥の瞳はいつものように優しく、返ってきた言葉には真剣な疑問の色彩などちつとも見られなかった。状況に照らして見てみれば、どこで返しに詰まるのかわからないほどごく正当な返答だった。董の耳元をちいさな羽虫が通り抜けた。

「あ、ひよつとして今日調子よかったから？　ロン和了バシバシ決めてたもんね」

「そう言われると私が自慢しているように聞こえるな」

「お、言ったなー！　団体メンバー様の余裕かー!？」

そう言つて二人でにやにやと口の端を上げると、どちらからともなく自室へ向けて歩き出した。がさがさと音を立てるビニール袋がときおりむき出しの脚に触れてくすぐったかったが、董は無視を決め込んだ。

エレベータホールには暖色の明かりが隅々まで行き届いていた。中途半端な時間帯ということもあつてか、玄関口やロビーと違ってホールでエレベータを待つている人はいなかった。現在位置を示すランプが点滅を繰り返して徐々に近づいていることを主張している。一階への到着を知らせる音が鳴って扉が開くと、中には誰も乗っていない。董と眼鏡の彼女が笑いをこらえられなくなったのは、エレベータにそのまま乗

り込んで、下へ降りていく表示を見てやっと地下駐車場へ降りていくのだと理解した途端のことである。地下駐車場の階でいったん降りて、そうしてからもう一度乗りなおそうと二人は頷き合った。エレベーターに乗り間違えるという失敗は、董にとって初めての体験だった。

董は四人部屋の端のベッドに腰かけて、ひとり大会プログラムを開いていた。今日の昼に二回戦を終えて、次の試合は準決勝という位置づけになる。まだ上がってくる学校が出揃ってはいないが、やはり気になってドロウのページを開いているようだった。表面上こそ静かにプログラムに目を落としているように見えるが、その行動そのものが彼女の落ち着かない心情をはつきりと示していた。

同室にはテレビを横目に雑談に興じている二人の部員と、そこからは離れて読書に耽る照の姿があった。照と二人の部員の仲が悪いということはないのだが、今は照のほうに話に加わるつもりがないだけらしい。昨年に比べれば董以外と話をするシーンも増えてはいるのだ。

董が対戦相手になる可能性のある高校の名前を指でなぞって確認していると、テレビのほうからひまわりという言葉だけが不意に耳に入ってきた。ひまわりに対して特別な意識を抱いていない董からすると、どうしてだろうと思わざるを得ないような出来事

だ。小学生の時に学んだ一般的なことぐらいはまだ頭の隅に残っているが、ただそれだけだ。しかし気が付けば董は、そのひまわりに関する知識を思い出そうとしていた。

(……そういえば咲く時期がインハイときれいに重なっているな)

一年草の多くがそうであるように、ひまわりも短いあいだけ花をつけて、そして枯れる。その季節がたまたま夏であるというだけで不思議なことは何も無い。しかし奇妙なことに、ひまわりに対する一方的なシンパシーが董のなかに芽生えていた。そこにあるのは親しみのような明るいものではなく、同情でしかなかった。

董はプログラムをゆっくりと閉じて悩ましげに額に手をやり、そうしてから急にきびきびとした動作で歩き出した。話をしていた二人が何事かと振り向くと、董の足はバスルームに向いているようだった。夕食前に董がシャワーを浴びていたことを二人とも憶えていたが、もう一度バスルームに行くことを取り立てて変なことだとは思っていない。むしろ、あの艶のある長い黒髪を維持するための並々ならぬ努力なのだろう、くらいに考えていた。少しあつて水の音が聞こえてくると、ほらやつぱり、と二人は目だけで分かり合った。結局彼女たちがそのことを特別に気に留めることはなく、それからしばらくは水の音が止むことはなかった。

十四

続く酷暑は戒能良子に一年ぶりの東京をはつきりと思ひ出させた。良子は今年も含めれば四年連続で夏にこの地を訪れていることになるが、事前に覚悟をしても、来るたびに地元のものとは違う暑さにげんなりするのを抑えられなかった。天気は間違はなく良いのに、すつきりと通るものではないことに強烈な違和感を覚える。空気がぎゆうぎゆうに詰り込まれているような感覚があつて、良子はどうにもそれが苦手だった。

コンビニで買った塩飴をひとつ口に放り込んで良子は歩を進める。行き先はインターハイが開催されているホールだが、今年はもちろん選手としてではない。どちらかといえば気分はむしろ観光に近いと言つていいだろう。自身が出場しないというだけで、良子はこれだけ気楽に会場に来ることができるようになるとは露とも考えていなかった。まったく変わっていないはずのホールの眺めがすっかり姿を変えてしまったような気さえした。

良子がホールを訪ねる必要は平たく言えば何も無い。プロ一年目の彼女に解説の仕事が入るわけがないし、ただ試合が観たければ自宅でテレビ中継でも観ていれば大きな問題はないはずだ。それでもここを訪れたのにはプロとしての特権を利用してみたいという子供じみた理由があつた。

関係者以外立ち入り禁止と書かれた扉を開けると、良子の予想に反して先客がひとりだけいた。テレビ真正面の一人用のソファに頬杖をついて、退屈そうに画面を眺めている。気ままという評価がついてまわる彼女が、いくら後半戦とはいえ今日の第一試合の先鋒戦のこの時間にここにいることが良子にとつては意外だった。準決勝とはいっても都合十半荘は行われるために第一試合の朝は早い。扉の音には気付いていたのだろう、彼女はゆつくりと気だるげに視線を良子のほうへ飛ばすと、おや、という表情のあとに小さく笑んで自分のほうへと手招いた。

「やあ戒能ちゃん、でいいかい？　こうやって話するのは初めてだね」

「ええ、はじめまして三尋木プロ。戒能良子と申します」

良子が咏の座るソファにぴたりとくつつけられた隣のソファに座つたことも関係したのか、若干二十三歳にして現トッププロの第一人者たる彼女はきちんと顔を向かい合わせることなく流し目で応対するつもりの方だった。そのまま何かを思い出すよ

うなそぶりを見せたかと思えば急にくつくつと笑い出して、下の世代はずいぶん礼儀正しいんだね、とちいさく呟いた。別個のソファが隣り合っているために肘掛けが二つぶんつながっており、その距離のせいで咏の呟きは良子には届かなかつた。

「で、戒能ちゃん、キミはどうしてこんなところにいるんだい？」

「その、恥ずかしい話ですが、この控室に入ってみただけです」

「ははは！　なんだそりゃ！　面白いコだ、気に入ったぜい」

手にした扇子で膝頭を叩き、頬杖をついていたもう一方の手で口元を隠して心底面白そうに笑う姿はどう見ても冗談には見えなかつた。良子としても変に気を遣われるよりはいつそ笑い飛ばしてもらつたほうがいいとは思つていたものの、実際にそういった反応を見るとなんだか説明のしにくい気分になるのだった。

話を切り出したのは良子で、その内容はどうしてわざわざここで観戦をしているのかということだった。返つてきた言葉は、ちよつと気になることがあつてね、というひどく曖昧なものだった。ソファに深くもたれて頬杖をついたままの返答はその態度だけ見れば投げやりにししか取れないが、実際に話をしている良子はそんなことを思いもしなかつた。それどころかこの返答を、良子は会話のやり取りをしてくれるつもりがあるようだ、と解釈した。質問の回答としては何の意味も成していないが、こちらの疑問点を明確に増やす返答なのだからそう解釈する以外にあるまい。とはいえ初対面の尊敬す

べき先達を相手にしているのに、友人と話すときと同じように曖昧な質問を繋げていくのは褒められたことではないだろう。とりあえずいったんテレビに目を向けてみると、彼女が気になると言ったことの大枠が掴めたような気がした。

「……白糸台ですか」

「はは、なんだ、ノツてくるねい。イコールで宮永照くらいまでは導いたのかい？」

「というより、彼女がいる限りその風評からは逃れられないかと」

「こいつは手厳しい。つっても正論にや違いないんだけどねい。知らんけど」

からからと笑う姿は、良子がプロになる前にテレビで見かけた三尋木咏そのものだった。

「ということとは、その気になることは彼女ではない？」

「完全に個人的な話さ、麻雀にもかすかに関わってるかもしれないけどね」

気が付いてみればテレビ中継の音量はかなり絞ってあるようで、たとえばソファの生地と良子の着ている衣服との衣擦れのような環境音のほうが強いくらいだった。騒がしさのない落ち着いた空間であるのは疑いようがなかったが、良子はその所に自然ではないものを感じずにはいられなかった。あるいはそれは観戦のための控室なのにわざわざ静かな空間が作られているからなのかもしれないし、あるいはまた違った理由があるのかもしれない。ただ、良子はそれを明確な言葉のかたちに行き届くとは思っておらず、

またそのための努力をするつもりもなかった。

テレビ画面上で展開されているのはさすがに準決勝というだけあってレベルの高い試合だった。良子の目から見て、その中でもやはり印象にしる実際の得点にしる頭一つ抜けているのは白糸台であるように思われる。いまはまだ先鋒戦だが、そこでこれだけの差がついていけば後続のレベルの高さも測れようというものだ。それに対して良子はとくに引つかかるところもなく納得していた。白糸台に関して言えばもとの地方の高さもあるのだろうが、ひとりの別格の存在が生む影響を彼女はよく知っている。今年も白糸台の大将に座る彼女のそれは甚大なものだったのだろう。

少しのあいだ試合中継に意識を割いていた良子がそういえば、と違って隣に座る咏へと目をやると、いかにも退屈そうにテレビ画面を見つめている姿があった。思い返してみれば良子がこの控室に入ってきたときにも同じように退屈そうにしていた。そこにあるのはただの純粹な退屈で、決して別の感情につながらないものだった。どちらかといえば諦念に近いとすら言えるかもしれない。良子はこれまでにそんなものを一度も見ることがなかった。そして同時にそうまでしてこの試合を観る理由がどこにあるのだろうかという思いが湧くののを止められなかった。

良子が視線を送ったことに気が付いたのか、やはり顔の向きは変えないまままで咏が問うた。

「なあ戒能ちゃん、こいつは答えても答えなくてもいいんだけどさ」

「ずいぶんとストレンジな入り方ですね」

「まあまあ気にすんなって。でき、キミの目には宮永照ってどう映るんだい？」

唐突と言えば唐突だが、そうでもないと言われれば納得してしまうような質問だった。言い方を変えればそれはほとんどタイミングの問題で、仮に今でなくてもいざれ問われるはずのものだ。なぜなら今の白糸台高校を定義するのは宮永照以外の何者でもないのだから。

わざとすそ野を広げられた問いの形は、それ自体に意味があるように良子には思われた。仮にもつと絞った話がしたいのであればそう口に出せばいいだけの話で、言つてしまえば彼女の打ち筋について聞けばいい。だから詠が聞きたいところはそこではないと良子は判断する。試されているのだろうかという考えも浮かんだが、良子は即座にそれを否定した。自身が彼女に試されるような信頼を得ているとは到底思えないからだ。

「私には彼女がモンスターに見えます。本人の前では口が裂けても言えませんがね」

「周りから見ても大概そーなんじゃねーの。たぶん実際に何人かツブしてんだろ、アレ」

詠から言葉が返ってきて、やっと良子はこの一連のやり取りが歪なかたちをしていることに気が付いた。明言はしていないものの気になる人物は宮永照ではないと判断す

るには十分な返事をしたことを考えれば、たった今の質問は筋が通らない。もし場がこの控室でなく、もし相手が三尋木咏でなければ、ただの雑談と捉えることもできたろう。しかしその「もし」はどちらも成立していない。良子に対してかどうかは別にして、彼女は明らかに何かを求めている。

「去年ぶつかった時も肝を冷やしましたよ。本当にタフな精神性をしています」

「ああ、決勝かなんかで当たったんだっけ？ その辺はまあどうでもいいんだけどさ」
いつの間にか画面からは人の姿がなくなっている。しかし良子はそんなことには気が付けない。彼女の関心はすべて隣に座る咏に、より正確に言えば咏の発言に奪われていた。一方で咏の視線も関心も良子に向けられてはおらず、まだテレビのほうを向いている。ごく自然な振る舞いだった。

良子に導けるのは、彼女の言う気になることに宮永照が抜きがたく関わっているだろうことだけだった。しかし理解が及ぶのは言葉としてだけで、具体的にどのような形態をとればそう表現するしかなくなるのかはまるで見当がつかなかった。そしてそこまで辿り着くと、ついさつきまでしていた会話が急にフラッシュバックした。実際に目に見える光景には何らの変化もなかったが、脳のどこかでちかちかと何かが白く点滅するのがはつきりとわかった。良子の背中に一気に冷たいものが走る。

「……………ん、いや、そっか。なるほどねい、参考になったぜ」

どうでもいい、と切り捨てたすぐ後に咏が画面から視線を外した。その置かれた一拍のあいだに決定的な何かが含まれているとしか良子には思えなかった。ただそれと裏腹に彼女の言葉はそこで完結していて、手の出しようがなかった。どこまで行っても咏の視線の先に良子の姿はなかったし、またそこに姿がないのだからそれ以上の理解が及ばないのも道理だった。二つ並んだ肘掛けにはどちらの腕も置かれてはいない。

音量を絞っているとはいえ余計な音のないように作られた空間でテレビ中継の音声が届かないということもなく、不意に耳に入ったそれが良子の意識を表層へと引き上げた。気が付くついでにそのままテレビに目をやると、先ほどまで映っていたのは違う選手がいつの間にか映っており、そこにひとりだけ妙に目を引く容姿の少女がいた。肩甲骨をすつきり隠すほど長く艶のある黒髪だというのに重苦しい感じはせず、むしろ凛とした印象を残しているようにさえ見える。カメラワークの関係でわかりにくいのが、どうやらその少女の身長は際立って高いようだ。白いワンピースの制服が無骨な対局室に映える。一目でわかる、白糸台の選手だ。

「あつはつは、初々しいねい。ガチガチじゃんか」

けらけらと笑う彼女が楽しそうにこぼすのを聞いて、良子は画面右下のブロックに記載された選手情報の部分にはじめて注目した。そこには通り一遍のデータが四人ぶん記載されているものの、その情報量の少なさでは役に立つとはあまり言えそうになかつ

た。せいぜいが場を繋ぐ話題の提供といったところだろう。もちろん良子の目を引いたのもその程度の情報には違いなかった。

「なるほど、白糸台の次鋒は二年生ですか。なかなか有望のようです」

「ま、大将にすげーのがあるせいでもほとんど注目されてないんだけどねい。知らんけど」

「それは彼女が注目に値すると捉えても？」

「さあね、そこは戒能ちゃんが判断してくれるっしょ」

控えめな温度設定のエアコンが働きリビングで少女がひとり不満そうにテレビ番組をザッピングしている。二人が余裕をもって座れるソファにだらしなく全身を預けて、そのままにしておいたら動くのに不自由しそうな長い金色の髪は適当にシニヨンにしてまとめている。リモコンの握られていない手には、冷凍庫から出されたばかりのアイスがまだ個別包装されたままぶら下がっている。きれいに円を描いているはずのブルーグレーの瞳は本来の姿とはすっかりかたちを変えてしまっていた。

手当たり次第に各局のボタンを押してはみたもののどうやら彼女を満足させる番組

はひとつもなかったようで、少女はつまらなそうにひとつ息をついた。事前に決めていたのか、あるテレビ局のボタンを押すと、少女はリモコンを目の前のテーブルに軽く放った。軽い不吉な音を立てたかと思えばリモコンは裏返しになってテーブルの上に止まっていた。少女はそれに目もくれずにアイスの包装を破く。優先順位で言えばテレビよりも手元のアイスのほうが高いらしい。画面では緑のマットの上を手と雀牌が行き来していた。

ちらと視線を画面のほうに向けると、少女の視線はしばらくそのまま動かなかった。動き続けていたのはアイスを食べるための口だけで、見開かれた目は縫われでもしたかのようにまばたきさえしない。

「んー、学校の連中よりはマシっぽいけど、まだヌルいかなあ」

そう呟くと少女はソファに置いてあったクッションを抱き込んだ。先ほどよりも深く身を沈めている辺り、興味がないわけではないようだ。

庭へも出られる大きな窓の向こうの空はきれいな水縹色をしているが、少女から見える位置に太陽の姿はなく、そのせいで明かりをつけていないリビングはどちらかといえば暗かった。ソファの前に脱ぎ捨てられたスリッパは向きが不揃いのままで、それとテーブルの上に転がるリモコンだけが生活感の汚れのようにリビングの風景と調和していなかった。ただ少女はそんなことにはまるで気を払っていない。ひたすら画面に

だけ集中していた。

「あれ？」

しばらく静かに試合を眺めていた少女が突然に首を傾げた。少女のリビングでの様子を見ている者は初めから誰一人としていないが、控えめに言つてそれは奇妙な光景だった。さんざんバカにしたような態度で中継を見つつ、時には、これじゃあ相手にとつて不足ありじゃん、などと笑いさえしていた彼女がはじめて画面に映るプレイヤーを下に見ることなく思考を始めたのだから。少女が思考の対象に選んだそのプレイヤーはたつたいま三度目のロン和了を決めたところで、そのことに別段おかしいところは見つけられない。少女からしてもそれは同様のようであった。ロン和了など言つてしまえば不運か注意力不足のどちらかで片付けられてしまう程度のものであり、だから三度和了つたプレイヤーに対する称賛ではなく振り込んだ側のプレイヤーに非を認めるのが彼女の通例であるはずで、問題は少女自身がそれを通例どおりには扱えないと判断したところにある。

「おつかしいな、変なニオイがする」

ソファにもたれかかった体を起こして、少女はテレビに対して顔の位置を動かし始める。まるでそこに距離感のせいでピントの合わない何かがあるかのように。いまこ

にあるのは先ほどまでの思いあがった少女の姿ではなく、ぶつぶつと誰にも聞き取れないような小声で何かを呟きながら、いったい何が自身の感覚に訴えてきているのかを真剣に探し求める姿だった。

少女がまばたきをするたびにブルーグレーの瞳が強調されるような感じがあつた。思考の区切りとして目を閉じる癖があるのか、比較的短いあいだに不定期にまばたきは繰り返される。

これまで少女が見ていたぶんの局の展開を思い出しても、特別にここがおかしいというところは見当たらない。当たり前のかたちで牌が配られて、当たり前前の思考判断のもとに牌の取捨選択をして、そうして局が閉じてみればどこかに巧妙に隠された人為の臭いが残つた。もちろん麻雀は人と人とが争うものだから人為が絡まないほうがおかしいのであつて、しかし少女からすればそれはその局のあいだにはつきりと見て取れるものでなければならなかつた。だからこそ少女は今年のインターハイに、はじめてわずかなばかりの能動的な興味を抱いた。思いあがりかどうかは別にして、彼女には自分への絶对的な自信があつたから。

起こした体をもう一度ソファへと投げて、少女は忌々しげにテレビをにらんだ。それはほとんど敵意とさえ言えるような強い視線で、同時に苛立っているのも明白だった。先ほど体を起こした拍子に触れたのか、スリッパが余計に向きを変えている。ここ数十

分のあいだにこのリビングで動きがあったのは少女自身と、スリッパと、あとはアイスだけだった。その他は何も変わっていない。変わらずエアコンは控えめの設定温度のまま働いていたし、明かりが点けられることもなく部屋はすこし暗いままだった。

「白糸台……、なんかどつかで聞いたことあるような気がするけどまあいいや。覚えて」

最終的に少女がソファから離れたのは次鋒戦がすっかり終わって、続く中堅戦も四局を消化したところだった。リビングから出ていくときにはつまらないものを見せられたような表情になっていたが、結局そんなことなど誰も知らないのだからどうでもよいことだったのかもしれない。

十五

「葦、外に出よう」

それは白糸台が一位で準決勝突破を決めたあとのこと、状況としては決勝に上がってくる相手校を研究するべきタイミングでのことで、しかし宮永照にそんなことは関係がなかった。

さて雨が降るような空模様とはどんなものだったかな、と独り言でも呟きたくなるような綺麗な青空の下を白糸台の二年生団体レギュラーふたりが歩く。その肩書だけでなく人を集められそうなものだが、大会中の、それも準決勝が行われているとなればすくなくとも取材をするような人々は現場を離れるわけにはいかないということなのだろう、いつかのようにホールの外に人の姿はほとんど見当たらなかった。

足元の白いタイルは汚れに対して強いのだろうが、それでも重ねた年月には勝てないようで、白には違いないのだがもう真白と呼ぶには難しい色に変わっていた。手をかざして陽光を遮ろうとしても、そのタイルの反射のおかげで日の光が目突き刺さる。さつさと通り抜けてしまったほうが目にも肌にもよさそうだった。

「なあ照、どこに行くつもりなんだ」

「決めてない。あつちに行ってみよう」

「……冗談だろ？」

振り返りもせず歩き出した背中、彼女自身が口を開くよりもよほど雄弁にこれからどうするつもりであるかを語っていた。わざとらしく大げさなため息をついたところで彼女がこちらを向くことはないだろう。それどころか耳に入りさえしない可能性すらある。いちいち無駄なことをするまいと董は照の後ろをついていくことにした。

まるでちいさな子供のよう枝分かれした道にぶつかってはきよろきよろと目を配って、そして決めたあとは迷いなくその道を照は進んでいった。知らない街を適当に歩くことの面白さは董も理解できなくはないが、何も真夏の、それも自身が出場しているインターハイ開催中にやらなくてもいいのでは、というのが正直なところだった。どちらかといえばあまり汗をかかないタイプである董であつてもさすがに限度があるよ

うで、それこそハンドタオルで汗を拭う手が止まらなかつた。

異なる種類のセミの鳴き声が混じりあつて、それだけでどこか自然を感じる事ができた。木に止まつて鳴いていてくれればいい、と董は思う。建物に止まつているのは風情がないという以上にふさわしくないものがある。もつともそんな環境を作り上げたのは人間のくせに何を言つているんだ、と思う董がいなわけでもない。あまりの暑さに董の頭も少し緩んでいるのかもしれない。

視界の隅から照を離さないことだけは徹底した上で歩く街並みは、董が予想していたよりも面白いものだった。疎ましいものであるはずの夏の日差しが、もちろん疎ましいのに変わりはないが、計画的に建てられた洋風の住居を輝かせている。四季それぞれの空にどんな違いがあるかを尋ねたところで董は具体的な違いについて説明をすることはできないが、それでも夏の青空ははつきりと違うものだという思いからは逃れられなかつた。光の強さのせいか空の高さのせいかはわからないが、そこには物を映えさせる何かが確実に存在している。こんなふうにくつくりと街を眺めるのは思い出せないくらいに久しぶりだった。

ふい、と途端に速度を変えて照が歩く向きを変えるのが董の目に留まつた。なにか興味を引くものでもあつたのだろうかと後を追つてみると、そこにはそれなりに大きな規模の公園があつた。子供たちが走り回つて遊ぶというタイプのものではなく、植込みの

きれいに刈り込まれている散歩に適したようなものだった。もともとが小高い丘だったのか、うねるようによくつもの道が緩い坂になって連なっている。頂上への近道のためなのだろう階段もある。きつとその上からはちよつとだけ良い眺めが楽しめるのだろう。入口のあたりで照も公園をゆつくりと眺めていた。

「ここに休んでいこう」

外だというのに照の声はすこしも空気にごそぎ落とされることなく董のもとに届いた。風の音も鳥の声も彼女の言葉を避けたような気さえした。どこまで行くかわからない散歩というのも慣れていなければ想像以上に体力を消費するもので、その照の提案に董は一も二もなく飛びついた。やり取りそのものにはどこにもおかしいところはないのに、目の前の光景に奇妙な違和感が残っていることがわずかに彼女の気分を悪くさせていた。

照は今度は公園の入口に背を向けた。その先に目をやるとそこには自動販売機が置いてあって、季節のことも考えればその目的は聞くまでもないことだった。額の汗をハンドタオルに吸わせてひとつ息をつく。これ以上ないくらいにベストなタイミングだ。

日の光のせいで明滅しているかどうかかわからないボタンを押して飲み物を選ぶ。がこん、と音がして取り出し口からペットボトルを拾うと、照がいつもの無表情で董の手元をじっと見つめていた。

「水？」

「ん？ ああ、今はべたべたしたものを飲む気になれなくてな」

「お茶とかもあるのに」

「そこは好みの問題だ。ほら、さっさと行くぞ」

照の手に握られていたのはペットボトルの紅茶だけだった。

せつかくということを選んで緩やかな坂道は、土と緑と花の匂いの混じった、まるで都心からは隔離されたかのような空間だった。どちらかといえば雰囲気は二十三区というよりも白糸台の街のほうが近いと董は思う。すこし進んだ先には木々の立っているところもあるようで、その一本の木の下に休息のためのベンチがあるだろうことがなげだか目に浮かぶようだった。適当に歩いてこんなところにとどり着くのだから大したものだ、と董は隣を歩く照に目を向けた。彼女はまっすぐ前だけを見て足を進めている。構図は学校の廊下とまるで変わらない。

想定していたより高いところに頂上があったようで、わずかに息を切らせながら見下ろす景色はちよつとした達成感さえ与えてくれた。広がるのは基本的には住宅街だが、向きを変えれば遠くに高いビルも確認することができる。爽快、なんて言葉が自身のうちから自然に湧いてきたのはひよつとしたら初めてかもしれない。遮るものが一本の木しかない場所に吹く風が汗ばんだ肌の熱を奪っていく。暑いのに違いはないが、これ

は悪くない。董は力が抜けて自然と開いてしまった口にしばらく気が付けなかった。

どちらからともなく木陰のベンチに腰を掛ける。この天気の下で不思議とやわらかい黒土の上にびったりの木でできたベンチだった。董の脚が長いせいで収まりがいいわけではないが座り心地は十分だ。ペットボトルの蓋を開けるぱきり、という音でさえも董の気分を上向かせた。すでに細かい水滴がペットボトルの表面にびつしりと張り付いている。

「そういえば照、お前ずいぶん珍しいじゃないか」

「なにが？」

董がそう切り出すと、照はとくに驚きもせずに戻した。

「途中でふたつくらいコンビニを見かけたけど入らなかったらどう？」

「別にふつうだと思うけど」

「てつきりいくらかお菓子を買い込むものだと思ってたんだが」

「今日はそういう日じゃない」

「へえ？」

「董があんまり食べる気なさそうだったから」

「……お前の中で冗談を言うのが流行ってるのか？」

首を振るでも肩を竦めるでもないから冗談なのかあるいはそうではないのか董には

わからない。そもそも冗談とは会話における笑いを主眼に置いたものなのだからそういった意味では冗談になつていけないと言ふべきだが、この少女の場合は冗談の概念を理解しているか疑わしい面がある。まずもつて彼女自身が笑わないどころか顔に変化ひとつ起こさないのだから、そう董が思うのも仕方のないところだろう。おや、と董の頭の中に何かまた引つかかった。

風で葉がさらさらと揺れて、涼しい木陰の下に木漏れ日が雨粒のように不規則に降り注いだ。土の上で踊る光のあととは名前を持つたかたちをしてはいない。董は何を考へるでもなく、それをただぼうつと眺めていた。

か細いのにまつすぐ届く声が董の名前を呼んだ。

「ねえ、満足してる？」

「どうした急に。何を言いたいのかわからないぞ」

「私たちは優勝するけど、それだけでいい？」

明らかに言葉が足りていないはずなのに、どうしてか董には目の前の怪物が何を言いたいのかはつきりとわかった。決して言つてはならない言葉ではない。それでも董の脳髓に痺れるほど血を送り込ませるだけの理由がその一言にはあった。

「……それをお前が言うのか。個人の地方予選で私を潰したお前が」

睨むように視線を向けると、照はベンチの背もたれに思いきり体を預けてまつすぐ前

を向いている。まるでいま話していることに特別なものなど何もなくても言うように。董の目に入ったその横顔は陶器のようにつるりとしている。決定的にこの場にそぐわない陶器が滑らかに動く。

「逆だよ、董。私以外に誰が言えるの？」

手に持っているペットボトルの汗が流れてひとつの水滴になり、土の上の蟻を打った。

言っていることがどこまでも正しいことは董にもわかっていて。仮に宮永照以外の人物に同一のセリフを吐かれたところで董は満足していると答えただろう。そこに嘘はないし、実際に彼女はチームの優勝に向けて尽力している。ただ照が問うことで決り出したのが、それと並立するまったく独立した感情だったというだけの話だ。ひとりの雀士としての、野望と呼ぶのもおこがましい意地とでも呼ぶべきようなもの。

体の内で暴れ回る煮えたぎった感情は意味を成さない。強すぎる感情はきつと決定的なところで足を引つ張るだろうし、何より今はその時ではないからだ。目を伏せた董の言葉は、そう聞こえる要素はないはずなのにほとんど宣言としか取れないような響きを持っていった。

「二年だ。あと一年待っている」

「楽しみにしてる」

円形のホールに沿ったかたちで設置されている二階の廊下には、一定の間隔ごとに革張りの長椅子が置かれている。しかしそもそもこの休憩用スペースを知らない人が多いいせいで、一部の選手が集中力を高めに来るほどに利用率はあまり高くない。差し込む日差しのことを考慮してか長椅子はガラス張りの外周とは反対側の壁に近い辺りに配置されており、よほどひねくれた座り方をしない限りは外の景色が望めるようになってくる。すくなくともインターハイ団体が始まってからは太陽に雲がかかった場面を思い出せないくらいには晴天が続いている。外が明るすぎるせいで逆にホールの中が余計に涼しく感じられるほどだった。

こんな時間に赤野誠子がお気に入りの缶ジュースを片手に腰骨のちよつと上くらいまでしかない背もたれにびったりと身をつけているのにはちよつとした理由がある。しかしそれを素直に言うわけにはいかないから、彼女は体調がすぐれないと嘘をついてここまで逃れてきた。なにせいま行われているのは団体戦の決勝だ。部員としては応援のために席に着いているのが当たり前であって、誠子は自分がいまここにいることにどうしようもない嫌悪感を覚えていた。

可能であれば応援に行きたいのだが、そちらに向かおうとするとどうしても足に力が入らなくなった。切り替えようと頭を振ってアルミ缶を傾ける。なぜか外の景色よりも床を見ているほうが安心できた。

コツコツと響く靴音が妙に誠子の耳に残った。自分が言うのもどうかと思うが、おかしくないかと彼女は思わざるを得なかった。いまは最も注目されている団体決勝が行われているはずだ。この二階の休憩スペースに足を運ぶタイミングとしては適切とは言えそうもない。状況としては疑問の残る場面だが、しかし誠子は顔を上げてその人物の顔を確認する気にはなれなかった。

急ぐ様子のない靴音が次第に近づいてくる。空いている長椅子などそこらじゅうにあるはずなのだが、一向に立ち止まる気配を見せない。なんだか恐怖体験みたいだなあ、なんて的外れなことを考えている自分に気付いて誠子は笑ってしまいそうになる。もしもこのまま近づいてくる人物が自分の隣に座るのだとすれば、それは白糸台の部員かあるいはよほどの物好きくらいしかあり得ない。そしてその可能性はどちらもとびきり低い。おそらくはもつと行つた先に用事があるのだろうと誠子は考えた。しかし誠子の予想はきれいに外れてしまった。

すぐ側でコツコツ立っていた音が止んで、自身が完全に停止しているときにだけわかる、人が動いたときに起きる風圧が感じ取れた。長椅子がわずかに軋んで隣に誰かが

座ったことを教えてくれる。床を眺めていた誠子の視界に入った白いスカートから判断するに、白糸台の人物であることに間違いはなさそうだ。ただ、そうなると腑に落ちない部分が出てくるのも事実である。

隣に座ったのが誰なのかを確かめるためにそちらに顔を向けてみると、そこには今の時間にはまずここにはいないだろうと思われる人物の顔があつた。それを言うなら彼女自身ここにいること自体どうなのだろうと聞かれてもおかしくない立場なのだが、いま誠子はそれどころではなかつた。

「え、先輩……、どうしてこちらに？」

「ここが空いていたからだ……。ああすまない、ひとりがよかつたか？」

「いえそういうわけでは！　じゃなくて、まだ試合中なので……」

思わぬ言葉が飛び出したこともあつてか、誠子の咄嗟の否定は大げさなもののようにも思われた。人によっては言葉の裏を読みたくなるような言動とも取れるが、誠子にとって幸いなことに董はそうしたことに気を留めるタイプではないようだった。それよりは自分に向けられた質問に答えることを優先したらしい。

「大将に回つた。優勝が決まつたんだよ」

温度のない言葉だった。一般的には等号で結ぶことが許されない言葉が、正当な意味を持つた。誠子には董の平坦な表情の奥に単純ではない感情が揺らいでいるのが嗅ぎ

取れたような気がした。

「どうした亦野、もつとうれしそうにしてもいいんじゃないか？」

「いやそのつ、違います、やっぱり宮永先輩つてすごいんだなって」

からかうように軽く投げかけられた言葉は誠子の急所に的確に刺さった。尊敬する先輩はうすく微笑んでいて、目を奪われそうになるその表情からは悪気などかけらも感じられない。反射的に出た言葉は自分でも頭を抱えたくなるようなものだったが、口に出してしまった以上は取り繕いようもない。結局はごまかすような情けない笑いを浮かべながらなんとかその場をしのごうとするしかなくなってしまった。悪い癖だとは思うが、自分で考えているより体に染みついてしまっているらしい。白糸台にとって大将に回することは勝利と同義で、その是非は別にして、その事実に対しては喜ぶべきである。誠子があるべき反応を示せないことは、彼女がここへ逃げ込んできた理由とほとんど意味を同じくしていた。

「……あの、宮永先輩の試合を見には……？」

「後輩の前で格好がつかないから言いたくない、だとさすがに通らないか？」

ずいぶん不思議なことを言う、と誠子は思った。戦力としての弘世董は次鋒の位置に入っており、今大会では活躍と呼ぶにふさわしい成果を残している。実況の目はほとんどが大将に向いていたが、一部の解説を務めるプロは彼女のロン和了になにか見るべ

きものがあるかのような口ぶりを見せていた。つい先ほど出ていた次鋒戦でもしつかりと収支プラスを記録している。誠子の認識からいけば格好がつかないということはある。考えにくく、董の返答は嘯み合ったものではないと言えそうだ。半ば決まった勝負とはいえ大將戦を見ない理由が誠子にはわからない。

ガラスの向こうへ視線をやったちいさく笑う横顔は、作り物のように整っている。聞けるわけがない、と誠子は自分の内側に生まれた疑念を即座に否定した。二年生にして既に白糸台の中心に座しているふたりの仲が良くないのではないか、なんてことはどれだけ礼儀知らずであつたとしても本人に聞くわけにはいかない。

「私はアイツが怖いんだよ、赤野」

誠子が言葉に詰まっていると、彼女の心の内を読んだかのように董が語りかけた。
「えっ」

「まあ、仲は良いし面白いやつだとも思う。でもそれとは別の部分での話なんだ」
まるで世間話でもしているかのように、あるいは本当に世間話と思っているのかもわからない、微笑を浮かべたまままで次期部長就任を確実視されている少女は話を続ける。予想外の事態が連続して起きているこの状況に誠子の頭は混乱していて単純な思考しかできなくなっていたが、その「別の部分」が麻雀であることだけは確信できている。他に選択肢が思いつかないこともそうだし、何よりそれは誠子がここへ逃げてきた

理由と同じだったからだ。

適切な相槌すらもよくわからず、誠子は理解と同意を示すために頷いた。それを見て細められた目に、誠子は言葉が形づくられる前にコミュニケーションが成立したことを悟った。

「ふふ、これはナイショだぞ?」

そう言って人差し指を立てて口の前に持つてくる仕草は実にかわいらしいものだったが、それと同時に真逆の奇妙な色気があった。真逆の要素、と誠子は頭の中で繰り返し返す。一本の線が繋がりそうな気がした。しかし混乱した頭でそれを結びつけるのは難しく、次の瞬間には何にもならないもの、と判断を下していた。

静かな空間だと秒針の音が妙に冴えて、ぼーつとしていた意識が引き戻されることがある。董は自室のベッドに腰かけて、自身が思っていた以上に疲れがたまっていたことに驚いていた。普段ならもう少し続くはずの集中がまるで続かない。休憩を終えて夏季の課題のために再び机に向かおうと思つて、まさか長針が一周する程度しかもたないとは思つてもみなかった。インターハイ前にも並行して課題を進めておいてよかつた、と心から安堵すると同時に情けなくもなる。

窓の外は薄いとはいえ雲がかかっている。ここ最近の空模様を思い出せば久しぶりに珍しいものが見られた、と言いたくなるようなものだ。それでも気温は猛暑日に近くなる予報が出ているようで、この夏はほとんど異常気象なのではないかと董は疑つてい

る。
サイドチェストに眼鏡を避難させて、董は背中からベッドの上に身を投げた。学校ではコンタクトレンズを使うようにしているが、たとえば出かける予定もない休日などは

眼鏡をかけて過ごすことが多い。よく彼女の特徴として挙げられる長い黒髪も後ろでまとめてしまっているために、服装含めて学校とはすっかり姿が変わってしまっている。いくら董といえども常に気を張り続けるといふのは無理な話だった。

もう一段階しつかりした気分転換をしないとダメだと感じた董は、乱雑に頭を掻いてベッドから起き上がり、エアコンによつて過ごしやすく調節された部屋から出ることにした。とはいえ何か特別なことをしようというのではなく、水を飲もうと思っただけのことだ。冷蔵庫に入っている軟水はここしばらく董のお気に入り、一日を通して飲んだものがそれだけなどという日も珍しくないほどである。

階段を下りて冷蔵庫を開け、目的のペットボトルを取り出す。食器棚からコップを取り出して注ぐ。別に何でもない作業と言えはその通りだが、董はそれだけで気持ちの切り替えが半分近くはできているような気がしていた。ダイニングが完全に夏の空気になつているのは減点対象だが、それは自室に戻れば済む話だ。さつさと用事を済ませようとペットボトルを傾けると、これまで董自身あまり記憶にないが、コップから水を零してしまっていた。ほんの短いあいだそれを眺めてちいさくため息をついて、董はさつさと布巾で拭くことにした。

晴れ通しだったインターハイのぶんを取り返すように降り始めた雨は、もう三日も続いている。わずかに勢いは落ち着いてきているが、だからといって気分が上向きになるうはずもない。三日のうち二日は部の休みと重なっていたからまだマシと言えばマシなのだが、そんなところに救いを見出しているくらいなのだからどれだけ気が滅入っているかも推し量れようというものだ。三年生が抜けて新体制が始まる初日だというのに天気と気分ががすぐれないというのもなんだか面白くない。董はときおり側溝に流れる雨水に目をやりながら学校へと続く坂道を登っていく。

水気を払ってボタンを留め、夏休みだけあって普段よりはよほど空きのある傘立てに傘を突っ込んで下駄箱へと向かう。昇降口には董以外の誰も見当たらない。ちようどお盆を過ぎた辺りの上にこの雨だ、ひよっとしたら外の運動部でなくとも今日の活動が中止になっているかもしれない。そんなことを考えてはみるものの聞いてもいないよその部の予定などわかるわけもない。そのことが関係あってもなくても、昇降口に誰もいないのは単純に董が早い時間に登校したというのが大きい。満場一致で新しい部長に推されたこともあって、なんだか気合が入ってしまったのだ。

雨音をBGMにしながら部室の前まで誰もいない廊下を歩く。さすがに用務員の方

か係の教員が来ているのだろう、廊下の明かりは点いている。響くことなく短く切れる足音が単調なリズムを刻む。

どうやっても皮膚にまとわりついて離れない真夏の雨の日に特有のべたつく空気とうんざりしながら、董は部室の戸に手をかけた。とくに何かを意識するでもなく戸を引く動作をしようとした瞬間に、あ、と間抜けな声を上げる。これだけ早くに来たのだから鍵が開いているわけがないじゃないか、と自省するも体はすでに動き始めており、すぐにごくんと引っかかるのを覚悟しなければならぬ状況だった。しかし董の想定した事態は発生しない。引き戸はいつものようにすると滑り、廊下と部室がつながった。

自分より早くに登校した部員がいたのかと目を丸くしながら部室の中を見回すと、窓辺に立って風のない雨の景色を眺める見慣れない姿があった。ふわりとした感じのロングのブロンドは少なくとも白糸台の校内で見たことはない。そもそも制服からして白糸台の生徒ではないことがはつきりとわかる。

董が戸を開ければ外を眺めていた少女がそのことに気付くのは当然の帰結で、彼女は実に自然な動作で振り返った。暗い雲が空を覆っているせいで室内の電灯が人工的な色彩を強くしているように感じられる。目を引くブロンドの下は思わず董が黙り込むほど可愛らしいパーツで構成されている。猫のような瞳はブルーグレー。ちいさな鼻

と口はそれほど特徴があるというわけではないが、血管が透けそうなほど白いのに健康であることを疑わせない肌が間を埋めることで一気に印象を作り変えている。

少女が振り向いてほんの一瞬だけ何も無い時間があつて、そうして少女は相好を崩した。

「あはっ、テレビで見るより美人だ」

「……キミは誰だ」

「あ、そつかそつか、スマレは私のこと知らないんだっけ。わたし大星淡、淡ちゃんではないよ」

人懐っこいだろうことをわざかな言葉のやり取りと表情だけで示して、大星淡と名乗った少女はしっかりと董に向き直った。その佇まいは自然体なんてものを通り越して、むしろ不敵という言葉を董の頭にイメージさせた。

「白糸台の生徒ではないようだが、どうしてここにいるんだ？」

「テルーと呼ばれたから」

端的な回答はそれ以上の追及を拒んでいた。董の、ともすれば普通に行っているだけで威圧していると取られかねない視線を真正面から受けて、それでもなお少女はここにこしている。尋問じみてあまり好みではないのだが、状況が動きそうにないと判断した董は質問を続けることにした。

「アイツに呼ばれたのが本当だとして、それで今日は何をしにきたのかな？」
「来年からここの部員だし、だったら練習に参加してもいいよねって感じで」

返答として間違っていると切り切れはしないものの、董にはピントがずれているように思えた。なんとも不思議な少女だ。この状況における振る舞いからいけばそれは考えにくいことだが、いつの間にか警戒心を解いてしまうような、そんな雰囲気を持っている。現に董は部屋に入った瞬間ほどの緊張感を保ててはいない。まだ落ち着きを持っていないとは言えない、子供らしさが強く残った声がするりと董の耳に入り込んでいく。

窓を閉め切っているせいか、熱がこもっているような感覚がある。目の前にいる少女の金髪も、湿気のせいかな幾筋か束になって額に張り付いている。少女はそれをとくに気にした様子はないが、董は自分の髪もそうになっているのだろうかと思うと多少は気になった。

「来年からここの部員？」

「そ。テルーが話をつけてくれて、カントクと打って話してそれで決まり。あ、昨日ね」

言葉以上の内容がほとんど拾えない淡の返答がわずかに董を苛立たせる。過程はさっぱりわからないし、目的に至ってはあるかどうかさえ判然としない。窓に遮られて

音のない雨が、止む気配もなく降り続けている。

「……部員が揃ったら挨拶をしてもらおう。自己紹介を考えておいてくれ」

「はあ、」

多くの言葉を飲み込んで、董は最低限の指示だけを出した。

まったくの無名の中学生でありながら宮永照に見出され、監督に練習参加を認めさせた異物は、その日のうちにすっかりと部に馴染んでしまった。容姿も相まってか、その人懐っこさは生意気なところのある妹のような立場を瞬く間に築き上げた。それはかんとんなわがままであれば聞いてあげたくなくなるどころか言ってもらいたいと思う者が出てくるほどの、ひとつの魔性だった。

インターハイ明けの部活の初日ということもあって、レギュラー格だと断言できるのは照と董の二人しかない。しかしそれでもレギュラーを争うような立ち位置にいた二年生は数こそ多くはないものの他にもおり、そんな彼女たちを相手にかなりの勝率を残した淡の実力は確かなものだとしか言いようがなかった。董も過去の自分と比べて立派なものだと内心で賛辞を贈ったが、それと同時になにかうすいねずみ色をしたもや

もやが頭の隅に浮かんでいるのが気持ち悪かった。どこにもおかしい部分はないはずなのに。雨粒を垂らしている窓の外の雲がちょうど似たような色をしているな、と董はほんの短いあいだけ視線を外に飛ばした。

数日が経つても淡に対する董の違和感は消えなかった。しかしやはり異常は見当たらない。董自身も彼女と何度か卓を囲んだが、それこそ勝ったり負けたりの当たり前の麻雀であつた。なにかが違つていてその証拠も目に見えているのにそれと認識できていない、という董の感覚はだんだんと願望に近づいていった。勝とうが負けようが結果に関係なく、淡との対局が終わるたびに董は首をかしげた。休みのあいだに軽く毛先を整えてもらった黒髪がさらりと波を打った。

「ねえスマイレ、どうかしたの？」

「ん、ああ、なんでもないよ」

「ウソばかり！ そんなに首かしげてばつかでなんでもないわけじゃないじゃん！」

不意に声をかけられて、普段あまり見せない詰まった調子で返す。自分からぐいぐい突っ込んでいってそれを当たり前のように正当化する淡のコミュニケーションの手法は、董に照を想起させた。似ているという意味ではない。まるで対極にあるという意味でだ。

「大丈夫だよ、それに大星に頼るような事柄でもないしな」

「なにそれ、よそよそしい！ あと淡ちゃんと呼べー！」

ふう、と頬を膨らませる姿はいかにも少女らしくてかわいらしい。なるほど餌付けしたくもなるわけだ、と董は困ったような笑顔で納得する。しかしそれとは別に、現在抱えている違和感をその発生源である彼女にぶつけるわけにもいかなのは自明だった。それはよそよそしいとかさういったことではなく、董が踏み越えてはならないと自分で決めた一本の線の向こう側のことだからだ。

一拍置いて、おっと、と董が思い出したように向き直る。淡は立っている場所も体の向きも変えずに、ただ董が話し出すのを待つていた。くりくりと円いブルーグレーの瞳が印象に残る。

「さうさう、呼び方の話なんだがな」

「呼び方？」

「あだ名で呼んだりするのは一応許可をもらってからにしてくれ。みんな先輩だからな」

「めんどつちいなあそれ。でもま、さう言うならさうするね、けど」

具体的にどれと示すことはできないが、ほんの短い間だけ、ふっと淡から親しみやすい雰囲気のようなものが消滅したような気がした。おや、と董は思う。

「けど？」

「テルーとスマレだけは絶対にやだ」

「どうして？」

「言い方悪いけど他の先輩はなんでもいいの。でもテルーとスマレは別なんだよ」

周囲のざわめきのなかで、まだ幼さの残る声が浮いていた。学校という一種の特異な環境に合わせた、白を基調とする内壁に声が調和した。室内にはエアコンが効いている。董はその冷やややかな空気に言葉を絡めとられたように次の問いを口にできなかった。

「ねえ、テルー」

「なに？」

「どうしてスマレにこだわるの？」

「言っている意味がわからない」

「たしかにスマレは勘も鋭いしきちんと麻雀できるし美人さんだけどさ」

「うん」

「だけどテルーがこだわり続けるかってなると違う気がするんだよね」
「そうかな」

「だからさ、ね、わたしにスマレちよーだい」

「だめ」

「えーっ！　なんで！　いーじゃん！」

「だめなものはだめ」

「ホントどーしてスマレにこだわるのさ？　何かあるの？」

「……董は、きちんと人間というものを知ってる」

「なにそれ。淡ちゃんだって人間くらい知ってるし」

「淡はちよつと意味が違うけど、董以外は誰も知らないよ」

「意味わかんない。ねえテルー、それちゃんとハナシつながってる？」

「きちんと理由の説明をしているつもり」

「会ってからそんなに時間経ってないけどさ、時々不思議な会話の仕方するよね、テルー」

「そう？」

「絶対そうだよ！」

「じゃあ、これから気を付ける」

一步踏み出す前に幾筋も汗が流れるような厳しい日差しの下を歩く。いくら白糸台とはいえ連日朝から晩まで練習するというわけでもなく、多くの場合は午前か午後かのどちらかに練習の予定を入れている。自主練習に取り組むのであればまた予定は変わるが、その日の董はそうではなかった。普通に帰るのにも部長という立場にあるせいで、他の部員より少しだけ遅れて校門を出るのが常となっている。ちいさな桔梗が足元で揺れていた。

ちようど真昼ということもあつてか、作りもののように人のいない下り坂は爽快だった。目線をすこし上げれば入道雲が隆々とそびえている。目に映る風景を四角に切り取ればそのまま絵葉書にできそうなほどだった。いくつもの種類の違うセミが忙しく鳴いて、董の耳を完全に支配した。

影さえ焼きつけるほどの日の光は、彼女の肌にも平等に突き刺さった。まるで切り傷から溢れる血のように流れる汗は拭いても拭いても止まらなかつた。乾いていたハンドタオルが、それほど時間を待たずにしっとりと湿った。白い肌はもう赤くなっている。白い制服のせいでよりくつきりと際立った。はつきりとした強い色を取り囲む中

で、その肌だけが薄い色合いだった。

無風に近い空気の中をトンボが飛んでいく。あらためて見てみると、空中で静止したりまた急に動き出したりとなんとも自由な動きをしている。目で追っていると、なんだか重力を忘れてしまいそうになれた。どこから来たのかはわからないし、どこへ行ってしまふのかもわからない。すぐにどこかに飛んでいなくなってしまうだろうと思っていたが、案外とそのトンボは菫の近くから離れなかった。そんなちいさなことがうれしくて、その姿を見てすこしだけ微笑むと、途端にトンボはどこか遠くへ行ってしまった。いつの間にか足を止めていたことに気が付いて、菫はまたもう一度駅へ向かって歩き出した。

淡の一言が、くるくると体の中で回っていた。

言葉を返せなかったことも含めて不思議でならなかった。下り坂の足取りは普段よりも慎重になる。宮永照という存在が特別なのは納得するところではあったが、自分がそこに並べられることには違和感しか覚えなかった。もちろん意味合いが異なっている可能性は十分にあるし、あるいは照を横に置くことで初めて意味が生まれる類のことなのかもしれない。ただどちらにせよ詳しいところがはつきりしないのは変わりなかった。

汗が頬を伝って顎の先端にたどり着いた。日差しが体中の水分を絞るように全身を焼いていく。家に着くころにはすっかり水分が足りなくなってしまうかもしれない。そんなことを考えて、董はちようど坂の下にある自販機で珍しくジュースに手を伸ばした。あまり味のある飲み物を好まない彼女のことを考えると貴重とさえ言ってもいいかもしれない。麻雀で酷使した脳のために糖分補給を考えていたのかもしれないし、違うのかもしれない。見た目も中身もお嬢様の董には、アルミ缶はひどく不似合いだった。こくりと喉が鳴る。缶を傾け中身を胃の腑に流し込んで、口内に残るべたつく甘さと引き換えに董は喉を潤した。どこかクセになりそうな味だった。

十七

「国文学の決定的な転換点とされる本居宣長が為した——」

董はいま前から二列目の廊下側の席、前と後ろとにある戸のうちの前のものにほど近い席で授業を受けている。この席に利点と呼べるほどの利点はなく、そのくせ時間によつては日光が黒板に反射して板書がひどく見にくくなるのが厄介だった。そもそも建てる際にそういった部分の検討をしなかったのだろうか、とほとんど難癖に近い思いを頭に浮かべるが、結局はどうにもならないことがわかつているから董は誰にも文句を言わなかった。そもそもがくじ引きで決まった席のうえに、自分より一列前に座っている女子はもつと大変な目に遭っているだろうことが簡単に想像がつくのだから余計なことを言うのも無粋だと考えたのである。

国語教師の話を入れつつ董は教科書に目を落とす。著名な人物の短編あるいは抜粋がずらりと並ぶそれは、学校の勉強という意識さえ抜けければ読み物として非常に面白いものだ。董は捉えている。そう考えるようになったのはまだ彼女が中学二年生の

冬の初め、終わった単元を読み返していた時のことだった。どこがテストに出るのか、を考えなくてよい文章は自然と彼女の感受性に働きかけた。対象に触れる際の意識の違いだけでこれほどまでに受け取り方に違いが出るのか、と董はそのとき驚愕した。残念ながら董はずっと昔から今に至るまで、文学作品や論述の著者に対する興味を抱いたことはなく、彼らがどんな人生を送ったかということは彼女にとってはむしろ余計な情報でしかなかった。一方で作品の中に見られる独特な観点や人間そのものに対する鋭い観察眼、またそれらを壊すことなく成立させる手腕には強烈にのめり込んだ。その頃から彼女のお小遣いの使い道の選択肢に本というものが入った。

「宣長はいくつか面白い警句を残していることでも知られて——」

カチカチとシャーペンの背をノックする。短くなっていった先端が後ろから押し出されて伸びていく。その様子をじっと見つめるほど董は退屈していた。人には話を聞かせる能力に長けた人とそうでない人がいる。いま教壇に立っている国語教師は後者ということだ。そういう人が他人の興味を引く話するには例外的に面白い話題を持つてこなければならぬ。残暑の厳しい教室の中で顔を上げて真面目に聞いているクラスメイトが何人いるだろうかと董はちいさく息をついた。

顔こそ上げていないものの話を聞くには聞いていた董は、あるタイミングを境に国語教師の声が入らなくなっていた。気になる話が聞こえたからだ。賢人が物を考え

るときに山深くの静かな場所を好むのは自然なことだと言われているが、彼はむしろ市井の騒がしさの中に身を置いたほうが考えも進む、静かすぎればかえって落ち着かない、という言葉を残したのだという。なるほどと董は思った。自分ならどうだろうとも考えた。まるで人の声のない自然の中を空想さえしてみた。その結論は、わからないの一言に落ち着いた。

授業と授業の合間の時間に、董はふと窓の向こうに目をやった。廊下にほど近い席から眺めると窓そのものがスクリーンのように見えた。もう暦の上でも意識の上でも夏は終わっているのに、まるで夏の忘れ物のように大きな雲がどっしりと構えていた。どんなかたちをしているのか掴めないほど白と灰の配置が乱雑だった。ひよつとしたらひとかたまりの雲ではないのかもしれない、と董に思わせるほどの陰影の付き方だった。秋がもうすぐ来るのに、あるいはもう来ているのに、その立体感はぴたりと季節を押し留めていた。

クラスメイトがたまたま董のほうを向いて、楽しそうに表情を綻ばせてひらひらとちいさく手を振った。その行動自体に意味がないのは知っているが、コミュニケーションを取ることは意味がある。董もそれに合わせて手を振り返した。

外は絵の具で塗り潰したように均一にねずみ色で、そして夜のように静かだった。屋根も地面もどこも濡れていないのが不思議なくらいの空模様だ。秋雨前線なんていう言葉もあるにはあるが、それにしたって重すぎる。卓上競技である麻雀に直接的な影響はないにしても精神的な影響が出るのは無視できないだろう。ラシヤの上を踊る牌の音のあいだを蛍光灯のノイズが埋めていく。

誠子は半荘の練習対局を終えて中央階段のほうへと歩いていった。休憩のためにいつもの缶ジュースを買おうと思ったのだが、どういうわけか誠子のお気に入りは中央階段を下りた昇降口の近くにしか売っていない。そのためいつも部室から昇降口までの往復をしなければならず、もう慣れたとはいえさすがに距離について何も思わないわけにはいかなかった。いぎ階段を下りて視線を足元から戻すと、ここ最近で一気に見慣れた少女の姿がそこにあつた。

「へえ、いつも上履き持ってきてたんだ」

「うん、だって私の下駄箱まだないしね。へへ、エライでしょー?」

「はは、偉い偉い。それに平日にも来てるんだから大したもんだよ」

「電車一本で来れるのがおつきいかも。坂とかちよーメンドーだけど」

腕を使って坂の傾斜を表しながら楽しそうに笑う。靴を入れるケースは使っていないほうの手に、スクールバッグは坂を表現しているほうの肩に掛けている。制服から違うというのにどうしてかこの少女が白糸台という景色にマツチしているのが誠子には不思議だった。

「あ、ちよつと気になつてるんだけどさ」

「ん？ なーに？」

まるで一年はともに過ごしているかのような気安さを淡に対して抱いていることに誠子は気付けない。それこそ今年麻雀部に入部した同期や、あるいはこちらは自然かもしれないが部の先輩方のほうがどちらかといえばまだ緊張してしまふくらいだ。しかし誠子はそのことに気付けない。意識に上がつてこない。ただもちろん人と人が、部活における先輩と後輩とが仲良くなることは何も間違つてはいない。

「他の高校からオフアーナかつたの？ 淡くらいの実力なら引く手あまたつてやつじゃない？」

「推薦のハナシ？ そんなのないよ、だつて中学じゃ部活入つてないし」

「へ？ 部活入つてないの？ あんなに打てるのに？」

「みんな口ばつかでやる気ゼロだし弱つちかつたからすぐ辞めちやつた」

聞きたかつたのは決してその部分ではないが、天真爛漫な普段の態度からは見えない

中身が誠子には見えた気がした。同時に淡がこの白糸台にやってきた理由が手に取るようにわかる気がした。そしてもしそれが正しいのならば、という仮定の上に推測を重ねて導いた結論に確信を得るために、誠子は質問を続けなければならなかった。

「……ひよつとして白糸台を選んだのって」

「そうだよ、テルーを倒すため」

「やつぱりかー、やつとちよつと淡のことがわかったかも」

「あれ？ 珍しいね。テルーを倒すなら白糸台以外が自然だろ、とか言わないんだ」

「宮永先輩に個人で勝ちたいってことでしょ？ 個人相手ならむしろ近くにいたほうが、ね」

「ふふー、亦野先輩もけっこーナイスだよ、やつぱここ来て正解だったよ」

そう口にして淡はにっこりと笑みをもう一段階深くした。まっすぐで快活な、何も隠していないあけつびろげな、見ている誠子もつられて笑ってしまいそうになるほどの素敵な笑顔だった。

話しながら歩いてきたからか二人の歩みは遅く、まだ階段を上がり始めて少しの地点にいた。

「それにしても淡ってさ、よく宮永先輩にあんなに絡んでいけるよな」

「へ？ あー、そう、亦野先輩でもそんな感じなんだ」

ほんの短いあいだだけ目を掠めた不思議そうな顔が、すぐに納得のいった表情に切り替わったのを誠子は見た。おそらくは見えているものが違う。背すじに冷たいものを感じつつ、誠子は無意識のうちにこの場から救済してくれる象徴としてなぜか董の顔を頭に思い描いていた。

「いや、宮永先輩をどうこう言うつもりはないけど、打ってる先輩って、なんかさ」「怖い、とかそーいうやつ?」

「……うん、まあ、普段の先輩はぜんぜんそんなことないんだけど」

どう言い繕ってもプラスの感情を抱いていることにはならないことに気付いて、誠子は心の中で失敗した、と後悔した。照に対する尊敬に間違いはないが、このぶんでは淡からは今後そんな感情を抱いているようには見えなくなるだろう。そう思うと途端に誠子は申し訳ない気持ちになった。歩きながらの会話であることが彼女にとってばかりがたかった。

「まあでもしようがないよ、ちよつとテルーはトクベツだもん」

「特別……。まあ、うん、そうだよな」

「あ、違うよ? 亦野先輩が考えてるトクベツとはまた別の意味だからね?」

「え?」

「テルーはね、なんていうか……。まず真正面に立てる人が限られちゃうんだ」

どう言つたらいいものかと悩む淡の表情はわかりやすく、かつ彼女の明るい個性を失わないという難しい条件を満たしたものだつた。もし口元に耳を近づければ、うむむ、とうなる声が聞こえるかもしれない。それとは別に誠子は意外な返答にすこし驚いていた。尊敬する先輩に対して怖いと言つてしまったことへの否定がなかつたもそうだし、想像していた以上に淡が、誠子とは物の見方が違うにせよ、人をよく見ていたことも彼女に驚きを与えた。

「そういう意味だとその土地で祀られてる神様みたいなのに近いのかも」

「全力を出せる相手が限られるってこと？」

「違う違う！ テルーはいつも全力だよ！ その上でつていうか、なんだろう、対話？ 違うなあ」

淡はもごもごと口を動かして、わかんないや、と最後に呟いた。

「ま、フツの人間は神様の前には立てないよね、つてコト。だからスマレが面白いだよ」

「董先輩？ なんで急に」

「あれ？ 不思議に思つたことない？ なんでテルーがスマレと仲良いんだろつて」

それは、と言いかけて誠子は口ごもってしまった。疑問にすら思つていなかったことが、いま後輩の口を借りて明確なかたちをとつて誠子の頭の隅に場所を取つたからだ。

誠子にとっての宮永照の像は夏の都予選と本選での姿そのままだ。周囲が勝利への意欲を？き出しにして向かってくるなかで、ただひとり森の奥の静かな湖面のように何一つ波立たせることなく、その上で圧倒的に卓上に君臨する存在。何を楽しいと感じ、何をつまらないと感じるのかさえ読み取ることができなくて、それでもそのことを誰も指摘すらない存在。考えれば考えるほどわからないことが渦を巻いていくなかで誠子にとつてただひとつだけはつきりしているのは、チャンピオンと呼ばれるようになった彼女が倦むことなく麻雀を打ち続けているということだけだった。その宮永照が何を求めているのかを考えたときに、弘世董という尊敬すべき先輩が対象に選ばれたしかに奇妙なことに思えた。

「いや、でも友達なんてなんでもなるようなものじゃないか？」

「テルーをふつうのものさしで測っちゃダメだって」

「……それはまあ置いといて、董先輩が面白いていうのはどういう意味なんだ」

「スマレはなんか矛盾した存在なんだよね、何も持ってないはずなのにフツーじゃない」

「普通じゃない？」

「だってスマレはテルーの前に立ってるでしょ」

その論理があまりにも当然なもののように言うものだから、誠子もああそうかとその

ままそれを受け入れてしまいそうになった。しかし誠子はそのまま流されるわけにはいかなかった。この白糸台の麻雀部に所属している誰もがそうであるように、誠子も求めるものがあつてここにいる。そして淡の口から出た言葉にはその求めるものと深く繋がりがある可能性があつた。夜のように静かな廊下に反響する声に包まれるような感覚があつた。どんなときでも頼れるあらゆる意味でかつこい弘世董という像の他に、なにか未だ知れぬ像が少なくともあとひとつは本当にあるのではないかということに思い至つて誠子は震えた。のどの奥のほうで、きゆう、と鳴つた。誠子には淡の言うトクベツの意味が理解できない。宮永照の前に立つことがどれほど特別なのか、その一点が誠子を縛り付ける。なぜなら誠子はまだその特別な存在と卓を囲んだことがなかつたから。

特別なものを何一つ持たないのに普通ではないこととトクベツであることとのあいだに何らかの関係があるのかと思つてまだ落ち着かない頭で考えようとしたが、そのまま淡の言う通りに矛盾しているように思えて誠子には結論が出せなかつた。ただ休憩がてら飲み物を買いに来ただけのはずだったのに、気が付けば頭がくらくらするような状態に陥っている。飲み物を買ひ忘れてもいる。

「……まあ、淡の言い方だとたしかに普通じゃないつてことになるか」

「コーヒーにミルクを入れて、それなのに混ざらずに綺麗に白黒に分かれてる、みたい

な？」

「驚いた、董先輩はコーヒーだったのか」

「えー、スマイレのキャラでミルクはないっしょー」

急に方針を変えた会話の機微を悟ったかどうかはわからないが、淡はきやつきやと楽しそうに誠子のフリに興じている。外は日の光を忘れてしまいそうになるほどに暗いのに、淡の笑顔の届く範囲はぱつと明るくなるような気がする。場の雰囲気に影響を及ぼすような個性はどうしたって天性のもので、素直にすごいなと思いつつも誠子はそれを欲しいとは思わなかった。もうそろそろ階段を上がるのも終わりが近い。あとは彼女を連れて廊下をまっすぐ行って部室に戻るだけのこと、そうすればまた普段通りの風景が変わる。頭半分くらいは背の低い淡が隣で先ほどまで話題に挙がっていた新しい部長についてたくさんの適当な推論やホラを吹いては笑っている。誠子はそれに応じてさまざまな反応を返したが、それは根本的に楽しさをベースとしたものだった。

部室の入り口まであと少しだというのに、不自然なくらいに人が見当たらなかった。論理的に考えればそのぶんだけ真面目に部員が練習に取り組んでいることになるために憂慮すべきことなど何も無いはずなのだが、人数規模を念頭に置いてしまうとどうしたってそれは不気味な印象を残してしまう。外が暗いだからなおさらだ。

こんなことになって気が付かなければよかった、と誠子は内心でうんざりする。往々

にしてあるタイプの人間は知りたくなかったことや意識したくなかったことに直面してしまふものである。誰が何と言おうと誠子はそのタイプに属していた。ただただ一部に蓋をして淡との会話の楽しさに身を浸していればそれでよかつたはずだつたのに、空を覆う厚い雲がそれを許してはくれなかつた。

もう二歩三步で戸に手が届くようなところで、明るい調子を崩さないままで淡が話題を突然に切り替えた。とはいえそれはこれまでの話とまったく関係のないものというわけでもない。

「ね、亦野先輩ってスマイレのファンなんだよね？」

「んー、ファンっていうか、まあ尊敬はしてるけど」

「じゃあ気をつけたほうがいいかもしれないね」

「なんだよいきなり。何のことだ？」

「このままだとスマイレ、■■■■■■■■■■？」

金属バットのように緩やかな曲面をした棒で脳の内側を思いきり突かれたような感覚があつた。あまりにも突然に放り込まれたその発言を、誠子の脳は理解することをはつきり拒んだ。そのために彼女は足を止めないわけにはいかず、まるで対照的な比喻のように足を止めずに元氣よく部屋に入っていく淡の後ろ姿を、黙つて見送ることしかできなかつた。それは言うまでもなく耳を疑うような警告が、きれいでやわらかい金色

の髪をした少女からあつたからだ。ちようど外で、雲の色に似合わない細い雨が降り始めた。

十八

「よう、弘世ちゃんじゃねーの」

白糸台麻雀部には珍しい、ぽっかりと空いた一日の休みが運んできたのは偶然の再会だった。

残暑の下の舗装された道は歩道車道の区別なく、かすかに発光しているように見えた。それでも董の実感としては真夏の日差しより落ち着いていた。わざわざ気温を測つてもいらないし季節ごとの太陽の光の強さをいちいち覚えようともしていいない。具体的な説明などひとつとしてないが、夏の真ん中と厳しい残暑のあいだの違いを、董は、どちらかといえば信じていた。

照り返しのあるアスファルトを抜けて電車に乗り、たまたま空いていた座席に腰かける。車内は冷房を弱めに利かせているらしかった。場合によっては外と車内の気温差で体が驚いてしまうことがある。走って駅まで来たわけでもない董にとっては冷房は

弱めでちょうどいいくらいだった。董の体重でわずかに沈んだ座席は、適切な言葉の思いつかない不思議な反発力でかたちを一定に保っている。学校へ行くときも学校から帰るときも必ず席が埋まっているせいで座席の感触などしばらく確かめようもなかったのだが、たまに座ってみると悪くないと思えるのだった。

高架から街を一望していたつもりがいつの間にか地面と同じ高さを走っていたりと、窓から見える景色はくるくる変わった。目の前を流れていく自身の足で歩いたことのない街並みと自分の知っている街並みが、かならずどこかでつながっていることが董には不思議で、そこに人が暮らしていると余計にそう思えるのだった。

董が目指しているのは都心にある百貨店で、そこでしばらくぶりにきちんと時間を取って趣味に興じるつもりでいた。広く言ってしまうえばショッピングということになるのだが、今回の彼女の最大の目的は石鹸であり、おそらくはそれこそが董の趣味としてはいちばんのものであった。香りや泡の滑らかさの具合などこだわりだせば際限のないものだが、どれがベストなのかは董本人にしかわからない。ちなみに彼女自身この趣味が女子高生の間ではそれほどメインストリームを形成していないことを承知しているため、とくに誰にも話すことなくここまで来ている。

東京の、それも中心的な駅ともなると外の景色を一切見ることなく様々な店にたどり着けるのがむしろ当たり前で、そのある種の不健康さに董はほとんど意識を向けなく

なっていた。人の匂いや地下に特有のわずかに不快な臭いの混じりあった蜘蛛の巣な
んで目じやないほどの迷路を迷うことなく董は歩いていく。追い抜いたり追い抜かれ
たり、正面から向かつてくる人を躲したり、あるいは突然に前を横切る人にぶつかるとも驚くこともない様子は、外から見れば特殊な技術を共有した上で成り立っているか
のような感じさえあった。まるで頭になかった人物と董が出くわしたのはそんな折で
あった。

「よう、弘世ちゃんじゃねーの」

常識で考えれば話し声や雑踏の中の環境音に消されてしまうはずのその声は、不思議
とまつすぐ董の耳に届いた。ふいと顔の向きを変えるとそこには通常なら個人的な関
わりなど持てないはずの人物が立っていた。ただ単に彼女が人混みの中に立っている
のは董にはミスマツチに感じられた。そのこととは関係なく彼女からいくつも種類の
ある笑みの中から親愛を示すものを向けられると、董の頬もほころんだ。

「三尋木プロ。どうしてこちらに？」

「ははは、相変わらずかっつーのな。アタシは買物だよ、キミは？」

「私もです。珍しくぼんと一日空いたので」

「そっか、白糸台みたいなトコだと休みが少な〜もんな。つえー学校の宿命だね」

咏の姿はテレビのイメージどおりの和装だったが、周囲を歩く客はほとんど不躰な視線を向けることをしなかった。そういつた振る舞いが自然と身に着いた客層を相手にした店舗なのだろう。そもそも石鹼の専門店が入るような百貨店が近隣にいくらもあるわけがないのだから、あるいはそこを中心に買い物をするような人々と三尋木咏はある種の顔なじみになっているのかもしれない。

さすがに入口付近で足を止めるのは迷惑以外の何物でもないということ、とくに行き先を決めずに二人は歩き出した。一階は化粧品を扱っている店やそれに近い品物を取り扱っているドラッグストアが店舗のほとんどを占めており、そういった品々に興味が出始める年頃の董はその道の先輩である咏から参考になる話を聞いていた。とくに試供品で肌との相性を確かめてからでないとかクナことにならないということ、その辺りの確認をするときには必ず店員に話を聞くべきだということは何も知らない董にとつて膝を打ちたくなるような情報だった。

「でもさ、見りゃわかるけどすっぴんでそれだろ？化粧品なんてまだまだ余計だつて」ほんの少しだけ意地悪さに乗せた目に射竦められて、董はうまく言葉を返せなかった。世辞などとはまるで縁のなさそうな彼女から外見について褒められたのは董に

とつて嬉しいことだったし、それでちよつといい気になったのは本当のことだった。その一方で化粧というものに興味があつたのもまた事実であつて、ただ詠にそう言われてしまうとどう返しても自身が思ひ上がっているような気がしてしまふ董がそこにいるのも事実だった。

困つたような表情で口を開いては閉じたりしている董の様子を見て、詠が笑いかける。

「はっはっは、悪かつたつて。ちよつとした茶目つ氣つてやつさ」

「……もしかして」

「いやでもキミの頭の回転の速さにや驚いてんだぜ？ フツーなら言つてから後悔してるよ」

こうやつて軽いイタズラを仕掛けられるくらいには気安く付き合える相手だと思つてもらえていそうなことについて文句を言うつもりは董にはなかつた。ただイタズラの仕掛け方が、なんとというかえげつない。それは董に仕掛けようとするのなら学生的身ではとても真似のできないやり方だ。言つてしまえば三尋木詠という立場があるからこそ成立するもので、ある意味では董が相手だからこそできるやり方と言えるかもしれない。もちろん腹を立てているわけではないのだが、普段とは違ふ扱われ方のせいではない。つもとは違ふ心の粟立ちに董は居心地の悪い思いをした。

董はこのときの自身の気持ちを言い表せる言葉を持つていなかったから、ただ咏のことを真正面からじっと見つめることしかできなかった。こんな場面をもし白糸台の知り合いが見たら、きつとそのほとんどが驚いただろう。同世代から見れば彼女は大人びて見えるのかもしれないが、やはり年上から見ればまだまだ小娘ということになるのだろう。

「わかったわかった、お昼ごちそうすつからさ、そう睨むなつてー。な？」

睨んでいるつもりはない、と董はとつきに否定しようとしたが自分の目つきのことを思い出して黙り込んでしまった。中学生のある頃を境にすっかり言われなくなったが、その前までは目が鋭すぎると言われていたこともあって、董はいまだにその辺りに多少のコンプレックスを抱えていた。見る人が見れば切れ長の美しい目でも評価するのだろうか、彼女自身がいい目つきとは言えないと認識してしまっているのだからどうしようもない。とはいえ咏が董のそんな事情を把握しているはずもなく、彼女は楽しそうにからからと笑っていた。

「そーいや聞き忘れてたけどさ、麻雀のほうは最近どうなんだい？」

「成長してはいるのだろうかと思いますが、ただどうにも実感が……」

董が咏にやり込められたあと二人はまるですこしだけ歳の離れた姉妹やあるいは従姉妹のように百貨店をぶらついた。その中心は話にあつて、商品はその着でしかなかった。人の類型で言えばおよそ似ているところがあるとは思えない組み合わせではあつたが、案外と相性は悪くなかつたということなのだろう。やがてちよいどいい時間になり、咏の行きつけだという個人経営のレストランで二人はひと息入れていた。もうすでに食事は終えて皿は片付けられ、テーブルには食後のコーヒーと紅茶がそれぞれ咏と董の前に置かれている。ゆっくりと揺らめく湯気を挟んで、普段通りの表情をした顔と軽い苦笑いが相對していた。

「ま、比較対象が宮永ってーのはね。たしかに難しいかもねい」

「生まれたときから既に大きい……、ゾウとかキリンと背比べをしているような気になります」

「実際そこまでのレベルの差はねーんじやん？ 知らんけどさ」

「……どうなんでしょうね、距離が近すぎてうまく測れてないのかもしれないかも」

「宮永と自分を比べんな、なんて言わんけどね、そいつはどだい無理な話つてもんだし」

「……少し、救われます」

「星の関係と似てんのさ、いちばんでけー恒星が星系を作んの。どこも変わらんよ」
先ほどまでの雑談と何ら変わらない飄々とした調子からは慰めの色は少しも感じ取れない。けれども董にとってはそれが心地よかった。すべては今さらでしかなかったし、聡明な彼女がある程度の折り合いをつけていないわけがなかった。だから咏の意図がどうあつたのかは別にして、なんでもないように変わらないと言ってもらえたことに本当に救われた気がしていた。

董は黙ったままカップを傾けた。それが失礼な振る舞いにはあたらないと芯から思えているような自然な動作だった。敬意も気安さも含んだ、簡単に一言で親しさと片付けることができない空気が二人のあいだには流れている。それは董からすると部活にもクラスにもない、目の前の女性とのあいだにしかない関係性だった。

「やっぱりさ、宮永は気になるかい？」

「はい、どうしようもない類のことだとすら思います」

「ま、それつくらいなら大丈夫かね。あんまのめり込むんじゃないよ？」

「あの、それはどういう……」

「似たような事例を知ってるってだけのとき、気にしなくていいよん」

詳しく聞きたそうな様子の董を安心させるように白い歯を見せて咏は話を打ち切っ

た。単純に、それだけで完結している笑みだった。それを承けた董の表情ははじめ煮え切らないものだったが、どこかで割り切ったのか質問を重ねるようなことはしなかった。そのあと二人は麻雀に限らない話を続けて、それなりの時間が経ったところで解散の時間を迎えた。咏ははじめもともあつた予定をこのままサボってしまおうと考えていたのだが、生真面目な董と話をしているうちに面倒だからといってサボりっぱなしなのどうかと思ひ直したということらしい。なんだか大役を果たしたような気がして気後れしたが、そのことについて董は深く考えないことにした。そのかわりなのかどうかはわからないが出掛けた当初に目的にしていた石鹼をまったく見ていないことについて董が思い出したのは、その日の夜、入浴する段になつてのことだった。

亦野誠子は活発で親しみやすく、人の輪の中心にすることが自然だと思わせるような人柄をしている。まだ落ち着きが足りないなどという声もあるが、それは高校生に求めるには酷な資質であつて、それは彼女への信頼を損なうようなものでは決してない。たとえば宮永照や弘世董が特殊すぎる例だというだけだ。彼女が出場したわけではなかったが、都の予選が終わつたあたりから責任感と麻雀の実力がめきめき伸びてきたと

いう評価を受けており、そんな誠子が早くも次期部長として目されるのはおかしなことではなかった。

とはいえまだ入部して半年も経っていない一年生である誠子には、それらのことは縁遠いことでしかなかった。まさか自身が尊敬するあの弘世董のように部を導いていくとはとても思えなかったし、それ以上に名門たる白糸台の部長など身に余るというのが彼女の考えだった。だから彼女はそのことに対してまるで頭のリソースを割いていなかった。注力すべきは何よりもまず実力の向上であると理解し日々の練習に励んだ。もちろん学生の本分である学業にも苦勞しながら取り組んだ上での話で、それは外から見ても充実した生活を送っているように映っただろう。ただ一点を除けば誠子本人も実際にそういった実感を持つていた。誠子の頭に暗い影を落としているのはひとつの懸念である。しかしそれは懸念という言葉が本来持つ意味以上に緊急性を伴っていた。

原因は何かと問われれば、それはやはり宮永照に帰って来るものだった。見方を変えれば誠子に運がなかったと言えるのかもしれない。対象を人に取り異能を有するほどの優れた感性こそが彼女に疑念を抱かせ、そして大星淡との出会いがそれを危機感へと変えた。弘世董と宮永照のあいだにはなにかがある。それは誠子のなかではほとんど確信となっている。そしてそのなにかが致命的な事態を引き起こす可能性を持つてい

ることを察知することと、それを止めるために動くことを両立できるのは誠子ただひと

りだった。残酷な言い方をするならば、あるいは原因は彼女の見て見ぬふりの苦手な性格にあったのかもしれない。

いまだ明確な形をとらないその懸念にはつきりした姿を与えるために、誠子は淡の口にした宮永照の特別性を把握しなければならなかった。あの二人を繋ぐのは競技としての麻雀であつてそれ以外はないと誠子は考えている。であれば誠子に採れる選択肢はひとつしか残らなかつた。その手段とは誠子が白糸台で手に入れようと思つていたものをすべて掴もうとするならば必ず通らなければならぬ道であり、はじめ彼女が考えていたプランといま決断しようとしていることに違いがあるとすれば、それはせいぜい早いか遅いかくらいのものであつた。つまり誠子は、淡が言うところの常人では立つことさえできない場所に立つとうとしていた。

薄い雲を透かして日が注ぐような空模様だつた。学校そのものが山にあつて見晴らしがよく、三階から上の窓からはずいぶん遠くまで見渡せた。しかしその遠くの木々さえ微動だにしないほどに風はない。空気そのものがびたりと止まつているようで、どこか不気味であつた。秋の入り口にしては気温は低く、よほど激しい運動をしない限りはそうそう汗をかくことはないだろう。逆に言えば運動に適した日和ということなのかもしれない。そんなどつちつかずな天気朝から続くなかで、これから未知の領域に踏

み込もうとしている少女は、四時間目の古典の授業の途中から精神を昂ぶらせていた。

特別な条件など何もない。三年生が抜けて新体制になった影響もあって、挑もうと思えば誰でも宮永照に挑むことは可能だった。ただ誠子の目から見て彼女を叩き潰そうという気概が見える部員は淡だけだった。他の部員からは胸を借りるといった雰囲気や、自分が傷つかないように立ちまわっているのが感じ取れる。董に至っては同じ卓を囲んでいる姿さえ見かけた記憶がない。そこになにか理由があるのかは知れないが、とりあえず余計なことは脇に置いておくことに決めて誠子は照の座る卓に近づいていった。ちょうど東場と南場のあいだのわずかな時間だったようで、思っていたよりも簡単にコンタクトを取ることができた。そのとき誠子は自分がどんな声と顔をしていたのかなどまるで把握していなかった。

「次、一局お願いしていいですか」

「うん、いいよ。よろしく、亦野さん」

誠子が焦がれていた対局は、いともあっさりとは決定された。

十九

雲はわずかに厚みを増していた。しかしそれでも日の光を透かすのには変わりなかった。同じように朝に比べれば湿度も増したように感じられるが、それは空一面に広がる厚くなった雲が思い込ませているだけなのかもしれない。やはり風はなく、外の明るさのわりには空気が重い。ほんの一、二週間前まではすかすと突き抜けるように青く晴れて暑かったことがまるで嘘に思えるほどの空模様だった。

機会を見計らって照を部室の外へと連れ出すことを決めた董は、二着で終えた対局に一礼をして席を立った。他家からもそれぞれ少しずつ違ったタイミングで挨拶が返ってくる。そのやりとりは董にとつてあまりにも自然なもので、だからこそ部員たちは彼女の振舞いが正しいのだと納得することができていた。もちろんそんなことは誰も董に言わないから彼女自身そういったタイプの種のある種の尊敬を集めていることは知らない。そんな彼女が対局直後に席を立つてどこかに向かうのはどちらかといえば珍しいことに分類される。なぜなら大概の場合は席を立ったところで誰かに捕まるのが通例

だからだ。よその学校が想像しているほど白糸台麻雀部も董個人も対局詰めの練習を行っているわけではないが、それでもたしかにいろいろと差つ引けば彼女の休憩時間はあまり多いとは言えそうにはなかった。人によつては話しかけるチャンスを見つづられずに一日を終えることすら珍しくはないほどのだから。しかしそういう状況下にあつても董は簡単に照を伴つて部室を出ることができた。どういふわけかそういった隙間を縫うような短い空き時間を見つづけるのが董は得意だった。

廊下を振り向きもせず足早に歩いていく董の後ろ姿からは、照が後ろからついてくることをまったく疑っていないということが読み取れた。事実、董から三メートルほど遅れて彼女にぴたりついていく姿がそこにはあつた。それはどこかしら不自然な距離で、上履きの立てる音はその三メートルを渡り切れないようだった。密度を上げた空気中の水分がそれを邪魔したのかもしれないし、もともとが音の立たない歩き方をしてきたのかもしれない。いま二人が歩いているのは部活棟の廊下で、そこには生徒の姿は見受けられなかった。このまままっすぐ行けば渡り廊下があつて一年十組の教室が見えてくる。董の歩調を見る限り、どうやら部活棟を抜けるつもりらしい。

教室棟へ入ると言葉にするのは難しい空気の質が一段変化した。それはいくつもある教室の奥でひそひそ囁かれている小声での秘密の話が何度も壁や床に反射して言葉としてのかたちを失くしてしまつたせいのようにも思える。それはちいさな音量に違

いはないが、まわりの環境があまりにも静止し過ぎていて浮いて聞こえるような気さえする。あるいはそんな音など初めからないのかもしれないが、森閑とした廊下の空気はそういう思い過ごしにいつも以上の現実感を与えるものである。造り込まれた空間だと言われれば信じたくなくなる人間も出るだろう。

一向に緩まなかつた董の足取りは、四組と五組の間にある中央階段の近くへ来てようやく変化を見せた。麻雀部の部屋は部活棟の二階にあり、その渡り廊下はもちろん教室棟の二階につながっている。教室棟は二階、三階、四階と階と学年が連動して上がっていくことになる。董と照は二年生だから今のところ三階の教室に通っているということだ。学校という建造物の構造もあつて屋上もあるにはあるが、時世の流れとすべきか屋上につながる扉には常に鍵がかかっている。入ることのできない屋上に近寄る生徒など誰もいない。例外としてはその扉の前あたりの掃除担当くらいのものであった。董の右足が上へ行く階段にかかる。

「董、屋上は入れない」

「知ってるよ、わざわざルールを破つて怒られるつもりもない」

照が声をかけたのは董が四階からさらに上へ行こうと階段を上がり始めたときだった。もつとせつかちな性格をした人物を連れていたら四階に上がろうとした時点で董を止めようとしたかもしれない。そもそも二年生が三年生の教室のある階に行くこと

自体少ないと言つていいからだ。

照のほうから話しかけてくるのも珍しいと思つたが、それよりも董は照が学校のルーのようなものを把握していたことに驚いていた。あるいは読書のために一人で屋上に行こうとした経緯があるのかもしれないが、それでも一般的な事柄が宮永照の中に残つていてという事実には奇妙な違和感を覚えていた。ほんのわずかあつてその考えが失礼であることにやつと董は思い至つた。

「あまり知られてないけどな、実はここに部屋がひとつあるんだよ」

そう言つて董は四階と屋上をつなぐ階段の踊り場にある扉を軽く叩いた。一般的な学校に溢れているスライド式のものではなく、ノブを回して開けるタイプのドアだつた。白糸台高校も教室のドアはスライド式であつたから確認してみると多少は面食らうものがあるはずなのだが、それでも意識しなければ印象に残りそうもない不思議なドアだつた。踊り場という中途半端な場所が問題なのかもしれない。四階から屋上に続く階段は三年生が掃除担当であり、誰も来ないというわりには目立って汚いところはない。その汚れのなさだけを見れば普段から使われていてもおかしくなさそうに見えるのだが、ドアとして認識しようとするとドアというよりも壁が変形してそこだけがへこんでいるというようにしか見えなかつた。

いつの間にか手に握られていた鍵を董が手慣れた様子で鍵穴に差し込むと、特徴のない音が立った。先ほどまで廊下を歩いていたのと同じように振り返ることなく董は踊り場の部屋へと入っていった。やはり照がついてくるのが当然だと考えているように、董はすこし長く開いているようにと通り抜けてからドアを軽く進行方向に押しした。照も自然に董の開けたドアをくぐった。猫がソファに自分の居場所を作ったときのように、照の足の動きとドアの閉まる動きにはびつたりと収まる感じがあった。

「さて、あまり世間話をするつもりもない」

「いいよ、なに？」

部屋の中央で董が振り向いた。踊り場の部屋の中は書類棚と職員会議などで使うような机がいくつも並び、それに対してパイプ椅子がひとつだけ置いてあるというアンバランスな構成だった。配置から言えば執務室のような印象さえ受け取るかもしれない。しかし董はそのパイプ椅子に掛けずに、立ったまま照のいるドアのほうを向いている。空が曇っているのに加えて窓の向きとは違うところに太陽があるようで、室内の暗さは時間帯を考えれば意外なほどであった。二人のあいだに一般的な女子高生同士のような明るい空気が流れる光景はほとんど見られないが、今のこの状況は部屋の雰囲気もあいまってより一段階暗い方向に傾いているように見えた。

董は短く息を切った。普段はできるだけ気を付けている目についてもう気を払うつ

もりはなさそうだった。もともと鋭いと評判の目はもはや他の人物であれば竦んでしまっただろう眼光が変わっているが、目の前にいる相手は何をどうしたところだまったく表情を動かさない宮永照ただひとりなのだから董がそんなことを気にする必要はない。考え方を変えれば、董が気兼ねをすることなく本気で話ができる相手は照だけということになるのかもしれない。あるいはそこに淡も入ってくる可能性はあるが度合いに違いは出てくるだろう。

「なあ、おまえ亦野に何をした」

「亦野さん？ とくに思い当たることはないけど」

「今日で三日目になる」

「何が？」

「亦野が卓に着かなくなっただよ。部には出ているのにな」

その単純に冷たいと言では表現しきれない声を聞いている人物はこの部屋には他にいない。クールで落ち着き払った声色だとか、あるいは大人っぽい話し方という評価のついて回るいつもの董の口調とはすっかり色が違っている。しかしだからといって具体的にどこが違うと指摘するのも難しい。それは照とはまた別の意味での董の仮面でもあった。

「何が言いたいのかわからない」

「亦野と最後に打った中にお前がいたのくらいすぐにわかるさ、記録してるんだから」とくに強く張っているわけでもないのに演説のように通る声 that 空気をびりびりと震わせる。この場にいるのが照でさえなければ、空気を壁にして声に縫い留められたかのような錯覚を味わっていただろう。両者の性格を考慮すればあり得ないことだが、そこにはいつどちらが掴みかかってもおかしくないような雰囲気の流れている。部長はチームを守らなくてはならなかったし、エースには自身を曲げるという選択肢がなかった。

互いに目を合わせていたそれほど長くはなく、時間にすれば二十秒から三十秒程度のものでもしかなかった。その長いとも短いともつかない時間が過ぎ去ったとある一点で照がため息をついた。

「……亦野さんだから、だと思う」

「何を言っている?」

「そのままの意味。亦野さん以外に同じ状況になってる人がいないことへの答え」

「お前が亦野ひとりに的を絞って何かをした可能性は?」

それを聞くと照は何も言わずに目を閉じてゆっくり首を横に振った。顔に動きはあつたが表情に変化は見られない。それはただ眺めていると呆れられているようにも怒らせてしまったようにも見える。どこまでも感情を表に出さない彼女の鉄面皮に影

響を与えるのは董の知る限りただひとつ、彼女のことをきちんと知らない大多数の前という極めて限定された状況以外には存在しない。条件で見ればこの部屋はそれとは対極に近いと言ってもいい状況だ。照が自主的に表情の異なる仮面を被る理由などここにも見当たらない。

「言葉の向きが違う。彼女にしか受け取れないと言うべき」

「もう少しわかりやすく説明しろ」

「……………亦野さんは強くなるよ、董。大事にしてあげたほうがいい」

それだけ言うとは照はくるりと身を翻して、董に何かを言わせる前に部屋を出て行ってしまった。後に残されたのは董自身とすっかり現実感の失われた空気だけだった。

立地の関係もあって、本来であれば白糸台ではよく風が鳴る。普段から授業を受けている教室などは校庭に面しているせいで耳慣れている生徒はそれほど多くないが、一定の条件下ではびゅうびゅうと響く。実は踊り場の部屋はちようどその条件にびったりと当てはまっていつもならうるさいくらいなのだが、今日は珍しく風が完全に止んでおり、そのことがどうしても董にとっては良い兆候には思えなかった。

たったひとりしかいない踊り場の部屋は、よく言われるような広すぎる感じとは違って、その部屋にとっていちばん適切な状態のように映る。それにはおそらく居る人物が

董ということも無関係ではないだろう。もともとの経緯こそ董は知らないが、とにかくここは麻雀部の部長が独りになるための部屋なのだ。考えるべきことがはつきりしている今、部活がまだ終わっていないことを除けば彼女がここを動く理由はなかった。

頭の回転の速い董にとって、照の口にしたことに対する仮説を立てるのにそれほど時間が必要なかつた。照の言う特別性を総合して彼女が導いたのは、亦野誠子が異能を有している程度には鋭いものを持つているのだろうということだった。董自身も照と打って吐き気に近い不快感に襲われた記憶さえあるが、思い出してみればたしかにあのとき他家に不快感はあつても自分ほど敏感に感じ取っていた先輩はいなかつた。この違いの原因をどこに見るかと問われれば、感性の部分だろうと董は結論を出す。となれば亦野誠子は自分よりさらに鋭敏に感じ取つた結果として卓に着けなくなつたとしても董には考えられず、その付属物として異能を備えているだろうことは時間を措かずに推測できた。

董はこれまでの部活で誠子と打つなかで強烈な違和感を抱いたことはなかつたがそれは当然の話で、部内だからといって自分の能力をひけらかすような真似をする選手はこの白糸台の麻雀部にはほとんどいない。能力には傾向があり、傾向があれば対策が立つ。部内でさえ勝ち抜かなければならないこの環境では誰であれそうそう簡単に奥の手を晒すわけにはいかず、したがって練習の仕方にも個々人で工夫が必要になり、それ

が白糸台を強くする。もちろん信頼できる相手に個人的に相談を持ち掛けることもあり、それらを含めて実に自由な練習体系を採っていると言えるだろう。

頬杖をついたまま董は、ふう、とすこし長めのため息をついた。

踊り場の部屋から部室へと戻る途中、もう部活棟には入っていて、董の考えの向きもどうやって後輩に話しかければソフトウェアイングになるだろうかということに集中していた。自身のイメージが厳肅やら潔癖やらそういう方面で固まってしまっていることを董も知っており、それが部員に対してふつうに話しかけるのにマイナスの影響が出ているのが悩みのひとつだった。何度目になるかわからない、さて、を頭の中でもう一度繰り返したところで腰の辺りに後ろから大きな衝撃がやってきて、さすがの董もたたらを踏んだ。

「つ、な、なんだ!？」

「スーミレっ♪ 難しい顔してどうしたの?」

「お前か……。本当に危ないから後ろから飛びつくのはやめろ」

はい、とまるで反省した様子を見せずに返事をする淡の姿を見て董は額に手をやっ

た。どうも手のかかる子供がそのまま大きくなった印象がぬぐえない。実際まだ子供といえれば子供ではあるのだが、中学三年生というのはもうすこし落ち着きがあるものはなかったかと董は自問する。

「というかお前こんなところで何してるんだ」

「飲み物買いに行つて戻つてきたらスマイレがいたからやつちやえ、つて」

董はじとつとした目を向けていたが、途中ではつとなにかに気付いたように顔色を変えた。

「なあ大星」

「なあに？」

「亦野について何か思うところはないか？　ちよつと気になることがあつてな」

「亦野先輩？　見誤つてたかなー、つて感じ」

「どういうことだ」

「んー、目良いしタフだし、フツーにいい人だし」

この後輩の口からさらさらさらと感想が流れてきたことに董は奇妙なものを感じた。そういうえば行きと同じようにもう部活棟に入っているとこの場に立てる人間が限定されているみたいだ。部の部員も見かけていない。まるでこの場所に立てる人間が限定されているみたいだ。

「けど、へー。スマイレも亦野先輩が気になるんだ？」

「最近あいつ卓に着いてないだろう。どうにか元に戻してやりたくてな」

「あ、そういうこと。だつたら放つといても大丈夫だと思うよ、さつき言っただけどタフだし」

「そうかもしれないが私がそれで納得するわけにはいかないんだよ」

「スマレが話聞いてあげたら一発で治るでしょ、しかしブチョーさんは大変だね」

目を細め舌を出して、いかにも自分はそんなことやりたくありません、と言いたそうな表情と同時に放たれたその言葉にいつの間にか力をもらっていることに董は気付かなかつた。皺の寄っていた眉間もいつの間にか和らいで、難しい顔が消え去つていく。董も淡も互いの顔や前を見ながら話を続けていたためどちらも気付かなかつたのだが、窓の外の光を透かす程度の薄い雲にわずかながらとはいえ切れ間ができていた。残念ながら太陽の位置は合わなかつたようで日が差し込んだわけではないが、そこからはちよつとだけ青空を覗くことができるようになっていた。これに気付けたのはほとんどが外にいた人だけで、校舎内にいた人は誰一人としてイメージの出来上がっていた今日の曇り空など見上げる気にすらなれなかつた。

董は部室の戸を開けて淡を先に押し込むと、自身は室内を見回して目的の人物を探し始めた。

「亦野、少しいいか?」

そう言つて腕組みをしつつ資料棚に背中をあずけた董の姿は、まるで撮影のセットのようぴびつたりと風景として馴染んでいた。それは誠子と向かい合っている資料棚の隣の棚で、誠子からすれば突然ではあつたがどうしてか驚くようなことにはならなかつた。棚と背のあいだには艶やかとしか表現しようのない長い黒髪が挟まれているのがわかる。誠子からすればそれは一種の自傷行為であり、また冒瀆でさえあるように思へた。あるいは自身の持つていないものに対する幻想的な憧れが影響していたのかも知れない。

しかし、と誠子は思う。この人の所作はどうしていちいち華を伴うのだろうか。何度となく頭に浮かんできたことが、不意にまた誠子の頭をかすめた。それは尊敬する先輩の髪に対する思いと同時のものであつたから、もしかすると並列思考と呼ばれる特別な技能として評価されるものかもしれない。とはいえ仮にそうだったとしても現実

に並列思考だなんて名前で呼ぶ価値はほとんどなかっただろう。実際それらの思考はまったく同時であつたにせよ、ごく短時間のあいだに生まれて、そして何も実を結ぶことなく消えて行つたからだ。

気が付けば誠子はただ董に顔を向けたままで、じつと黙っていた。

それをどういった沈黙と取つたのか、董がちいさく顔を傾けて視線を足元へ落とし、付き従うように自由の利く黒髪がさらさらと流れる。

「調子はどうだ」

「……あはは、気付かれてました?」

「まあ、卓に着かなくなつて今日で四日目になるからな」

誠子は棚にびつたりとくつつけられていた椅子に腰を下ろした。白糸台の部では資料を読むのにルールを特別に設けているわけではないが、それなり以上に長い時間をかけて読む部員のために、いくつかの資料棚の前には椅子が置かれている。もちろん棚の低い位置にも牌譜なり資料は数多くしまわれているが、低い位置に行けば行くほど古いものとなっているため、用事のある部員はまずいない。例外としては統計的な研究を行うような場合であれば下段の資料にも出番はあるのかもしれないが、加えて専用の資料室まで存在しているせいでそこまで徹底する部員もなかなかおらず、椅子が置いてあつても邪魔にならないというのが現状であつた。

もともと立っているときでもすこし目線を上げる身長差だったものが、座れば見上げなくては視線を合わせることができなくなつた。そこにはたとえば対局のときにあるようないつもものとは違う、不思議な緊張があつた。

「あー、その……、……いや、あはは」

「いいよ、たぶんだが大体はわかつてる。アレを相手に無理はするべきじゃない」

包むような声色だつた。言葉そのものの意味以上に伝わるものがあるのだということとを、まずは無意識に、次いで意識の上で誠子は認めなければならなかつた。

「前、入部してすぐでしたよね、先輩が私を止めてくれた意味、やっとわかりました」
口調としてはぼつりとこぼすような、独り言に近いものだつた。ほとんど甘えのようなものだと自覚こそしていたが、それでも止めることはできなかつた。これに対して返事がないだろうことは彼女にとつて半ばわかつていたことだつた。湖に石を投げれば波紋が立つのと変わらないくらいに自明のことだつた。いま誠子は顔をただ前へ向けている。視線の先には卓やそれを囲む部員たちの姿がある。しかし誠子の目は特定のなにかに注がれてはいなかつた。

「怖い、っていう言葉の意味合いが違つていたんですね」

ひとつひとつの音や発声は決して大きくはないが、全体を眺められる位置に来てみると、それらが合わさつてある一定程度の力になることに誠子ははじめて気が付いた。思

い出してみれば自身はずっとその渦の中にしかないなかったような気もしてくる。うねるように高く低く押し寄せてくる音の混合物に誠子はなんとなく波のイメージを重ねた。

疲れているのだろうか、と自分に問う。理由付けならいくらでもできる環境下にあるのだから、そうだといい切ってしまうのは簡単なことだった。

「……先輩は、宮永先輩とどれくらい打ってきたんですか？」

「数えたことはないが、それでも多いというわけではない、と思う」

誠子の隣にいる背の高い部長は思い出すように視線をいちど上に投げて、そうしてから確認するように呟いた。それはたしかに呟きだったのに、誠子の耳には一粒も漏れることなくきれいに届いた。彼女の声はよく通る性質のもので、その特徴だけを取り出して人の前に立つたために選ばれたと言われても納得できそうなほどのものだった。反面、内緒の話なんかは難しそうだな、と誠子は考えたことがあるがそれはまた別の話である。

不意に空気が変わったような感じがあって、ふと顔を上げるといつの間にか切れ長の鋭い目が誠子をまっすぐ捉えていた。あの目については今年入部した部員であれば誰でも一度は話題にする。あまりにも弘世董という個性に似合いすぎた黒い双眸は、彼女の実際的人格とは別にしてもやはり冷ややかな印象を残していた。しかし誠子

の眼前にあるのは、一年生たちのあいだに広がる印象とはまるで異なる温かさだった。

「なあ、卓には着けそうか」

「……宮永先輩とはすくなくともあとひと月は打ちたくありません」

言つてしまつたあとで誠子はすぐに後悔した。ほとんどの場合、口をついて出るような言葉は自身にとつて良くない種類のものであることは身に染みて知つていたからだ。しかし冗談ほど明るさに振り切るわけでもなく真剣な話ほど深刻さを持ち出すこともない、そんな煮え切らない調子の誠子の返答は、意外にも笑い声で迎えられた。

「ふふつ、なんだ赤野、思つていたより言うじやないか」

まったく想定外のリアクションをもらつて、誠子は言葉らしい言葉を返すことができなかつた。頭に血が上つたときの顔が熱くなつた。もちろん原因は恥ずかしさのあまりに、ということだ。もう秋だと言いつつてもいいだろうというくらいに気温はちようどいい日の午後ではあつたが、そんなことは吹き飛んでしまうくらいに制服の下では汗がにじんだ。

腕組みの状態から口元に手を自然にやつて笑う部長の姿はまたしても品があつて、誠子はだんだんそれがどうして自分の目の前にあるのかがわからなくなりそうになつてきていた。目の前の人物は白糸台高校麻雀部を率いる立場にある特別な存在であることは疑いようのない事実だが、自身はその部のただの一員でしかない。現段階ではレ

ギユラー争いに名乗りを上げたわけでもない。それがこうやって一対一で、それもきつと励ますためにだ、話してくれているというのは誠子にとつてどこか現実感のないことのように思えた。ただ、その違和感は次の一言で途端にかたちを変えた。いい方にか悪い方にかは誰にもわからない。

「……ああ、そういうことか。あのな、照のやつが言つてたぞ、お前は強くなるそうだし、はい？」

「その調子なら問題ないだろう。期待しているよ」

椅子に座っている誠子の肩を軽く叩いて音の満ち満ちた世界に歩を進めていく姿は、颯爽という形容がぴたりと鳴るほど当てはまっていた。誠子はそれをただ黙って眺める以外の行動が取れないほどであった。時間が必要になった。もう卓に着くことはできらうし、直接あの怪物にぶつからない限りはプレイング自体に影響が出ないだろうことも誠子は自身で理解してはいた。つい今しがたまでは、じゃあそろそろ練習に参加しないとな、なんて考えていたものがたつたいまこの瞬間にそれどころではなくなつた。

雲が空を覆えばきちんと冬服か、あるいはさらにセーターやカーディガンを着なければ肌寒さを感じるほどに秋が深まった。もう夏を思い出すよりも近づいてくる冬に思いを馳せる季節だ。董も冷え症というわけではないが、全体的に見て身体にあまり肉がついていないせいでブレザーの下にセーターを着込むのは早いほうだった。

董と照の仲が良いのは周知の事実であったが、だからといって二人が四六時中ずつといつしよに行動しているわけではないということもまた知れ渡っていた。ふたりの学校での生活を考えるならそれは当然のことのようにも思えたし、一方で奇妙なことと言つても通りそうだった。董と照ではその持つ意味こそお互いに違うが、周囲はふたりに対して集団の中心に在ることを期待していた。董の場合はクラスにおいても部活においても先頭に立つことが半ば自然になっていて、照の場合はいつの間にか周囲に人の輪が出来ていることが珍しくなかった。テレビの中の宮永照もまた宮永照の一部であることに違いはないらしく、読書に入り込むという癖はあるものの独りで過ごすことを決して最優先にはしていなかった。ある意味ではどちらもが抱えている人垣がふたりを引き離しているようにも見えるのだが、彼女たちに限って言えば、そういう実際の事情など関係なく一つの付き合い方として外から見れば淡泊にも取れる関係なのだ、と言われれば納得できてしまうような雰囲気かふたりのあいだにはあった。だからどちらかといえればいつしよに部室へ向かうよりも、むしろそれぞれのタイミングで教室を出

るほうが光景としてはよく見られていた。

ホームルームが終わって董が教室を見回すと、出入り口の辺りに照の後ろ姿がちらりと見えた。行動を起こすのが早い照は、条件さえ揃えば躊躇なく教室を出て行くし読書を始め。もちろんホームルーム終わりにクラスメイトと話をすることもあるが、彼女から積極的に行くパターンはなかなか見られない。董も行動が早い部類に入るだろうと自覚しているが、そこまで徹底しているかと問われれば首を縦に振るのは難しかった。

廊下の閉められた窓ガラスの向こうはどうやら風があるらしく、しきりに木の枝が揺れていた。枝についた葉はまだ緑色こそしているが、春から夏にかけてのみずみずしさは失われているように見える。リノリウムの床の上に立って見るその情景からは寒々しいものが感じ取れた。葉が落ちてしまっているよりははるかに見栄えはするのだが、そんなことには思い当たることもなく董は部室へ向かって歩き始める。

「やつほう董ちゃん、もうここんとこずーっと寒いね」

「ん、遠山か。そうだな、ちよつとずつ朝がつからくなってきた」

「あつはつは、董ちゃんも人間だねえ」

どこにもある女子高生の会話で、どこにもある光景だった。特別なものなんてどこにもなかったし、ある理由も必要もなかった。最近あつたちよつとした偶然のことや

噂話、教師への愚痴なんかが無目的に消費されてゆく。長い人生のなかのどこかでもしかしたら思い出すことがあるかもしれない、そういった日常のページだった。

「あいつフツーにくしゃみやみとかするぞ?」

「うつそ、あたし見たことないんだけどどんな感じなの」

「控えめな感じのやつだな、変な言い方だが妥当というかなんというか」

「えー、照ちゃんのくしゃみやみちよつと見てみたい」

「そういうものでもないと思うんだが」

「あ、照ちゃんで思い出したんだけど、最近あれ聞かなくなつたよね」

「あれ?」

指すものが不明瞭な言葉に思わず董は聞き返す。話が急に飛んだことも影響していたという見方もあるかもしれないが、女子高生の会話ということを前提に置けばそれほど変な話でもない。

「私に妹が、つてやつ」

「そう言われれば、……そうだな。そんな気がする」

対局も会話も今までと大差なく交わしてきたなかで、そのセリフをいつ聞いたのか董は思い出せなくなっていた。すくなくとも夏には、インターハイには聞いていない。それなら春は、冬は、と遡っていつてもここだと言い切れる自信が董には持てなかった。

その言葉にどんな意味が込められているのかは董にはわからない。だがそれが嘘だということについては確信を持っていた。ほんとうに妹がいけない人間が自分に妹のいないことをわざわざ言う必要はないからだ。事情など想像もつかないが、照が何かを抱えているのは間違いない。その象徴のような言葉が聞かれなくなつたことが董に違和感を残していったのは当たり前のことであつた。

「なんか決め台詞ー、みたいな感じに思つてたんだけど」

「そんな意味の分からない決め台詞があつてたまるか」

動揺はあつたが、董はそれが表面に出ないように努めた。あまり好きではない言い回しを近ごろ耳にしていなだけで挙動がおかしくなれば、疑問を持たれるのはそれこそ董になつてしまう。それは周囲からすれば董がそこで動揺する理由そのものがないからだ。董の認識している照の異常性と、部員たちが認識しているそれは明らかに別物だつた。なにかが軋む音がした。

努力が功を奏したか、董のほんのわずかにぎこちない振る舞いは隣を歩く部員の目には留まらないようだった。普段の学校生活における会話の中のちよつとした笑いも維持することができた。歩く速度も声の大きさも変わらず、どうにか部室にたどり着いて独りになれた瞬間に、董の身には疲れがどつと押し寄せてきた。閉め切られた室内の空気は乾いていて、息を吸おうとすると喉に変な感触があつて董はせき込んだ。部活の

開始まではまだ十分ほどの時間があつて、見渡せば一年生たちが自動卓の準備をしている姿が目に入る。照は窓際のほうの卓に着いて、やはり小説を読んでいた。

（……変化だと？ あいつに？）

強めの咳払いをして、董は準備をしている一年生を手伝いに歩き出した。

「なんだ、今年はヘンテコな縁にでも恵まれてんのかね」

へらへらと自身にだけ向けた薄っぺらな笑いをこぼしたあと、三尋木咏は視線を前に戻した。季節は真夏。容赦のない太陽の光が、どしゃ降りの雨なんかよりもはるかに絶え間なく叩きつける午後。空に雲は点在してはいるが、それは空の明るさを損なうことのない位置と大ききでアクセント程度に浮かんでいるといった具合だ。彼女はサイズの小さな、光を遮るためだろう和傘を肩にかけて差している。薄手の着物に和傘といった出で立ちは現代日本においてしつくりくるものとは言い難いはずなのだが、どうしてか彼女がその恰好をしているのは自然である印象が常に残った。あるいはイメージの力なのかもしれない。

咏の視線の先にはひとりの少女が立っている。外見に強い特徴があるわけではないが、どこか印象に引っかかるところがある。それは目なのかもしれない。立ち姿なのかもしれない。あるいは総合的に見た時のわずかなアンバランスさがそうさせるのかも

しれない。陽光に打たれていながら、その少女はほとんど汗をかいていないように見える。眩しそうな様子さえ見せない。あり得ない話ではあるが、少女は太陽光を無視することができるのかもしれない。

「話があんだろ？」

顔を合わせたきり一向に口を開かない少女に対して、咏は水を向けてやることにした。何も言わずにただ見つめてくるだけの少女の意図が、どうしてか咏にははつきりわかる。むしろ彼女の中では、それ以外の回答が存在していたとしたらそれは驚きに類することですらあった。咏が無言で立っているだけのわけのわからない人物に対して応じたのには理由がある。たしかに今日はインターハイの解説が終わった直後のフリーの一日だが、それを休むための日と位置付けて無意味な時間を過ごすつもりはさらさらない。こんな面白い天気の日と位置付けて無意味な時間を過ごすのは咏にとってみればそれこそ罪悪に等しいことで、つまるところ、逃げ切ることの難しそうな案件をさっさと片付けてしまいたいという考えがあった。

少女はこくりと頷いて、下げた視線をもういちど咏へと戻した。その動作には躊躇のようなものはなく、咏に対しての強い意志かその正反対の無関心のどちらかが読み取れた。たとえばスイッチのオンとオフのように、そこに中間はなかった。人が何を考えているかなどいつだって知れたものではないが、なるほどこいつは特殊だ、と咏でさえ思

わずにはいられなかった。

二人が立っているのは駅前にある立体的な広場の一角であり、夏休みということもあって人の行き来は学生を中心に多いものとなっている。普段であれば咏がそんなところを歩いていけば、人が群がるとまではいかなくとも、すこし距離を置いたところから無遠慮な視線やひそひそ話が飛んでくる。しかし今日に限ってはそれがまったくない。上品な地域にいるわけでも行きつけの店にいるわけでもないというのに、そんな状況はかなり珍しいことだった。もしかしたら数字を見ただけで熱中症を起こしたくなるような気温のせいで歩いている人たちは顔さえ上げたくなくなっているのかもしれない。咏も日傘を差してはいるものの、だからといっていつまでもこの場に立ちっぱなしで快適に過ごせるとはちらとも考えていない。夏の駅前というのは人いきれと道路や線路を行き交う交通手段の影響でどうしたって暑さと息苦しさというものを意識せざるを得ないし、また実際に多少は気温が高いのが実情だった。

「せめて日陰いこーぜ、こんなところで急に話し出されても困るしね」

そこにあつたのは問いかけに対する返答以外にはほとんど意図を伝えるつもりのないアクションと片一方だけが音声を発するというきわめて不完全に見えるコミュニケーションだった。少女がなにも言っていないのに話がある程度は長くなることが前提とされ

ていたし、和気あいあいとした会話を楽しむようなつもりがないことは二人が顔を合わせた段階から決まっていたことのようにだった。

駅前をすこし離れて住宅街のほうへと入っていくと、そこには誰でも簡単にイメージできそうな小さな公園があつた。ブランコがあつて砂場があつて、すべり台のあるどこにでもあるような公園。道路と公園の内部を隔てるように、低い柵とその手前に植込みや木や花が植わつた土の領域がある。多くの小さな子たちがアリの巣を見つけるようなそんな場所だ。夏の真ん中にあつて青々とした葉をたくさんつけた木の下にはベンチがあり、そしてそのベンチは真昼の太陽の光を遮られた陰にあつた。二人はそこちやうど一人分のスペースを空けて並んで座り、まるで申し合わせたように視線を前に飛ばしていた。公園には二人を除いて誰もいない。ちやうどお昼時ということもあつてか、主な利用層である小さな子どもたちがいないことが大きいのだろう。ときおり低い柵を挟んだ道路を車が通るだけで静かなものだ。不思議なことにセミですらこの公園にはいないらしい。

どちらも口を開かない。急ぐ必要ない真夏の真昼という特別なゆつくりとした時間だけがただ流れていく。太陽の光が強すぎるせいで、道路の向こうにある家屋の色味が強調されているような感覚が残る。いくつかの匂いが混じりあつた土の匂いとしか表

現できないものが空気を伝つてやつてくる。変わらず生物の気配は感じられない。

「あなたは私を知っている」

不意に照が発した言葉は語法としてはむちやくちやなものだった。

「ああ、知ってるよ。もしかしたらお前よりもね」

いつの間にか咏は体を前に屈めて自分の膝に肘をつけている。和傘は閉じられ立かけられている。その一方で照は背筋をまつすぐに伸ばし、軽くあごを引き、両手は膝の上に置かれている。言つてしまえば雀卓についている時の姿勢とまるで変わりがなかった。

二人の言葉には明らかに表に出てきていない部分でのやりとりがあつた。会話としては支離滅裂であり、親睦を深める目的も疑問を追求する情熱もない。しかし彼女たちにとつてはそれでよかった。それらのものは互いに必要とされていなかったのだから。

「お前みたいなヤツはね、程度の差はあれどこにでもいるのさ。それでもお前は問題だけだ」

「問題かどうかはどうでもいい。董に手を出さないでほしい」

からかうような調子の咏に対して、内容を問わないことにすれば照の返答は毅然としたものだった。視線はずっと前へと維持されたままだ。まるで閉じられたような空間となつている公園の空気をただ二人の短い言葉だけが震わせる。その震えもほんのわ

ずかな間だけであり、彼女たち以外には誰にも認識できない。公園には二人だけしかないのに、どうしてか彼女たちの会話はかならずいくらかの間を挟んだ。あるいは言葉のやりとりのあいだに高速で頭を働かせているのかもしれない。それか言葉のあいだの時間が何かしらの意味を持っているかのどちらかだ。そう考えなければ論理的な説明はつきそうにない。

「なあ宮永、お前さ、弘世ちゃんの意味わかってんの？」

「董は私に正しく立ち向かえる存在」

「おいおいよせよ、あの子はお前に喰われるためにいるんじゃないんだぜ」

「あなたのもとにいても同じこと」

それまでの照の言葉と違ってそこにはわずかな怒気が混じっていた。語り口はいつも通りの平板なものではあったが、確実な違いがそこにはあった。日陰のせいとは言い切れない冷たい空気がかすかに滲む。喉は肘をついたままで、脛をほんの少しだけ下げたまま遠くを見据えている。隣の怒気などどこ吹く風といったように平静を保っている。照は照できれいな姿勢を維持したままで厳しい視線を前に向けている。二人からはある種の対照性も感じ取れるが、反面どこか似通っている部分もあるように思われる。もし二人を真正面から映像として捉えたなら、二人のあいだに文字を挟んで何かのポスターに使えるそうだ。そういう意味での訴えかけるものがある。誰も見ていないか

らそのような仮定に意味はまったくないが。

一陣の風が吹く。太陽に照らされて乾いた地面の砂が波打つことで風の軌跡がはっきりとわかる。音を立てるものが他にないからか、砂がさらさらと心地良い音を立てるのが聞こえた気がした。二人が公園に来てからまるで吹いていなかった風はそのぶんだけよく目立った。低い柵の向こうを車がゆっくり走る。排気音を抑えた車種のように、空気は震えても音はあまり聞こえなかった。しかしそれでも人の姿は見当たらない。

「どうして董に関わるの？」

「そりゃ未来ある若者が潰れていくのを黙って見てるわけにはいかねーからさね」

「嘘」

それを聞いて咏はからからと笑った。短い笑いだった。

言うだけ言ったと判断したのか照は黙っていた。一人ぶんだけスペースを空けた隣には変わらず咏が座っているが、先ほどまでと明らかに変わって表情がほころんでいる。楽しさに類することを見出したのだろうことには疑いがないが、その正確なところを導くのは不可能だった。彼女は彼女にしかわからない理由で笑い、そして気分を良くした。きつと説明を求めたところで、そしてそれに彼女が答えてくれたとして、それを理解することは誰にもできないのに違いない。その意味でコミュニケーションの不全

はどこにでも顔を出す。

物思いに耽つているとも取れる機嫌の良さそうな表情でそれなりの時間を過ごす、
咏は出し抜けに立ち上がった。足を踏み出した先は眩しい日なたで、差した和傘が振り
向いた彼女の顔に陰を作った。南中を過ぎてわずかに光の角度を変えた太陽が差し込
んで、咏の着物の裾だけを奇妙に明るく映えさせる。その姿は公園や住宅街を驚くほど
に背景へと変えて、三尋木咏という存在をくつきりと描き出していた。

「なあ宮永、アタシはな、お前が過去未来とどれだけ喰う喰ったなんて興味はない
だ」

でもな、と咏はゆっくり言葉をつなぐ。

「お前さ、そっち側から、日陰から出てくるなよ？ こいつは忠告で、警告だ」

和傘の陰の奥に童女のような笑みが浮かぶ。重たい言葉とは似ても似つかない表情
だが、そこには有無を言わせぬ何かがある。夏の青空が目痛い。現代日本にそぐわな
い和装に違和感を見出すことは未だにできない。子どものいないブランコも、子ども
いない砂場も、子どもものいないすべり台も光に焼き付けられて本来の意味を失ってし
まったように見える。

「もう一度言つてやる。アタシはお前を知っている」

「……………」

「そして弘世ちゃんは日陰にいちやいけないのさ、だからアタシが引きずり出す」
それじゃあね、と身を翻して咏は公園から出て行った。それから十秒も経たない辺りで、昼食を終えたのだろう子どもたちが照の残った公園へと駆け込んできた。わあきやあと楽しそうに、また独自のルールで遊び始めた子どもたちの顔は一樣に剥き出しの感情を湛えていた。五分前の公園の風景と比べて、同じ場所だとはとても信じられないほどだ。木陰のベンチに座っていた照は立つつもりがないのか、きれいな姿勢のままだった。

その日、照はふと気になった雀荘で、淡と出会うことになる。

自室の卓上カレンダーを眺めながら董はため息をついた。なにか後ろ向きな思いがあつてのことではない。ただの呼吸の溜めとしてのものだ。しかし思いを寄せる対象は存在している。目の前のカレンダーにある日程だ。

今年の秋はうまく祝日と土日が重なって、シルバークウィークと呼んで差し支えない連休が生まれた。もし部活動に入っていない、あるいはゆるく部活動を楽しむような生徒たちであれば、期待に胸を膨らませながらどこでどうやって遊ぶかの計画を立てるだろう。その一方で真剣に目指すところを設定している部であれば、その連休を使って実になるトレーニングを積むことを考えるだろう。幸か不幸か宮永照という決定的な存在を抱え込んでいる白糸台高校の麻雀部はその例に当てはまらなければならなかった。未踏たる団体戦三連覇を期待され、そしてそれを目指していく以上、彼女たちの選択肢はひどく限定されていた。しかしそれに対しての不満はどこからも出てはこなかった。そういう段階はもうとうの昔に超えてしまっている。

その連休には他校を、それも二校を招いての、合わせて三校での合同練習に近い練習試合を行う予定が組まれていた。年齢の割に冷めた見方をしていけると言うべきか、董は練習試合を文字通りただの練習の機会としてしか捉えていなかった。しかしそのぶん内容については強い関心を抱いている。なぜならそれは彼女にとつては格好の機会だからだ。いつもは部内での慣れてしまった相手との調整となるが、練習試合は見慣れない新鮮な打ち手との手合わせが基本となる。とくに董のような特殊な面を備えた戦い方をする者にとつてはサンプルはあればあつたほうがいい。彼女のスタイルから考えればそれらの経験はすべて積み重なつて董を強くする。なにかに意識を集中しているとは言えない目を、たった一度のまばたきで切り替えて、董は人前ではほとんど見せたことのない満足げな笑みを浮かべた。

秋の長雨という言葉があるように、梅雨にこそ及ばないが秋にもそれに似た空がぐずつく時期がある。台風も絡めば被害の二文字がちらついてくる程度には厄介な気候で、そのせいで董は周囲が口を揃えるほどには秋が好きではない。そんなことを考えているとあれこれ理由をつけているんなものを嫌っているような気さえしてきてうんざり

してしまうのが常だった。そんな完璧主義的な傾向がもともとあったのか芽生えてきたのかはわからない。誰が悪いわけでもないのは間違いないのに、せっかくの練習試合を雨で迎えるというのは相手方に失礼を働いているようにさえ董には思えるのだった。風の無い中を細く長く降る雨は、地面が空から白い糸を引き込んでいるようにも見えた。目につく木々の葉はもうぐつたりと濡れて滴を次々と垂らし、木陰までを色濃く染めている。校門から昇降口までのあいだにはいくつもの水たまりができており、そこを絶え間なく弱い雨粒が打ってやわらかい波紋を広げている。傘があればそれほど濡れなくて済むが、もしも車が近くを通ればイヤな思いをしそうだなと董はぼんやり考えていた。

窓は開いていて、そこに頬杖をついて座っている董の姿はさながら一幅の絵のようだった。視線は外を向いている。部室の中にはもうすっかり準備が終わって、いつでも練習試合の相手校を迎えることができる状態になっている。だから董もとくに部員たちに指示を出すことなくぼんやりと時間が流れるのに任せることができた。室内の部員の数普段よりも少ない。というのも他校を招くにあたり、部員全員を出席させると卓の数が足りないどころか人口密度が上がり過ぎて十分な身動きが取れなくなるからだ。その点は相手校にも了解を取っており、先方も人数を絞って来校するという通達を白糸台側も受け取っている。かみ砕いて言えば各校の精鋭が集う練習試合になるというこ

とであり、それだけに選抜されたメンバーは目に見えてモチベーションが高い。目に見えて、という意味だけで言えば二人だけ例外が存在していたが。

すこし遠くの道路を走る二台のバスが董の目に映った。東京の高校という情報が与える印象とは違って白糸台高校は山の中腹にあつて交通の便が良いとは言えない。それに今日は細いとはいえ雨まで降っている。わざわざ出向いてきてくれる学校を相手に歩いてこいというのは筋が通っているとは言えないだろう。もちろん董が出すわけではないのだから、いくら彼女とはいえどこで乗せたのかまではさすがに知らない。しかし学校側からバスを出すところまでは知っており、その二台のバスが相手校を乗せたものだということはすぐにわかった。なにせ山の中腹だ。そんなところを登ってくるバスなんて他に理由を探すほうが難しい。

「遠山、整列だけさせておいてくれ、部室に着いたら挨拶がある。照、お前は私と来い」
「ねえスマレ、私は？」

「お前も整列だ。できないなら力尽くまで帰らせる」

「えー？ オーボーだー！」

董と照を先頭に女生徒の列が昇降口を抜けて廊下を歩く。二人の後ろにはそれぞれの高校の代表が先頭、そしてそれぞれの部員たちが一列ずつ後をついてきている。顧問

や監督などの引率者たちはまた別の話があるようで、校舎に入ったすぐあとに別れている。全国でも有数の麻雀部員たちが作る列は選抜されているということもあって、人数で言えばクラス単位の列よりも数が少なくらいだった。自分の通う白糸台に他校の生徒がいるのもそうだが、きちんと整列して部室を目指すというのは董にはなんとも奇妙に思われた。たしかに外で行動する際には規律を重要と考えているが、さすがに校内でまでそういう振舞いは意識したことがない。董はなんだかここが本当に白糸台高校なのか疑わしくさえなり始めていた。

そんなうすぼんやりした思考が頭を満たしていく中で階段に差し掛かろうとして、見慣れた暗く煮詰めたような赤色が視界の端をかすめた途端に董の思考が切り替わった。階段を上がりながら照に一瞬だけ目をやって振り返り、軽度の失点を詫びるように話しかける。

「そうだ、辻垣内に愛宕、すまないな。こいつがまともに挨拶もしないで」

「んー？ そんなん気にせんでええやろ。どつちかっていうと、なあ辻垣内」

「そこで私にパスを出すのは気に食わないが、まあ言いたいことは同じなんだろうさ」
当の照は歩くペースこそそ集団に合わせているが、そこで展開されている話などどこ吹く風といった様子でひとりだけ視線を別の方向に向けていた。自然に考えれば聞こえていないはずはないのだが、あるいは一年生の夏の段階で注目を集めすぎたせいで周囲

で自分の話をされることに慣れ過ぎてしまったのかもしれない。

「むしろ私たちは宮永のその態度を歓迎してるんだよ、弘世。試合モードってことだろう」

「……そう言ってもらえて助かるよ、本当に」

「にしてもお前ほんま話すことまとまっとんなあ、あとでおやつちよつと分けたるわ」
「いらん」

真剣とまではいかないまでもまともなやり取りだと思っていたものが突然に冗談みたいな方向に流れて、董はこらえ切れずに吹き出してしまった。麻雀を打つ姿にしろインタビューに答える姿にしろ凜々しい印象を残す辻垣内智葉がこんなにコミカルな一面を見せるとは思ってもみなかったからだ。あるいは相手を務めた愛宕洋樓の影響があったのかもしれないし、もしかすると照のように外からは想像もつかないような一面を持っているのかもしれない。やり取りを見てみるとどうやら両校の代表はそれなりに付き合いがあるらしく、少なくとも先の会話が当たり前のように交わされるくらいの中ではあるらしい。考えてみれば中学時代から全国のトップとして鎬を削り合ってきただろう二人だ、出くわす機会などいくらもあったに違いはない。それを考えると董は自分の中学時代を思い出して、彼女たちがすこしうらやましくなるのだった。

笑ったかと思えば途端に羨望の眼差しを向けてくる董を見て、二人が顔を見合わせて

から不思議そうな表情を返してきたのは自然なことだろう。外から見れば、もちろん部内においてもそうだが、董は年齢にそぐわない落ち着きを持った見目麗しい女性と呼べる存在だ。こうやってころころ表情を変えるなど想像しにくいものがあるし、実際にイメージに沿った表情の変化以外はそうそう見られるものではない。董にとってみれば彼女たちの普通の高校生のような姿は、董の普段の振舞いを壊すほどに中学生のころの麻雀の象徴であり、強さの象徴であった。

まるで普通の高校生みたいだ、という捉え方によつてはあんまりな考えが頭をよぎったとき、董はもう一つ彼女たちに言っておくべきことがあることに気付いた。どうやら自身で思っているよりは緊張しているらしい。

「すまない、ひとつ忘れていた。ひとり中学生がいるが部員と同じと思つてくれないか」

「おお、ええなそれ。楽しみがいつこ増えたわ」

「お願いをした立場で言うのもおかしいが、それでいいのか？」

「言つても白糸台で囲っておくくらいにはデキるいうことやろ？ それで十分やつて」

「こちらとしても構わない。どうせ次の夏には出てくるんだろう？」

「おおらかというのとは違うのだろう。もちろん練習試合には普段とは異なる環境で

の対局による成長を期待するというのが基本的な目的として置かれるが、当然ながら互いに情報収集を行うという側面も備えられることになる。いま話をしている愛宕洋樓、辻垣内智葉をプレイヤーとして見るなら個人における最強クラスに属していると判断するべきであり、その打ち回しを研究することは鍛錬にも對抗策を練ることもつながる。逆に彼女たちからすれば照もその対象に数えられる。当然ながらそれだけでなく臨海女子と姫松という二つの高校そのものもレベルがずば抜けて高く、データを取れることは非常に大きな意味を持つ。場合によってはそちらのほうに主目的を置いてこの練習試合に参加している部員もいるかもしれない。強豪校どうしの合同練習はプラスマイナスがかなりのレベルの相似形を成すからこそ成立するのであって、逆に言えば差し出せるものがなければ参加する資格すら与えられない。三者ともがすでに次を見据えているのは強豪と呼ばれるにあたって当然のことだが、秋に入ってそれほど経っていないこの時期に果たしてそこまで徹底できる高校がどれだけあるかと問われれば、それにはほとんどないと答えるしかないだろう。そこを徹底できるから強い。これが結論である。

三局を終えて董は周囲を見渡す。どちらかと言えば早めに終わったようで、空いた卓もあるがまだ進行中の卓のほうが多い。とはいえ対戦相手ができるだけ散らしたいという意図からすぐに卓を埋めるようなことはない。別に対戦表を組んでいるわけではないが全員が一斉に対局を始めることにしようと思前との打ち合わせで決めている。基本的なレベルが高いのだからどの卓に入ったところで間違いなく得られるものはある。現に董も感心させられる打ち回しにすでに出会っており、早くもこの練習試合の価値に触れたと確信していた。

早めに対局を終えれば必然としてどこかの卓を覗きに行くことになる。これだけ豪華なメンバーが揃っているのだからそうしない理由もなかなかないだろう。董の目に入ったのは二つの卓に先に対戦を終えた人が集まっている光景だった。似たような情景をいつか見たことがあるな、と一瞬だけ目をそらした後で董は状況を確かめることにした。本当を言えば確かめるまでもなくこれだけの注目を集める卓など簡単に想像がつく。どうせあととは組み合わせの問題といったところだ。

友人と楽しむ麻雀と違って競技麻雀とは静かなもので、基本的に対戦中にリーチやポン、チーなどの宣言以外は発声を慎むという暗黙の了解がある。なぜならそこが変わってしまえば、いわゆる三味線を筆頭とする別の技術が生まれてしまうからだ。したがって人の集まっているその二つの卓も静かではあるのだが、明確に違うと断言できるほど

に雰囲気は違っていた。

かたや氷室に押し込まれたような、肌が痛むほどの鋭い空気。かたや戦意が物理的な力を手に入れたかのような、汗もにじむほどの熱のこもった空気。かたの違う息を？みたくなるような戦いが、体の向きを変えるだけで見ることのできる距離で二つも行われている。公式の試合もかくやの、いや練習試合で気負うところがないからこそその全力の集中なのか、いまここで目の前の相手に勝たなければならないという強い意志が二卓の八人からひしひしと感じられる。

董が驚いたのは照と辻垣内、淡と愛宕の相手をしているそれぞれの白糸台の部員たちの気概だった。普通どころかある程度腕に覚えがあるくらいではどちらの卓でも委縮してしまうのが自然なはずだった。それがあの強烈な空気にぶつかって、それでも勝利を目指して必死に思考して戦っている。その姿を見て董は自分を恥じた。自分と照がこの部を背負っているのだと独りよがり思い込んでいたことを痛感した。たしかに照は一年の夏からスパーペースであり、董自身も二年生である今年の夏に団体デビューを果たした。素直に考えればその二人を次のレギュラーとして置いて、そして残りの三席を争うようなかたちになるだろうと思いついて、そんなことは誰にも保証されていないのに、部長になったことも手伝ったのか、自分が部を引っ張るつもりになっていたことに董は気が付いた。とはいえ彼女もまだ十七歳の少女でしかないのだ

から、考えが及んでいない部分があるのは当たり前のことでもあった。そのことに対してどういった評価を下すかは個人の裁量に委ねられるだろう。

(周りを見るような戦法でやっていこうと考えていたらこれだ、先が思いやられるな)
頭の中で強く反省をしてすぐに意識を麻雀へと戻す。どちらの卓も局面は終盤だったが、董は淡と愛宕洋榎が向かい合っている対局を覗いてみることに決めた。淡が強いことなど百も承知だが、たとえひいき目に見てもあの愛宕洋榎と競る段階にあるとは思えない。もちろん半荘ひとつで実力など見定めることなどできないのだから、いま董が目になっている状況も決してあり得ないということにはならない。それでも和了ひとつでひっくり返せるところまで食らいついているという違和感から逃れられなかったからだ。

盤面全体が拮抗しているとは言えない。戦意の話は別にしてももう一位二位と三位四位の区別はついでしまっている。ひっくり返すなら最低でも倍満からで、ラス親を迎えている白糸台の部員がトップに直撃でやっとうといるところだ。同卓している相手を考えれば怖くなるほどの幸運を連れてこなければならぬ。自然、トップ争いは愛宕洋榎と淡の二者に絞られる。優位はもちろんトップ目の愛宕で間違いはない。なんでもいいから和了ってしまえばそれで終わりだ。しかしそこには淡に期待したいと思っている董がいた。突然やってきた上に割と好き放題にやっている困った後輩だが、もしか

したら仲間意識のようなものが芽生えているのかもしれない。

たった一局だけの観戦はあっさりと終わった。波乱もない。強い者が勝つという当たり前といえども当たり前の最後だった。そもそも勝利への条件が違うのだから愛宕が有利で、それを物にしたというだけの話だ。残念な気持ちも多少は湧いたが、それも長くは続かなかった。半荘ひとつの勝った負けたで騒いでいるようでは競技としての麻雀など続けるのは不可能だ。試合の終わった自動卓のラシヤをすこし見つめたあとで視線を上げると、愛宕が淡に話しかけている光景が目に入った。

「な、普段の練習でもそんなこっすいことしとるんか？ それやとキヨリ測られへんで」

「は？ よけーなお世話だし。私が最強なんだからキヨリとかどーでもいーし」

「わからんやつちゃん、筋はええ言うとるんや。出し惜しみは勝たれへんやつと言いついで」

董にはその言葉の意味がよくつかめなかったが淡にはピンと来たようで、いつものへらへらした態度がそれとは似ても似つかない表情へと変わった。敵意に近いものを飛ばしてはつきり睨みつけている。すさまじい胆力だと思つた直後に董は自分が見当違いな感想を抱いていることに気が付いて、一秒に満たないあいだ目を閉じた。いま優先

されるべきは麻雀の実力に関連する事項であつて、胆力はそこからは一歩退いた位置にある。目の前で交わされた会話をもう一度並べれば、つまり愛宕は通常の淡が手を抜いていると言ひ切つたのである。そして淡はそれをほとんど認めるような態度を取つた。董は吐き氣が押し寄せるのを感じ取る。ねずみ色をした感情がその正体を見せたことも間接的には関係していたかもしれないが、何より自分ではこれまでの時間があつてなお確信できなかつた。それを愛宕が一度の対局で見抜いたことに対するものだつた。

白糸台の部員に対しては自分から積極的に関わつていた淡が、逆にぐいぐいと話しかけられることで軽い反発するような応対をしている様子が目の端に映る。これまで董が見たことのない彼女のコミュニケーションの一幕だつた。しかし董の目の中心は何も捉えてはいなかつた。中空の存在しない不規則に動く点をただ追いかけているだけだ。何も知らず、勝手な思い込みだけを引きずり、自分のいる世界を測つたつもりになり、そうして独りでダメージを受ける。ここまで自然に頭に浮かんで来て、思わず董は笑つてしまつた。

いつかの春に怪物を見たときと同じじゃないか。

董が自身の殻を破るために達成しなければならぬことを自覚したのはこの時だつた。

「ねえ董、このあいだの合同練習はどうだった？」

数学の教師が体調を崩して珍しく一時間目から自習になったのだが、だからといって騒ぐには高校二年生というのは歳を重ね過ぎていたし、そのうえ天気もどんよりとして気分が上がりたくない。たまに吹いてくる風さえ湿っていて、クラスメイトの多くは自分の席で何をするということもなく静かにしていた。残った少数派さえ退屈をしのぎに図書室へ向かうくらいのものであった。照が不意に声をかけてきたのは、そんな灰色の時間だった。

声が出たからと董がそちらへ顔を向けると頬杖をついた照の姿があった。てつきりこういつた時間を読書のためのもので捉えているだろうと思っていた董はわずかといえ驚いた。またその具合もイメージとは離れており、それはたとえば董がよくやるような軽く曲げた人差し指をすこし顎に当てるといったような上品なものではなく、手のひらにべったりと頬のあたりを預けるようなものだった。したがって頬のうすい肉

が潰れるのだが、照の場合はそれが驚くほど似合わなかった。彼女は相変わらず表情を変えないから、本来その動作に付随してくるはずの感情の動きが欠落していた。彼女を相手にそれを説いても仕方がないのだろうが、普通なら頬杖をつけて友人に話しかける時に素直に笑いかけるのが自然だろう。または不機嫌を示すような視線の外し方や声の出し方というものがあるはずだ。しかしもちろん宮永照にそれらのものはなかった。

「……収穫があつたか、ということか？　そういう意味ならいい練習だった。勉強になつたよ」

すらすらと出てきた董の返事は彼女自身が本当にそう思っていることを窺わせた。実際にすさまじくレベルの高い合同練習であつたことは疑いようもなかった。そこに彼女の収穫があつたという言葉があつたなら、それは真実なのだろう。そもそも董は元来そういうところでウソをつくタイプでもない。彼女は根本的に真面目なのだ。

頬を潰した少女は無感動に、そう、とだけつぶやいた。ノートや教科書のページをめくる音やペンを走らせる音くらいしか聞こえない静かな教室の中なのに、彼女たちの会話は二人の間だけにとどまった。まるで他のクラスメイトが顔を失くしたか、もしくは逆に董と照の二人だけが顔を失くしたかのような奇妙な空間だった。誰も消しゴムひとつ落とさなかつた。

「うれしいことを言われたよ、辻垣内にも愛宕にもな」

董は視線をふいと黒板のほうへ戻した。表情からではなかなか考えにくいと意外と照れているのかもしれない。照の影響があるかは定かではないが、董も高校生とは思えないほど感情の読み取りにくい少女である。表情自体には変化があるぶん、もしかしたら照よりも感情の機微といった点では董のほうが判断がつきにくいということさえあるかもしれない。もちろんそんなことを比べたところで何にもならないが。

「どんなことを言われたの」

「リップサービスでないことが前提だが、私にも警戒される程度の実力があるそうだし」
普段がハスキーな声をしているだけにほんの少しとはいえ弾んだ調子は特別に聞き取りやすい。友達と楽しい話をしているのとはわけが違う。彼女の内心は推し量りようがないが、感情の発露を押し殺そうとしているようにさえ見える。しかし立ち止まって考えてみると、董からすればそれは無理からぬことなのかもしれない。なにせその声をかけてくれたのは董が中学時代にどうしようもなく高い位置にいると感じていた相手なのだから。当時は凶悪とすら思えたあの領域に踏み込みたくて鍛錬を積んできたと言っても差し支えはないのだから。しかし董はその憧れを誰にも話していない。彼女は自分を離れた位置から見ることをできるから、弘世董が同世代の代表レベルとはいえないから認められたことにはしゃぐのは不自然だと瞬時に理解していたのかもしれない。

前を向いた董を照が頬杖をついて覗き込む構図は変わらない。董は自習となれば本
当に教科書とノートを出して自学自習に励むし、照は違つていつもならそれを自由時間
と受け取つて本を読む。しかし今日はお互いがいつもと違つていた。董はノートと教
科書こそ出してはいるものの明らかに自習に身を入れていないのが一目でよくわかる。
ペンケースから何も出ていないのはこれ以上なくらいの証拠になるだろう。一方で
照は本を出さずにただ手のひらに頬を寄せたままにしている。ただの高校生として見
ればそれは当たり前の光景だったが、彼女たちを相手にただの高校生という形容はいさ
さか無理があるだろう、失礼かもしれないが。

顔を失くした教室は天気や気温も相まつて、時間が経つだけ陰鬱になつていった。声
を投げかける対象に自分が含まれているというそれだけで数学の授業が懐かしく思え
るような空気が室内を満たしている。気が付けばそうなつていたというだけで、クラス
メイトの誰が悪いというわけではない。強いて言うならそういう空気が存在している
と認めてしまったことそのものが悪かった。空気や雰囲気は存在を認められれば実体
化する。董は照を通してそのことを同世代の誰よりも知っていたが、かと言つて対抗す
る術を持つてはいなかった。

「お前はどうかだつたんだ、合同練習」

「楽しかった。ああいう人たちと一緒に打てるのは貴重だと思う」

「……？ まあ、あれだけ強いのはそうじゃないと思うが」

「そういうことじゃないけど」

意図するところが合致していないのは明らかだったが、それ以上詰める気は董にはなかった。会話の相手である照には言葉を尽くそうとする意識がもともと希薄だからだ。何かを話したあとに追加で言葉を重ねるといことがないから、わからなければそれでいいと彼女の態度は常に主張しているように見えた。

集中する気になれないからか、董はつらつらと照の言動について思いを巡らせていた。公の場に立てば論旨や要点をはつきりさせた発言をしているぶん、なおさら普段の落差がひどいように感じられるのだと結論を導いた。逆に部内では、とくに後輩からということだが、足りない言葉を勝手に補足して人格化が進行しているくらいがあるが、さすがにそこまでは董の領分ではない。一個人をそのように扱ってしまえば手出しのできなくなる部分が生まれてしまうが、その存在が一個人なのだと言見することは他人から学ぶべきではないというのが董の考えである。したがって董は照と他人との付き合い方にああしろこうしろと口を出したことは一度もない。それに部長とはいえまだ女子高生の身分なのだ、そういった部分の世話を焼けるほど人生に習熟しているわけもない。

「ねえ、またこういう練習試合がしたいな」

「それは私じゃなくて監督に言え」

「そう」

「——という話を照としたんだが、お前はどうか？」

「ちよームカついた。とくにアタゴ？　とかいうの、あれゼツタイ私が倒す」

董が淡にこんな話題を振ったのは、偶然にも練習の合間にちようど淡と二人になる機会を見つけたからである。お互いに似たようなタイミングで卓を離れ、同じように窓際に位置を取ったのだ。淡はいつものように椅子に座り、一方で董は腕組みをして立ったまま窓に背を預けていた。さて董が合同練習のことを話題に出した理由のひとつには、目の前のこの少女が先日の合同練習を通じて何を受け取ったのかを知りたかつたというのもあつた。さらにもうひとつには単純にその面白い思考回路がどんな答えを返すのか気がなつたというのがあつた。そして返ってきたあまりにも　　「らしい」　　回答に、思わず董はニヤリとしてしまった。

「ちよつと！　スミレなんで笑つてるの！」

「悪い悪い、別に面白いってわけじゃないんだ」

まあまあとなだめながらその一方で董は淡の返答をうれしく思っていた。それは宮永照以外のプレイヤーが彼女の意識に上がることのできる証左になっていたからだ。そして勝とうという意識を外に對して明確に意思表示したからだ。強くはあつたがどこかぼんやりとしていた大星淡がここで化けるきっかけを得たのかもしれないと思うと、白糸台高校の麻雀部部长としてはどうしても頬が緩むのを抑えられなかった。確実にあの合同練習は参加者にとつての刺激になったのだ。あるいは自意識に手痛い一撃を食らつた董にとつてさえも。

部活が始まるころには朝に比べて雲の隙間も見えてきていた。今では雲と青空の比率がずいぶんと動いている。風こそまだ湿つたものだったが、やはり目に見える空の色が違つていれば感じ方も多少はマシになるのが人情というものである。董も朝に比べればいくぶんかやる気を取り戻していた。

あらためて部の様子を眺めてみると意外なことに全体として気合が入っているようだった。董のロジックからいえば合同練習に参加できた部員に気合が入るのは自然だったが、そこを外れた部員がやる気を見せるのは歓迎すべき事態だが理由がわからなかった。次回があれば参加したいと考えてのことだろうか、と董が大外れとはいかないものの当たりとも言えない予想を立てていると横から声が飛んできた。

「強いヤツと対戦できなかつたー、つてだけで置いてかれたんじゃたまんないもんね」

「どういう意味だ？」

「まだみんなレギュラー狙ってるんでしょ。何もしないで黙ってたら負けちゃうんだから」

「……にしても私の考えてることがよくわかったな」

「カンタンだよ、スマレは部長さん過ぎるからね」

意識したからといって思考の基準がすぐ変わるわけもなく、また自身を団体レギュラーとして棚上げしながら考えていたことに気付いて董は内心で呆れた。この夏にインターハイに出場したことも先日の合同練習で憧れの二人に警戒対象と言われたことはいったん忘れないといけないな、と自戒した。そしてその直後に淡の言葉を振り返り、それが周囲に目を配っていないならば不可能だという事実気付いてはっと目を見開いた。

とくに言葉が返ってこないのをどう受け取ったのか、淡はため息をついてぼつりとこぼした。その顔は珍しくいつもの快活なものでなく、呆れ半分と冗談半分に見えるものだった。

「もつとさ、ジコチューでいいんじゃないの、間に合わなくなっちゃうよ？」

「お前の言うとおりなのかもな、ちょうど似たようなことを考えていたんだ」

「へー、なんか意外かも。私は部員のためにー、とか言うのかと思ってた」

「ま、合同練習より前ならたぶんそう言つてたんだらうな」

「いいね、期待してるよ、スミレ。もっともっと強くなつてよね」

「……お前はどの立場の人間なんだ」

わかりやすいため息をついて返すと、にんまりと口角を上げた淡の顔がそこにあって、なんだか抵抗のしようもなく董も笑つてしまった。ふわりと力が抜けた。もちろん肩肘張る立場であることに間違いないのだが、それ以前に自分は一人の雀士なのだよと心から思うことができた。自分はこれからもうひとつ強くなれると根拠なく確信できた。それはきつと、技術だけでなく。

どちらも何も言わないのにそこでぴたりと会話は終わつて、互いにもう次の対局へと意識を回していた。他の部員は卓に着いているか観戦しているかのどちらかしかいなかったため、この貴重なやり取りの存在を知っている者はいなかった。董は自身では氣付いていないが、一人では堂々巡りしかねない問題をこの一幕で通り抜けていた。その意味で大星淡は確実に特別な存在であった。弘世董は麻雀部部員にとつてあまりにも頼れる存在であり過ぎたし、宮永照にとつては董が董であるという事実さえあればそんなことなど些細なことではしかなかった。

冬が近づき、そしてその後ろに続く季節がゆつくりと歩を進めていた。

二二四

いくら天才と称されていても人には違くない。人の身であればこそ落ち込みもするし、どうにか気を紛らわせる必要もある。高校生のころはまるで縁のなかつた缶コーヒ―を片手に戒能良子は天井を眺める。別にそこに何かあるというわけではない。目に過度の刺激を与えないようにカバーをされた電灯と、おそらくデザイナーの仕事によるのだろう天井があるだけだ。

(言葉としては理解しているつもりなんですがね)

もはや焦点を合わせる気もなくなつて、ただ宙に意識だけを泳がせる。視界がぼんやりと滲んで何もかもがあいまいな色の世界に変化する。背中を壁にもたせかけて、ときおり深く息を吸う。太陽から遠く切り離された屋内であるせいかな、空調が作動していると知っているにもかかわらずどこか肌寒く感じられる。ぼつりぼつりと浮かんでは消える思考の切れ端を追いかけてやうともせずには彼女は姿勢を保っていた。

やがて指先に鈍い痺れを感じて、拗ねる時間も終わりかと良子は一度まばたきをし

た。これ以上引きずるようでは次に悪影響が出かねない。プロとして活動している以上は最高のパフォーマンスを発揮できるように努めるべきであるというのが彼女の考えだった。

かなり頻繁とはいえせつかくの遠征、おいしいものくらい食べなければ損かと考えてスマホで検索していたところに不意に声が飛んできた。それまで静かだった空間にはまったく似合わない、場違いなほど楽しそうな声。

「ようよう戒能ちゃん、なんだこんなどこにいたのかい？」

「三尋木プロ、そちらこそどうして」

良子からすると今もつとも顔を合わせたくない人物だった。なにせついきさっきの対局で叩きのめされた相手である。それを良子が意識していることを知ってか知らずかいつもの調子で接してることがかすかに彼女の癪に障る。

「どうしても何も晩飯でも一緒にと思って探してたらまさか廊下とは、わかんねーもんだね」

「いやいや三尋木プロ、私たち先ほどまでコンピートしてましたよね」

「そいつがどうかしたのかい？」

咏の純粹に疑問に思う声は、理由として不十分どころか成立している点を探ることさえも困難であるかのように響いた。三尋木咏がファンを集める要素のひとつにその言

動が挙げられるが、これは良子には理解が及ばない部分の話だ。謎は募るばかりだがその内容が真剣なのかからかっているのかわからないという点も評価されている。しかし実際に相対するとなるとこれほど面倒なこともなかなかない。テレビの向こうだから真意がつかみにくいというのではなく、本当に面と向かってさえつかみどころがないのだ。良子の見る限りでは、表情と感情と言動と思考が一致した場面など見たことがない。現に今でさえ単に食事に誘いに来たのか、あるいは他の目的があるのかの判断が下せない。しかしそれ以上に三尋木咏が危険なのは、日頃から彼女にそういった印象を抱いていたとしても直に接している時には警戒心を持ってないというところにある。もしかしたら神経を麻痺させるなにか特別な毒のようなものを持つているのかもしれない。

いざ咏に先ほどまで対局していたことがどうして理由になるのかと返されてしまうと、良子もそれを根拠とすることに自信が持てなくなつた。プロとして対局しているのだからプライベートで敵対する必要がどこにあるという誰でもたどり着ける考えに彼女が行きつかないわけもなく、良子は空いた手を額にやって軽く頭を左右に振つた。

「……いえ、すみません。なんでもありません」

「アタマ良いのはその辺に転がってるけどさ、戒能ちゃんを加えて消化が早えーよな」
「ソーリー、少し意味が……」

「若けーのに感心だね、って思ってるってことだけわかってくれりゃいいよん」

満足そうにふふんと鼻を鳴らされても、と良子は思う。いまの会話、とくに自分の発言に感心するところなどあっただろうかと振り返ってもそんなものは見当たらない。まさか心の中を読むなどという芸当ができるはずもあるまい。もしもそんなことができれば麻雀ほど楽しみを失くすゲームもないだろう。自分に話しかけてきたのはその麻雀のプロ、よつてその線はなし、と良子は結論づけた。

「あ、これ食べたいってやつあるかい？ モノによつてはいい店知ってるぜい」

ふいと視線を投げると窓の外の光は線になつて後ろへ流れていった。店名を掲げた看板も距離が近ければ文字としての体を成せずに姿を消していく。だからといって遠くの看板なら読めるとそう単純な話でもない。東京都心は所狭しと建物がひしめき合つていて、車から見ようと思つても看板など一瞬で物陰に隠れてしまう。とくにそこにこだわりのなかつた良子は視線を前に戻し、車内ではもつとも存在を主張している料金メーターへと目をやった。どうやらまだそれほど距離を走っているわけではないらしい。どうやら自分を食事に誘つてくれたプロの先達といると調子だけでなく時間感覚も狂うようだ、と良子は料金メーターから目を切った。

「タクシー、ですか？」

咏に導かれて着いた先は試合会場の裏口で、そこに何の変哲もないタクシーが待つていたのを見て思わず良子の口から言葉がこぼれた。彼女の反応に不自然なところは何もない。そもそも選手専用の地下駐車場があるこの会場で、わざわざ三尋木咏ほどのプレイヤーがスタッフでさえ使うような普通の裏口を使うだろうか。彼女であれば気の利いた車のひとつでも乗ってきていてもおかしくないというのに。

冬空はすっかり夜が支配して、つめたい空気は日中より透明に感じられる。裏口の向こうの咏の姿は、タクシーのライトを背景にしてシルエットの縁を妖しく光らせている。打掛を羽織った姿が艶めて見えるのは自分に日本人の血がすっかり流れているからかもしれないと良子はふと思う。逆光で運転手の顔だけが見えない。残りのすべては、咏も風景もタクシーの外装すらも不思議なくらいによく見える。コートの内側に冬の夜の外気が滑り込んで良子は身を震わせた。

「餅は餅屋ってね。車で移動ならタクシーが最善つしよ」

「ええ、まあそうですね……。それならチームの送迎車でもよいのでは？」

「おいおいプライベートな時間だぜ？ そんな野暮なの使いたくないってーの」

けらけらと笑いながら良子の意見を躲す。言われてみればその通りでしかない。ま

してやお誘いを受けている相手は今日の対局相手なのだからチーム内から過敏な反応が出ないとも限らない。それもどちらのチームからも。あえて邪推を加えるなら三尋木咏のような有名選手の車には妙な記者が張り付いていないとも限らない。その点タクシーなら風景に紛れ込むことができる。異性とのデートというわけでもないのだからそこまで考えるのはやりすぎなのだろうが、その辺りをいちいち分けるのも面倒なのかもしれない。彼女の促すままに良子はタクシーに乗り込んだ。

意外なほど車中は静かだった。良子の隣に座る彼女はたしかに機嫌が良さそうだったが、ただそれだけで何を話すというわけでもない。窓の外からたまに入る夜の光が、彼女の横顔をこの世のものとは思われぬほど美しく照らすだけだった。世間的には咏はゆるいが無口ではなく、解説などではお笑い寄りのイメージがある。良子もそれに賛同するものだが、だからこそこの静かな状況はなんとなく居心地が悪かった。そういえばインターハイを覗きに行ったときにも似たような事態になったな、とふと思ひ出す。

「よくこのように他の選手と食事に出られるのですか？」

「ん？ なんだい嫉妬かい？」

「そうではなく。単純に交友関係が広いのか気になっただけですよ」

「わかんねーけど広くはないんじゃないかね？ はやりさんとかにお呼ばれることもある

けど」

「となると意外ですね。なぜ私をお誘いくださったのか」

「そんなん決まってるだろー。面白そうだからだよ」

競技プロという括りに位置付けられた上での「面白そう」という言葉には通常よりも意味が重ねられていることが多い。そのぶん解釈も多様になるし、なかなか単純には受け取れない。現に良子もそれをどう取るべきか決めあぐねていた。厳密な意味では平坦ではない道の上をタクシーが跳ねる。車中の体も揺れる。目指すのは中華料理屋で、個室を予約してあるという。咏のように着物のせいもある。目立つ容姿をしていてはなかなか普通の店には入れまい。良子はそう納得して、意志の力でこれから食べる料理のほうに思考を巡らせることにした。

その食事では麻雀に関わらない話や連絡先交換などしか行われずに良子は驚いたのだが、それはまた別の話である。

二十五

それなりの期間があるとされる人生においても、覚悟という言葉と向かい合う機会はそれほど多くはない。あるいはその言葉を軽く見積もればそんなことはないのかも知れないが。ただ、董には多くの物事を重く見る傾向がある。そのこと自体の良し悪しはさておいて、彼女はまだ十七歳でしかないのに覚悟を定める必要があった。立場のせいもあつたのかもしれないが、大きな原因は彼女が弘世董であることだった。頭の回転が早いこともそうだし、生真面目に過ぎた。そして一定の意味で善意の人間だったからだ。

その日の登校中を董はよく覚えていない。気が付けば照を伴つて廊下を歩いているような感じさえした。放課後の廊下はひどく寒く冷たく、太陽が出ていないこともそれに拍車をかけていた。窓の向こうでは風が唸っていた。

董はその日をとくに考え抜いて選んだというわけではなかった。ただなんとなく、目

を覚ました瞬間に今日だということを理解したというのが表現としてはもっとも近かった。それに日を選んでどうなることもない。次の日はどうしたつてやってくるし、結果が変わることなどありえない。その日の機嫌で対応が変わるような相手なら彼女も頭を悩ませたのかもしれないが、今回に限ってはそんなことを考える必要はないと言っている。あるいは不可能だと言ったほうが適切かもしれない。どちらにせよ宮永照という名前にはそういった意味が含まれてしまっていた。

「最近の董は練習中に部屋を出ることが増えた」

お前が何を言う、と董は心の中で優しい色合いのため息をついた。大きな大会は近くには控えておらず、むしろそのせいなのかメディア対応のために照はよく練習の席を外すことがあった。それで疲れたところをまるで見せないのだから大したものだと董は常々思っていた。おそらく自分がその立場にあつたとしたら無理をしている風の演技をするか毒づくかをしているに違いない、とも。

一定のリズムで上履きがリノリウムの床を叩く音が続いて、それがあるタイミングで止まった。どこ、と説明するのも難しい中途半端な場所だった。廊下ではある。そしてそれ以外に言いようがない。そんな場所で董は足を止めて何も聞かずについてきた少女に向かい合った。

照の動きは不自然なほどにびたりとかみ合った。初めから止まることがわかってい

たように二人の距離は一定に保たれている。董の真向かいにある顔はいつもの寸分の違いもない。そこに起こる感情は慣れなどであるはずがなく、やはり恐怖に近いものだった。止まったままの時計を眺めることに何も思わないのならそんなこともないのかもしれないが、残念ながら弘世董の感性はそのようにできてはいなかった。

「お前、自分の妹に何をしたんだ？」

努めて詰問にならないようにさりげなく董は問うた。これは宮永照に刺さるはずの問いだったから。より正確には、根幹や核心といったものに触れるものでなければならなかったから。

それでも彼女はただまっすぐ董を見つめているだけだった。少なくとも董には動揺の欠片さえ見つけられなかった。その表情は朝のホームルームの担任の話を聞いているのと差がなかった。そのせいでむしろ混乱したのは董のほうだったが、質問した側であつたために彼女が言葉が続けることはなかった。

「……………麻雀を嫌いにさせた、と思う」

ひとつの回答が別の疑問を連れてきた。照に妹がいることを予想していた人間は過去にもいたのだろうし、今現在も部にいるだろう。そんなことは董にはわかつていしかしこの先はそうではない。おそらくはここからが誰も知らない宮永照の領域なのだろう。それは麻雀的ではない、ひとりの人間としての意味合いにおいてだ。当然、董

の中で妹が麻雀を嫌いになるようにしてしまったことと妹がいないと口にするにつなかりは見出せない。あるべきではないとさえ思える。その言い方は価値基準に絶対的な間違いがあるように感じるからだ。

董は言葉を選ばなければならなかった。とくに目の前の人間が気難しいというわけではないし、言い方を少し間違えてしまったからといって誤解に端を発する面倒事も起こりはしないだろう。ただ、問いをつなぎ、この会話を完成させるには絶対に触れてはならない何か潜んでいる。董にはそれがありありと感じられた。

「仲は、よかったのか？」

「よく一緒に遊んだ。本の話もできたし、仲はよかったと思う」

ほんのわずかなあいだけ空いた間は、思い出すための時間だったに違いない。しかしそれこそが異常事態であることを明確に示していると董はすぐに気が付いた。宮永照という像にぶれが見え始めている。打てば響くと言えるまでに明朗な受け答えを常としていたわけではないが、それでも会話のやり取りにおいて照は一瞬でさえ詰まることはなかった。それが、一年と半年以上のあいだ通し続けていたそれが目の前で崩れている。このことを軽く流せるほど董は目の前の少女と浅い付き合いをしてきたつもりはない。そしてそのことを放っておくつもりもない。

照の口からこぼれた言葉が過去形であることに董は不安を覚えた。もしかしたら本

当に触れるべきでないことがあったのかもしれない。仮に不幸な過去があったと仮定して、そこに踏み込んでしまえば彼女はただの思慮の欠けた人物でしかなくなってしまう。たった一度だけでも取り返せない失敗はたしかに存在する。たとえそれが烙印に近いレベルで完璧であることを要求され、また達成している輩であってもだ。それでも彼女は止まるわけにはいかなかった。理由など挙げようと思えばいくつも出てくるのだろうが、どうこう言ったところで宮永照は弘世董にとつて一番の友人なのだ。分厚い仮面の下に苦しみを隠しているのだとしたら、救つてあげたいと思つてしまう。

「……よく麻雀はしたのか？」

「うん。家族で」

「それは初耳だな、そこで腕を磨いたわけだ」

「みんなが本気で勝ちに来てたから、私も負けるわけにはいかなくて」

どんな魔境だよ、と董は顔に出ないように嘆息した。既に絶対的ときえ言われている宮永照が意気込まないとならないような卓など、多少は彼女が未熟だつただろうことを差し引いても、想像するのは難しい。それはつまり、半荘の中で宮永照よりも早く高い和了を達成できる存在を意味している。妹がそれにあたるのだろうかと考えて、董はすぐにそれをひっこめた。それは信じられないというよりも、どちらかといえば信じたくないという意味合いのほうが強かった。

しかしそこには冗談を匂わせるものが何もなかった。もはや具体的な意味合いを失い、象徴的名詞としての「妹」が存在していることだけが疑えない事実だった。しかしその存在が宮永照に与えた影響がどの程度のものなのか、それが複雑であるからわからない。手がかりとなる情報がないのだから、堇にそれが見渡せるわけがない。堇の目の前にあるのは結果だけだった。過程をすべてすつ飛ばして高校生最強という結果だけが提示されている。堇は胃の底にうんざりするような臭いのする体液が分泌されたような気がしていた。

あまり深くならないようにひとつ息を吸い込んで、堇は口を開いた。

「なあ、照。それで　「私に妹がない」　っていうのはどういう意味だったんだ？」

昇降口の自販機にしか売っていない缶ジュースを買うために、誠子はいつも部室からそこまでの距離を歩かなければならない。そして誠子は気分によつて歩くコースを変えるタイプだったから、その日は階段を先に下りようかと考えた。そこにはどんな意図もなかった。人間というものは時に、ただなんとなく、としか説明しようのない行動をとるものである。誠子がいざ階段を下りてみると、そこには尊敬する部長の姿があつ

た。彼女がこんなところにいるのは意外なような気もするが、部室を出るときにいなかったじゃないかと言われれば誠子はきつとまあそうかと納得したのに違いない。しかしそんなことは誠子の頭を掠めもしなかった。目の前の憧れの存在が、廊下の窓に手をつけて呼吸を乱していたからである。

「先輩！ どうしたんですか!？」

あまりはつきりしているとは言えそうにない目を誠子のほうに向けて、彼女は無理やり作つたとわかる優しい笑顔を見せている。額にはうつつすら汗が浮かび、そのせいなのか艶のある黒髪が幾筋か貼りついており、状況にそぐわないと理解していたものの誠子はそれに色つぽさをさえ感じた。

「……ああ、なんでもないよ。ちよつと体を冷やしたのかもかもしれない」

「そんなの信じるわけないでしょう！ もう風邪がピークに来ている人のそれですよ！」

そう言つて誠子は強引に腕を引いて、保健室に向かうことを決断した。そうでもしなければこの責任感の強い部長は強がつて平気なふりをするに違いない。だから誠子は行動を起こさなければならなかった。まさか立っているのもままならないほどふらついていたのだろう人間を、それも尊敬する存在を無視して缶ジュースを買いに行けるほど彼女は思いやりを捨ててはいない。掴んだその腕は制服の厚みを差し引く必要もな

く細く、あまりにも力弱かった。ぎよつとして誠子が振り向くと小さくたたらを踏む姿がそこにあつて、それを目にした瞬間にこれはただの風邪ではないのかもしれないという考えが頭をよぎった。

慌てて腕を引くのをやめて、今度は背中に腕を回して寄り添うようにした。そうすることで体勢が落ち着いて、まず冷静でなければならかつた誠子の動揺もやつと収まつた。そこからのせいぜいが数十歩程度を誠子はよく覚えていない。董に対して全神経を集中していたからなのかもしれないが、別の日にだつて思い出そうとすらしなかつた。重要なのは彼女にとって大きな存在である董の安否であつて、その道中など結局どうでもいいことだつた。

勝手にベッドに寝かせている以上、誠子は保健室にいなかった養護教諭を待たなければならなかつた。放課後とはいえ本当ならいてもらわなくては困るのだが、現にいないのだからどうしようもない。ベッド脇に置かれている丸椅子に腰かけてひとつ息をつく。待つにしても見通しが立たないのは気が利いていゝとは言えない。ちらとベッドのほうに目をやると詭えられたような長いまつ毛にクールな眼差しが天井を貫いていた。こんなときくらい眠つてしまえばいいのに、と誠子は思ったが口にはださなかつた。

「亦野、私はほんとうに風邪をひいているわけじゃないんだ」

「風邪じゃないにしたらって体調崩してますよ、大差ありませんって」

「怖いものを見たんだよ」

「……へ？」

「そのままの意味だ。ああ、本当にキツかったな、まったく」

「え、あ、おぼけとか、そういう？」

「だったらいくらかマシだと思うよ。まいった、夢に見そうだ」

まったく誠子には理解が及ばないまま話は進行していく。寝ていてさえ綺麗な姿勢を保った彼女に冗談を言っている様子は無い。真面目一辺倒な印象を持たれがちな董ではあったが、ひとりの人間として接するときには冗談を言うこともあった。だからこそ誰からも慕われる存在であることができたし、周囲が評する完璧という言葉にはそういった部分も含まれていた。

「なあ赤野、私は食われてしまう側の人間なんだろうか」

普段の空気を切り裂くようなよく通る声と比べたら、保健室で誠子に届いたのは信じられないほど弱くか細いものだった。付け加えるならその内容も弱々しい。そしてそれは誠子にとっては許されることではなかった。

「あり得ません」

「そうか？」

「私たちは白糸台です。王者です。その白糸台を束ねるあなたが食われる側？ ギャグにだつてならないです。考えることさえ許されないと私は思います。虎は食べられることを考えながら日々を過ごしませんよね。それと変わらないですよ」

「……そうか」

「そうだよな、とさらに呟くと彼女は誠子が座っているのとは逆のほうに体の向きを変えた。」

二十六

高校麻雀における春季団体戦は基本的にその前の夏の実績、つまりはインターハイだ、によって出場校が選抜される。辞退や想定外のことがあった場合には繰り上がりで別の高校が出てくることもあるが、やはりそれは例外にあたる。

夏の団体を連覇した白糸台高校が漏れるわけはなく、トーナメント表を見れば隅の第一シードが割り当てられていた。二年生にして個人戦を制してみせた宮永照がいるならばそれも当然だと見る向きが多かったが、関係者のあいだではそれだけに留まらないだろうという声も多く上がっていた。急激に伸びた新二年生の存在の噂もあれば新しく入ってくる怪物の噂もあった。しかしそれ以上に弘世董の名前がそのコミユニティの中では強烈に響いていた。

三月も上旬とあればまだまだ寒い。

外を歩く人々のほとんどはコートや羽織っている。吐息は白く、鼻の頭は赤い。春の選抜が行われるホールの外は思った以上に閑散としていた。気温が10℃前後のところをわざわざうろつく気にもならないだろう。その証拠にホールの中は盛況だった。観戦を楽しむ客からすればそれは祭りに違いなかつたし、寒い外より暖かい室内はそれだけで気分が上向くものだった。

ざわめくホールの中の人のいない隅の、そのソファがある一角にひとりの少女がいる。似合わないお茶のペットボトルを手に、外から見ると限りは気持ち落ち着けようと歩き回っているらしい。黒く艶のある長い髪が歩調に合わせてしなやかに揺れる。鋭い眼光は床に向けられている。もはや美しいと呼べる領域に入った彼女の顔を見られないことと必要以上に力の入った視線に射抜かれずに済むことを天秤にかけたとき、どちらに軍配が上がるかは議論の起こるところに違いない。

董が団体レギュラーを除いた部の引率を遠山に任せてから三十分近くが経っていた。「ひとりで見るところを見かけるとは思わなかつたな」

そう声をかけられて董が振り返ると、どこかの制服を着た少女が立っていた。かたचितのいい目とやわらかい質の髪が印象的だ。物覚えに関しては何れも多少の自負のある董ではあつたが、しかし彼女の記憶がとんとない。もし一度見かけたことがあるとするならこ

の整った顔立ちを忘れるというのは難しそうだ。ならば初対面とするのが自然だが、どうやら相手の様子からみるに知己のようではあるらしい。さてヒントはあるだろうかと考えて、彼女の制服に見覚えがあるのに思い当たった。しかしそれまでだった。まさかよその学校の制服を見ただけでこの生徒かを当てるような芸当ができるはずもない。これはもう仕方ないと諦めようかと思つた瞬間だった。

「ほれ、やから言うたやろ。お前がそのナリで話しかけてもすーちゃん困るだけやー、て」

「……本当にメガネを外したくらいで私とわからなくなるものなのか」
「他にも変更点いろいろあるやろ」

後ろからひよっこり出てきたのが姫松高校のエースを務める愛宕洋榎であることを認め、董は軽い混乱に襲われた。愛宕洋榎とセットで自分に話しかけてくる人物はたった一人しか思いつかず、その彼女の印象と目の前の少女の印象があまりにも違うものだったからだ。董の知るその人物の印象は、もつと鋭く、立ち居振る舞いに強さを感じさせるものですらある。しかしいま目の前にいるのは、言われてみれば態度こそ似たようなものではあるものの、誰も文句の言えない普遍的なレベルの美少女だ。ひと目で同一人物だと見抜くのは不可能だろうと董は叫びたくなつた。

一歩下がって全体像を眺めてみる。後ろに一本に下げていた髪は、やわらかい髪質で

あればこう広がっても不自然はない。メガネの奥にあったはずの鋭い目も思い出してみれば卓を囲んだその向こう側にしか見られなかったものだ。それでも董にはまだ違和感が残り、つい口走ってしまった。

「……あ、いや、胸のサイズが」

「こいつ打つときサラシ巻いとんねん、ピッタアアアいうて。中学からやで?」

「うるさいな、余計な動きがないほうが集中できるだろう」

「つかああ、聞いた? なあすーちゃん、これ、この余裕。持てるモンの論理よ」

そう言つて洋榎は自分の胸を見下ろし、一撫でして董のほうを向いた。

「……………うちだけやんか」

勝手にどよどよした空気をまとい始めた洋榎は収拾がつかないと判断したのか、辻垣内智葉は二人に対応できるように向けていた身を董のほうへと向け直した。考えてみれば全国でも間違いないくトップに数えられる二人がこんな会場の隅にやって来ていることが董には不思議に思えた。気まぐれに足を運ぶような場所ではないことは董自身がよくわかっている。

「で、弘世、部の連中は?」

「ああ、他の部員に任せただ。優秀な仲間がいて助かっているよ」

「ふむ、にしてもお前、いまさら緊張か? こんなところをうろうろと」

「いや違うよ、緊張はないんだ。全国なら夏にも出てたわけだし」

「それもそうか。それならなおさら理由がわからないが」

「なんだか視線を集めてるようで落ち着かないんだよ、ロビーなんかとくにひどかった」
気持ちの置き場が見つからないといった表情の董が状況の端的な説明をすると、目の前の少女の顔が怪訝な色に変わっていった。彼女には似合わないと言っているもので、董はそういった表情のレパートリーが言葉に存在するとは考えもしなかった。同時にそれほど困惑するような発言をしただろうかと振り返る。

「何を言っている？ お前が視線を集めるのは当然だろう」

「そこそ何を言っている、だ。白糸台で注目されるのはあいつじゃないか」

「はあ、とわざとらしく言葉がため息をついた。意味するところはわざわざ言葉にするまでもないとしても言いたげだ。お前は何もわかっていないのか、と。」

その隣では復活を果たした洋榎がきよんとしている。冗談だという訂正がすぐに入って笑い話になると思っていたものが、そのタイミングを失ってどう扱ってよいのかわからないといった表情そのものだ。

「……ああいや、お前が気付かないわけがないか。まったく、謙虚も行き過ぎれば下品だぞ」

「そーいや雑誌のインタビューも期待しとったやろアレ。二か月くらい前に出たやつ」

「私が宮永照を倒します、とでも言えばよかったか?」

それを聞いて洋榎はわかりやすく満足そうに何度もうなずいた。

「すーちゃんはもうこっち側の人間やからな、自分の中でもええからきちんと言葉にして覚悟しておかんな」

「夏の大会にしろこのあいだの合同練習にしろ戦績は優秀なものだったしな、実際」

堇に素直に湧いた感情は、うれしい、というものだった。何度も何度も中学のころからその対局映像を振り返り、目標とし憧れ続けた二人にこう言ってもらえたことはほとんど望外とだっていいほどだった。もしかしたら照に認められたときよりも大きな感情だったかもしれない。そして、それとは違った理由で肌が粟立った。

宮永照を理解した。あの秋の深まった廊下で告げられた内容が、季節をひとつ通り越したここで完全な意味をもって堇に下りてきた。彼女が言う “妹がない” の意味を問うて返ってきた言葉を堇は一語たりとも忘れてはいない。もしそれが何の比喩でもなかったとしたら。

「あ、ま、待つてくれ、注目を集めるとは、そういう意味なのか?」

「みんなが注目するなら魔物どもも注目する。自然で難儀な話やな」

「連中もただ殺されるのを待つているわけにもいかないんだろうさ、わからなくはないが」

妙に剣呑な表現を挟んだ智葉に目を向けると、彼女の疲れた視線は外されていた。決して冗談を言っているわけではないのだと董は理解した。おそらくこの二人は既にその領域での戦いを経験している。つまり、殺す殺されるの領域の話だ。

もし白糸台に入学していなかったら、宮永照と出会っていなければ、そんなことを聞かされたとしても董は一笑に付しただろう。あるいは意識が正常かどうかを確かめたかもしれない。しかし今の彼女にはそれが冗談でないことがわかる。そうではないと理解はしていても、このおよそ二年間の生活がその現実に存在することへの説得力を強めるためだけの期間に過ぎないとさえ思えるほどの力を有していたからだ。

「だがな弘世、私たち人間のゲームに魔物が棲みつくのはルール違反なんだよ」

「ま、いうて打ってるのは人間なワケやから言い方に不満が残るかもしらんけど堪忍してな」

「殺す、っていうのは、つまり、そういう比喻なんだな？」

「ん、完ツ全に叩きのめすいうこっちゃ。したらそいつはもう出てこれん」

照を理解したのと同時にぼんやりと見えた異質の存在たちの全体像が、彼女たちの言葉によって補強され、ピースが速度を増して組みあがっていく。個人としてのあの鉄面皮の奥に何が渦巻いていたのかを知る術はないが、いま自身がある意図のもとで見られている可能性を明確に認識した。吐き気が董を襲う。おぞましい色をした感情が心臓

から体中のあらゆる血管を通つて全身を巡り神経のすべてを違う色へと変えていく。

「……確認させてくれ、私も狙われているんだな？」

「あいつらは自身に届き得る刃を食らつて強くなる。そうとしか説明ができない」

「そんな深刻に考えんでもええとは思うけどな、強いのだと思いつ切り打つだけの話や」

その領域で生き残つてきたのだろう二人の言葉は重く、そしてその流れが一般的には知る由もないかたちで連綿と受け継がれてきたことを想起させた。それはある意味では世界的な麻雀の流行と関連さえしているのかもしれない。近いところでも表舞台から突然姿を消した世界的に名を馳せた怪物の名も頭に浮かぶ。彼女がどちら側に属していたのかはわからないが、その流れの中にいたと考えるのが自然のように董には思えた。

「ああ、夏が楽しみやな、天江みたいのがまた来るんやろ？ わくわくが止まらない」

「あんなのがホイホイ出てきてたまるか、面倒で仕方ない」

「か、面倒の一言で済ますんやからお前も大概やろ。それにすーちゃんのとこのあの金髪がおるやろ、辻垣内、お前あれと卓囲んだか？」

「思い出させるな」

董は頭痛をこれ以上進行させないために口を挟んだ。

「ところで愛宕、その “すーちゃん” というのは私のこと、……なんだよな？」

「なんや今さらかい。ええやろ、かわいいやろ」

弘世董という個は、おそらく夏に訪れるだろう決戦をここで覚悟した。

二十七

試合と試合の合間は、それこそ団体戦の中の先鋒戦と次鋒戦のような間であつても長く感じられる人のほうが多いようだった。休憩という意味合いもあつてか席を立つ人も珍しくない。一定以上の実力を備えていることを前提とするとはいへ、麻雀の観戦は集中力を要求する。全国レベルともなれば基本的にはそのリズムは早く、観戦側の人間は四人のプレイヤーの手が見えるだけにそのそれぞれの意図に寄り添うことが可能となる。目や脳に疲労を感じる人がちらほら見えるのも不思議ではないだろう。

「ねえ赤野先輩、ちよつといいい？」

多少不機嫌そうにひじ掛けに頬杖をついた淡が隣に座る誠子に声をかけた。声のしたほうに目をやるときに誠子は奇妙な感じを受けて、じつと二秒ほど淡を見つめた。彼女が誠子の右に座っているのは懐いたからというのが説明になるのだが、どうして懐いたかとなると誠子自身よくわからないところが残る。もちろんそのこと自体に否やはないが、言葉にできない何か胸の片隅にわずかに居心地の悪さを置いていた。とはい

えなにせ白糸台にありながらあの宮永照を標的としているくらいだ。自由人と言つてしまえばそれで終わりだが、それだけではどうにも腑に落ちないというのが誠子の実感だった。

くりくりとした丸い目が疑問の色を帯び始めた辺りで誠子は我に返つて、状況の整理を始めた。今は休憩時間だが淡の様子を見る限りそれほど短い話とも思えない。観戦中がとくに静かというわけではないが、仮に麻雀の話題でないとすれば何も気にせず話し込むのはマナーを外しているだろう。選抜された高校の対局を見逃すことに惜しさを覚えないわけではなかったが、他にも試合はあるのだしと考えた誠子は淡を外に連れ出すことに決めた。

「うん、じゃあコンビニ行くついでにしようか」

薄い雲が一面を覆っているだけ、といった空模様だった。太陽の位置は当たり前のようにはわかるし日差がないとも感じられない。晴れとも曇りとも断言するのが難しい。煮え切らない印象の天気、と誠子は心の中で評した。

誠子と淡は女子にしては珍しく、最低限の持ち物をポケットに入れるだけで、ちよつと出かける程度ではハンドバッグのような手荷物を持つとうしなかつた。いずれはその意識も変わるのかもしれないが、今はまだその時期ではないようだった。そのぶんだけ彼女たちは話すときに動作が連れ添った。手や体の動きに合わせて表情もまたよく

動いた。誠子と淡のどちらも人が人に親しみやすい印象を与えるのももしかしたらそういったものが手伝っているからかもしれない。

「そういえば上着なしで寒くない?」

「ちよつとは寒いけど今はこのブレザー見せつけたいかな、白糸台つてカンジだし」

「あ、自然すぎて気付かなかった。そつか、それうちの制服だね」

注文されたように淡はくるりと回つてみせた。おしやれはガマン、なんて格言がなるほどまかり通るわけだとアーミータイプの上着を羽織っている誠子が思わされるほどに似合っていた。

「あれ、考えてみたら難しいな、どの順番で話せばいいんだろ」

「なにそれ、そんな大変な話なの」

まるで推理ものの探偵のように顎に手をあてて考え込む彼女には、誠子の言葉はまったく届いていないようだった。しかし誠子はそのことを意に介さなかつた。大星淡がそのように自分勝手に振る舞うことは珍しいことではなかつたし、それを受け入れさせる何かが彼女にはあつた。

短いあいだのうつむきから顔を上げて、淡は口を開いた。おそらく筋道が立ったのだろう。

「ね、いま高校生でいちばん強いのもって誰だと思つ?」

「そりや宮永先輩でしょ。別の意見があるのは否定しないけど」

私もそう思う、とうんうん頷いて淡は歩を進める。普段より歩幅を短くしているぶん、誠子が淡を後に置いて進むようなことはなかった。

「じゃあさ、亦野先輩は麻雀の上達ってどう考えてる？」

「……判断力を磨くことだと思ってるよ。実戦での勘の領域も含めてね」

「私ってさ、天才じゃん」

「ん？ うん」

「だからどつちもわかっちゃってさ」

具体的に指すところが何なのかは判然としないが、誠子はこれを淡にのみ発生する問題なのだと理解することに決めた。彼女が自身を天才と呼ぶときは常に小憎らしい態度と愛らしさが伴っていた。けれど今はそれが無い。落ち込んでいるわけではないがハッピーな調子でもない。真面目なトーンに寄っている。

「亦野先輩みたいな考え方が正しいとして、じゃあテルーはどう強くなるんだろうね」

間違っても気温のせいではない寒気が誠子の背すじを駆け抜けた。なんとなく、だが疑う余地のないはずだった麻雀に対する当然の論理の基盤が突然揺らいだ。宮永照は強い。そしてそれが異能に基づいているだろうことは明白だ。そしてその関係性を肯定する限り、宮永照というプレイヤーの伸びしろは一般的なプレイヤーのそれに比して

はつきりと少ない。このことが何を意味するかを察することができないほど亦野誠子は鈍くできてはいない。判断力の入り込む余地が常人に比べて少ない彼女は、経験を経験として成長を遂げるしかないのだ。おそろしく柔らかい言い回しにしてだが。

意味もなく手が震えていた。声も出せばそうなるだろうことは考えなくてもよくわかった。打ち砕かれたのは前提であつて、その上に積み重ねてきた思考ではない。そして誰もがまず人生で出会うことのない経験であるように、彼女は前提をなくすことを初めて体験した。その衝撃は頭の中に同じ考えを何度も何度も繰り返させ、何度も何度もそれが正しくないと確認させた。

「あ、いや、待つ、結果論なのはわかるけど……」

「腹立つけどさ、二、三か月前にアタゴとかいうのと打ってわかったんだよね。上手さでいったらテルーより上はいっぱいいるって。よくよく見てみればスマレもそうじゃん」
ぐらり、と視界が歪むような気がした。先の自分の発言が淡の言葉を補強していることに遅れて気付いて誠子は愕然とした。宮永照は誠子が言うところの判断力の世界でほとんど息をしてはいない。ほとんどは言い過ぎにしても彼女が棲んでいるのは異能に規定された世界であつて、言い換えれば感触そのものから違うはずなのだ。

異能、と何気なく認識してきた言葉が字義通りの意味を持って匂い立つ。

「やつとテルーがスマレを壊そうとする目的がわかったけどね、でもダメだよ、認めな

「い

「淡、ちよつと待て、さつき　どつちもわかる”　つて」

その言葉を聞くや否や、淡の顔がぱつと弾けるように明るくなった。彼女が麻雀部の練習に参加するようになって優に半年以上を数えるが、これだけの笑顔を見た覚えは誠子にはない。それは、満面の、とかそういったものをはるかに超えて、純粋に100%隠すところのないまったくの無防備なものだった。

淡の言葉を理解し呑み込むことに脳のリソースのほぼすべてを割いていた誠子に、目の前の笑顔に意味を見つける余裕はなかった。そこになにか意味があったのだとしても意識を向けることはできなかった。ただ目の前でかわいい後輩が笑っていると認識することが限界だった。

「そうだよ。私はテルーにもなれるしスミレにもなれるの」

「……でも、淡の倒すべき目標が宮永先輩だつて言うなら」

「私も最初はスミレになるのかな、つて考えたよ。でもやつぱ違うんだよね」

「なあ、淡、いったい何を」

「言つたじゃん、私は天才だつて。どつちにもならないの。新しい最強になるの」

言葉の指すところが抽象的すぎて、誠子にはそれが何を意味しているのかはよくわからなかった。しかしその一方で目の前の少女が、口にしたことを冗談などではなく本気

で達成するつもりなのだということには理解できた。

二十八

後悔をする準備をしておけ。先日ロビーの隅での会話の終わりに愛宕洋樓と辻垣内智葉が残した言葉がそれだった。春の選抜が始まって日程が進行していくなか、董はその言葉がどうしても頭から離れなかった。なんらかの競技に取り組む相手に対してアドバイスを送る場合、後悔しないように全力を尽くせというのが一般的なものだ。当然ながら言われるまでもなく董はそうするつもりで日々を過ごしてきたし、あの二人もそうしているだろう。そこに疑いはない。しかし飛び出てきたのは後悔しろ、という真逆の言葉。さて、と董は頭を悩ませる。

部の勝利に観点を置けば、負かしてやるから覚悟しておけ、との意味にも取れる。しかしそれでは通らない。直前に話していた内容が魔物を殺すという話だったからだ。もちろんそれぞれが部に対しての思い入れはあるだろうし、その最大の表現が勝利であることも理解しているだろう。ただ、あの場はそれを飛び越えての話であったことは動かない。では後悔とは何に對してのものなのだろうか。魔物たちに挑む宿命を抱えて

しまったことに対してだろうか。いや、と董はひとりで首を振る。それならあの二人はまず止めることから入るだろう。

答えが出ないのならばいつそ聞きにいつてしまえばいいのでは、という考えが頭をよぎる。それは決して間違っていないだろうことを董は理解している。だがそれでも最後の結論として董はひとりで考えることを選んだ。彼女たちがあの場でその言い回しの理由を話さなかったのならばそのこと自体に意味がある。そう考えたからだ。今のところ董にその意味はつかめない。それにこの春の大会では董自身はどうやっても宮永照とは当たれない。個人戦がないのだ。

董が以前に比べて遥かにひとりの時間を選べるようになったのは部全体が活性化したことに起因している。董が指示を出すまでもなく部が順調に回るようになったからだ。夏の本番へ向けて、誰もががこの部で団体レギュラーの座を勝ち取り、そして全国制覇を成し遂げたいと考え行動していた。もしそうなれば前人未到の三連覇というおまけつきだ。董が積極的に統率力を発揮する必要がなくなるほど部員全体の状態が上がつている直接の原因は秋の合同練習だろう。選ばれた者もそうでなかった者もその意味を受け取った。まさかまだ入学さえしていない淡がレギュラーはもらうと公言しているなかで発奮しないわけもない。それでは名門の名折れというものだ。

董はまたこのあまり好きになれないホールを歩いていった。前と同じ期待を抱いては

いたものの、どうやら感性は変わらなかつたらしい。場所に好悪を見出さない董からすると、負の方向性とはいえこの全国大会が行われるホールはある意味では特別な場所だった。

右を見ても左を向いても選手の姿がある。この前に二人と話したような例外的な隅に行かない限りはどこもそうなのだろう。おそらくこれから始まる試合のことや他校の情報、今後における戦略などを話しているに違いない。あるいはそれも終わってしまつて雑談をしていることもあり得るが、そこまで厳密に考えるつもりは董にはなかつた。というより董は周囲にいる人々に意識を向けたくなかつた。そこらじゅうから視線が飛んでくるからだ。そういった経験がこれまでもないのではないのだが、物量が違えば意味も変わってくる。きついというのが本音だった。これ以上のものを照が当たり前に耐えていたのかと思うと尊敬の念さえ芽生えそうになつた。

いつともうホテルに戻つてしまおうかとも考えたあたりで、知った顔が小説を読んでいるのに出くわした。場所のことなど考えにないのだろう。周囲はちよつと離れたところから彼女を観察している。

「照。どうしたこんなところで。ロビーより観客席のほうが椅子は上等だろう」
「私が空いてる席に座ろうとすると周りによくない」

想像に難くない。目の前の鉄面皮がひとつしか空いていない席に座ることに躊躇し

ないことは明白だが、それを周囲が当然と受け取らないのも同じくらいわかりきっている。下手をすれば変な気をきかせて席を立つ者まで出てきかねない。本当に気にしているかどうかは別にして、彼女も自身の立ち位置は飽きるほど叩き込まれているだろう。それも董の想像もつかないくらいに。おそらくそれがあるから観客席は遠慮したのだろう。だからといってこんなに人通りの多いロビーで読書にふけるのはやはりずれていると言えるが。

「そうか」

「董は？ てつきり観戦しながら分析でもしてるかと思つてた」

「ある程度のデータは事前に揃っているし、今夜まとめてやるつもりだった」

「そういう柔軟な考え方は大事だと思う。これまで董は真面目すぎた」

「意地悪を言ってくれるなよ。私も部長になつて初めての大きい大会なんだ、緊張してるんだ」

そう言つてみたところで照の表情は動かない。まるで董の冗談なんて聞いてもいなかのようだった。お互いに真剣なことでないのは了解のうえだが、それでもこの見透かすような目はあまり気分のいいものではない。

何がどう作用したということもなく、ただ二人は離れようとはしなかった。董は照の隣に座つて、照はそれに何を言うでもなく手元の文庫本に目を落とした。よく学校で見

られる姿だった。

「それ、何を読んでるんだ？」

「わたしが・棄てた・女」

「それがタイトルなのか？」

「そう。遠藤周作というひとの作品」

「ああ、その人なら聞き覚えがあるな。面白いのか？」

「まだわからない。途中」

それはそうだ、と董は下がることにした。たしかに本など読み終わってみなければその評価を決定するのは難しい。序盤中盤と面白くても最後までどうしようもなくつまらなくなることもあるだろう。その逆だってあるかもしれない。それは誠実な態度で、油断していない。

「そういえば照、今年はいなくならないんだな」

「去年は理由があった」

宮永照が昨年の春の選抜大会をまるごと欠席したのはまだファンのあいだでは記憶に新しいところで、それを心配する声もあった。揶揄するようなものもあったがわずかなもので、学校側はいちいち対応まではしなかった。内情を知らない者はいい気なものだと言いたくなるが、それを目の当たりにした白糸台の二年生でさえ内情を知らない。

董も知らない。照本人を除いて誰も知らないのが事実である。水を向けたくなる董の心情も理解できるものだった。

それを問われての照の返答はいつもの通りにすぐに返ってきた。そのテンポだけを見るなら、隠すようなこともなければ恥じることもないといった具合だった。彼女の声の調子は変わらないからそれ以外の判断材料がないのだ。とはいっても返答に詰まることなどこの二年間で董もたった一度しか見たことがないのだから、それを判断材料として扱ってよいのかは難しいところだった。

「その理由は聞かせてもらえるのか？」

「最終的には、私にも感情があるということ」

「ひとつもわからないんだが」

「楽しむ気持ちも悲しむ気持ちも、惜しむ気持ちもある」

「それは知っている。少なくとも私はお前と友達だからな」

「そうだね」

そう言うとはまた文庫本に視線を落としたり。説明は終わったと思つたのかもしれないし、これ以上話すつもりはないとの意思表示なのかもしれない。こうなつてしまえば董にはどうにもできない。聞き直すという選択肢はもちろんあつたのだが、董の気は進まなかつた。ちよつかい程度で始めた話で詰めても仕方がない。それに聞かれて楽

しい話でない可能性は高い。無断で大会ごと欠席と考えれば重大な問題が起きていたこともあり得る話だ。

ここで照を見かけるまでなんとなくホテルに戻ろうかと思っていた董は、結局戻るところをしなかった。照の隣に座って、ただ何もせずに時間が経つのを待っていた。周りから見ればさぞ違和感のある脅威に映っただろう。最大の優勝候補のダブルエースと言つてもいい二人が言葉も交わさずに、ただそこにいる。誰を待っているわけでもなければどこに行こうということもない。それはある意味で彼女たちの立ち位置を示していた。

それから三十分が経過した。

「ねえ董」

「どうした」

「この大会で本気は出す？」

「全試合はさすがにしないな。というより通して三局四局がいいところだろう」

「理由は？」

「知つての通り私の武器はバレても問題ない。が、戦術の幅を狭める必要はないからな。ツモもできればオリも選択できる。要は使いどころというやつだよ」

「そう」

「感謝してるよ。私のこの形はお前のアトバイスがなければ完成しなかったんだからな」

言葉にして董は冷たいものが背筋を駆け抜けるのを意識せずにはいられなかった。彼女のこの武器は、狙撃は宮永照の上を行くためのものだ。連荘を止めるためだけのために生まれた他家のアシストが姿かたちを変えて成ったものだ。その武器を手に入れたことで弘世董は読みの精度を上げ、プレーそのものの質を高めた。そしてそれを誰が導いたのかを理解できないほど董は鈍くない。

彼女の牙は、魔物に届くまでになったのだ。岩のようなりアリティがそこにあつた。疑っていたわけではない彼女たちの言っていたことが、パズルの最後のピースをはめたようにぴたりと動かなくなる。血の匂いがした。いや、やつと気付いたのかもしれない。

董の肌がいつせいに粟立つ。宮永照は、ずっとそれを望んでいたのだ。打とう、勝負しようとしていた。去年もそうだ。西東京の個人地区予選で董が潰されたあのときも。

（あのとき私は勝つつもりで打つてはいなかった）

一方で常勝の怪物はどうだったか。ただの一度も手を抜かず、誰を相手にしても変わることなく全力を尽くして勝利を重ねた。その姿勢は部に入ったときから貫かれてい

る。彼女は姿勢で示し続けていた。手を抜くな、全力で向かい合えと。主張していたのだ。食い合おうと。

堇がそれをどう感じたかを正確に言葉で表現することは難しい。ひどく重たい、澱んだ感情だ。大きな恒星が星系を作る。それを中心にして世界がぐるぐる回る。そして、ちよつとずつ中心に引き寄せられていく。誰も逆らえない。生命に栄養が必要なように。

ふと、後悔とはこれのことなのだろうかと堇は考えた。これでも納得できそうだと思えたが、しかしなんとなく違うような気がした。